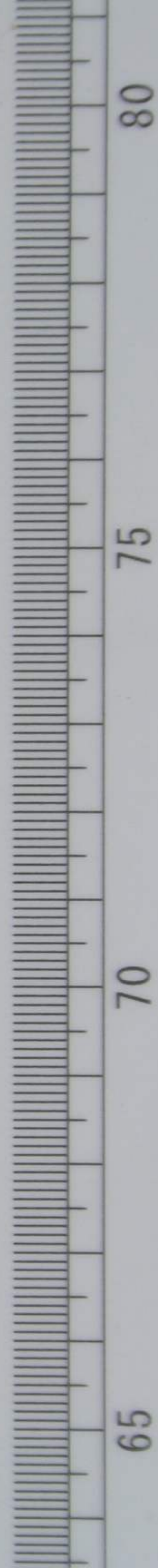
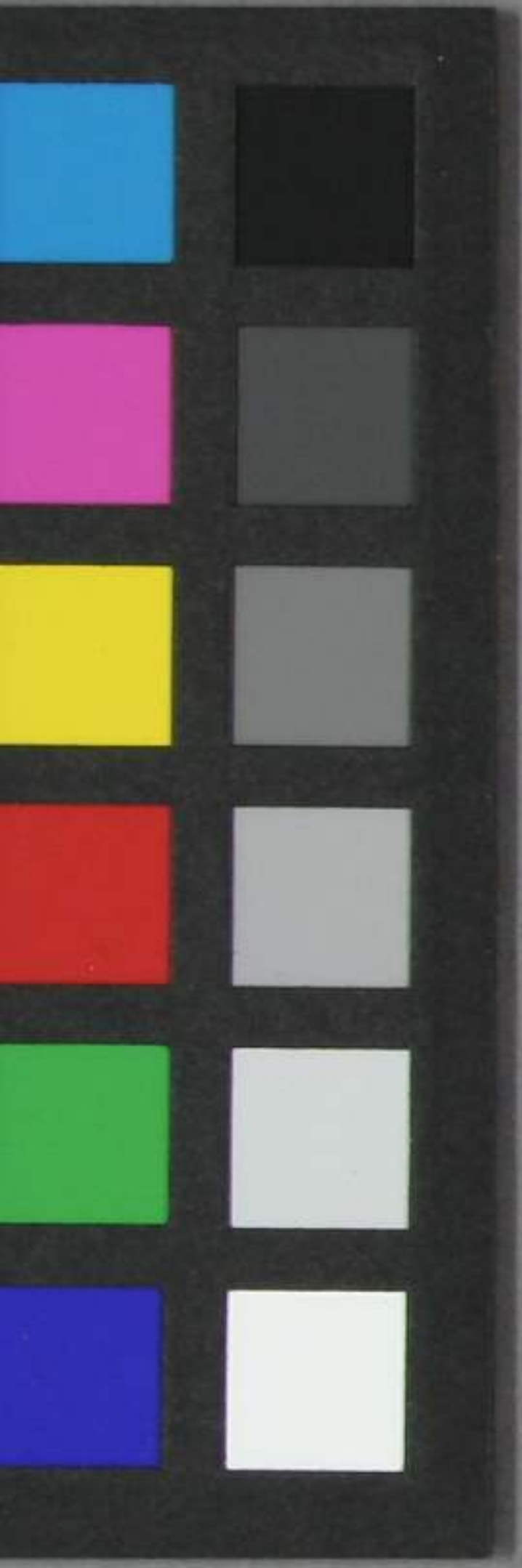
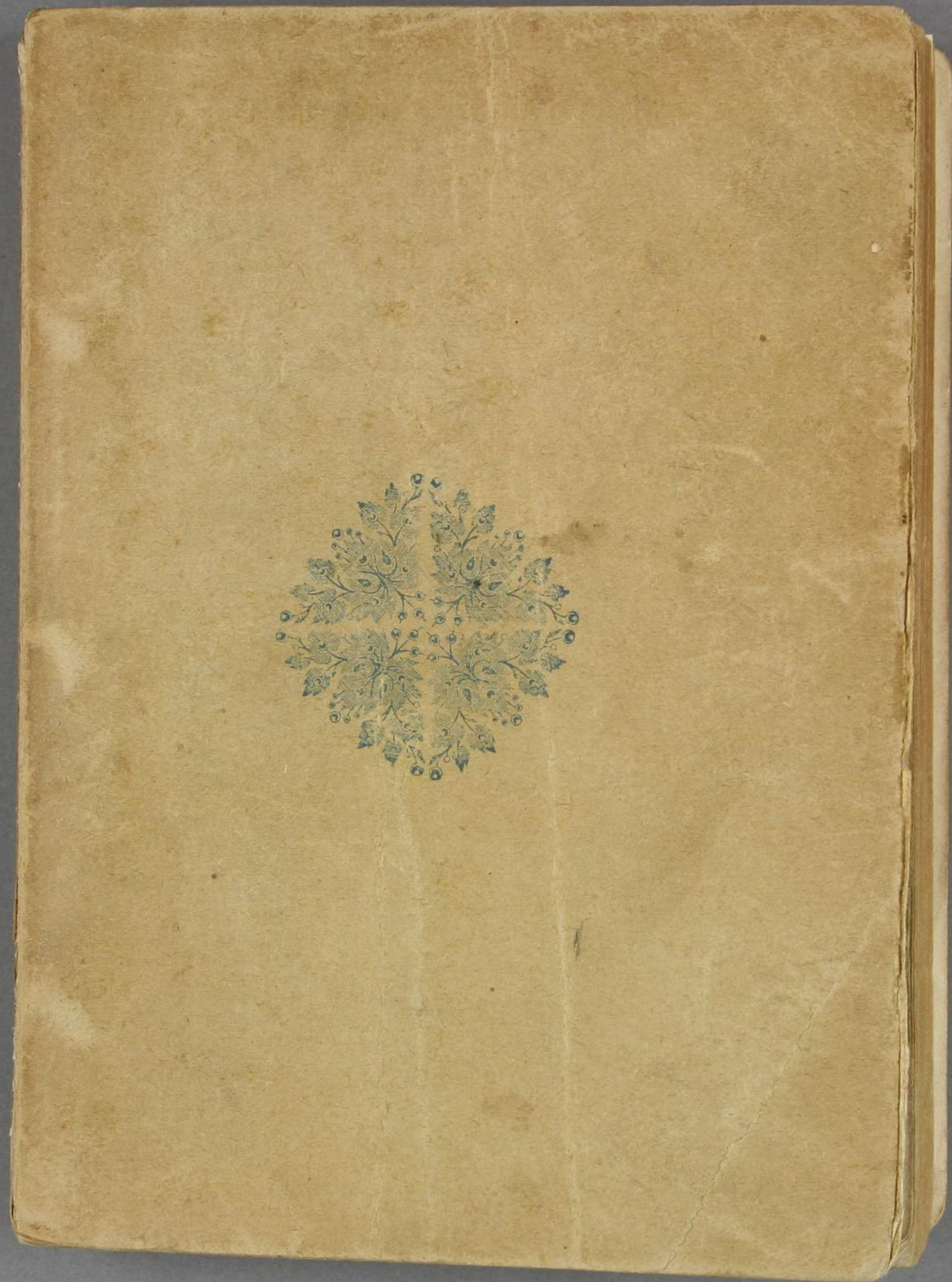


竹の里人選歌



竹の里人選歌

七



和久良

竹の里人選歌は吾が

正岡先生が皇國特有の文學たる歌の、千年荒敗に歸し陳々相倚るの陋態にあるを歎くの餘り、折しも俳句革新の偉業漸く成功を告ぐるに際し、更に進で歌の革新復興を思ひ立ち、其猛烈なる精力を振り起して「日本」新聞上に種々なる手段を盡されたるの結果、遂に明治三十三年一月初刊の同紙上に短歌募集の事ありしに初り、一回進歩を重ね、年一年變化を経て、同三十五年

の夏、病篤くして自ら其選を爲す能はさるに至れる迄の選歌集なり。

其歲月僅に二年有半に過ぎして而かも長短歌實に三千を數ふるは又盛なりと云はざるを得ず、固より革新の業未だ創始の期に屬するもの、之を以て直に完璧のものゝ爲す能はざるは勿論なりと雖も、此三千の歌林正しく根岸派發祥の地にして、今日を爲せるの基礎又實に茲にあり、後進の士依て以て道を是に求めは聊か其向ふ所を知るに足るへし、且つ夫れ後世明治盛世

の歌史を編するものあらば、當時の歌壇に大光明を放ちたる、所謂根岸派なるものが如何なる徑路によりて、發達成功したるかを知るを得む。猶讀者に注意すべきの一事は、募集歌第二回は第一回と同じからず、第四回は又第三回と同じからず、明治三十四年は即三十三年と同じからず、三十五年は又三十四年と異なる、先生の研究歩を進むるに従て、標準次第に高く、選拔益々嚴を加ふ、應募數の次を逐ふて減却するに至れるは全く是れが爲なりとす、短歌漸く減して長歌相

四
次で加はり、零碎なる短歌全く跡を絶ちて、連作の短歌を顯出せる等、明に進移變化の跡を示せるを注意せよ、「日本」週報選歌の頃なり瀧の課題出るや予は長塚子と共に、瀧を見むために三日間日光に旅行せり、長塚子作歌百に近くして、選抜を得たるもの僅に二首、其後松なる題あるや予は其歌を作らんため、駿河の三保に遊ひ、二日間に得たる長短歌數首、悉く抹却されたることあり、選者の選如何に峻嚴にして、應募者又如何に奮勵したるかを知るへし、如斯してなれるも

の即竹乃里人選歌是なり、讀者願くは輕々讀過
すること勿れ

明治三十七年四月二十六日

伊藤左千夫謹述

凡 例

一、竹乃里人選歌は、正岡先生が竹乃里人の名を以て、明治三十三年一月初刊の「日本」新聞より始めて本紙及週報募集若くは投書の歌に就き選抜掲載せる歌を集めたるものなり。

一、序するに年次を以てせるものは、進歩發達變化の跡を示さむが爲にして且つ詞書頗る長き歌等にありては目次を立つること甚だ困難なればなり。

一、課題と記せるは募集の歌にて特に記載なき分は随時投書のものなり。

一、小鳥の雛の長歌一編(左千夫)は「日本」に掲載なき歌なれども、當應募の期に後れたる爲に掲載し得ざりしものにて、先生の取ると云はれしものなれば茲に出すことゝせるものなり。

一、詠接骨木(左千夫)四月の末には京に上らむと思ひ云々節の歌とは、先生の選を以て「日本」に掲げたるものにあらねど、當時先生より面白しとの稱ありたるものなれば同じく茲に出

せり。

一、時日の順序整はぬ所あるは「日本」本紙と週報を各別に纏めたるが故なり。

一、祝賀の部及び雑の部等の記入は聊か見易からむが爲めのみ課題以外の歌は時日の順序を變更したるもの二三あるべし。

竹の里人選歌目次

○明治三十三年

- 一、新年雜詠(募集)
- 一、森 (同)
- 一、櫻花 (同)
- 一、第三回募集短歌に就て(先生の文)
- 一、同人投書歌
- 一、祝賀
- 一、讀平家物語(募集)

一、募集歌「讀平家物語」に就て(先生の文)

一、雜歌

一、瀧(募集)

一、雜歌

一、祝賀

一、雜歌

一、祝賀

一、雪(募集旋頭歌)

○明治三十四年

一、雜歌

一、祝賀

以下週報課題

一、紙鳶、雪中竹、寺

一、冬月、母、初午、氷

一、汽車、神、春淺

一、酒、春風、灸

一、豆の花、鯉、念佛

一、滑稽、牡丹、帶

一、池、覆盆子

- 一、金魚、夢、橋
- 一、灯、浮巢、別莊
- 一、富士詣、箱、鳳仙花
- 一、商、瓢、酒、鯊釣
- 一、波、蚯蚓、鑛毒
- 一、鯢漬、髮、冬の夜
- 一、山 以上
- 一、雜歌(課題外)

○明治三十五年

- 一、雜歌
- 一、犬(以下週報課題)
- 一、氷柱、茶、節分
- 一、青春の川、檐
- 一、蛤、帆、菅公一千年祭
- 一、薊、垂釣雜咏
- 一、渡舟、茂り、自像に題す
- 一、鳥居、茄子、夜店

- 一、早、賀舉子、火取虫
- 一、草花
- 一、雜歌(週報外)

(終)

竹の里人選歌

明治三十三年

募集 短歌 新年 雜詠

竹の里人選

○ 巴 子

庭つ鳥雞のよろしき初聲に初日を祝へその初聲に

新しき日影にほへる山の端に常世の風の吹き
 わたるかも
 国内には里むらつゞき初雞の聲どよむらしに
 ひ年にして
 あらたまの年のはじめはうべしこそ飽かざる
 君をあひ見るがごと
 にひ年の乗りにし駒は薄雲の眼にも見らえず
 影のみにして
 足引の山の獵夫はにひ年のにへたてまつる山
 祇の前に

新しき年のはじめを國ひくと舳向くる船の波
 もさやらず

○

伊藤左千夫

葺きかへし藁の檐端の鍬鎌にしめ繩かけて年
 ほぎにけり
 天近き富士のねに居て新玉の年迎へんとわれ
 思ひにき
 ゆたくと日かげかづらの長かづら柱に掛け
 て年ほぐわれは

○

矢野一二

元日の峠越ゆればいただきの餅賣る家にみ旗
なびけり
鯛の大臣鰻の朝臣等うち群れて龍の都に年ほ
ぎまつる
玉鋒の道のちまたに少女子があまた群れゐて
羽子うちかはす

○

安藤椽坊面

戸の中に隠れて妹が手鞠つくたのし其歌聞け
ど飽かぬかも
曳けくそ初荷車の七車大路曳き行く姿を、

しも

手鞠つく都のてぶり見る時は古りにし里の妹
しおもほゆ

○

鬼

史

初雞の聲も聞えて煙立つあらし山中に人住みに
けり
やり羽子のやさしき人よしかれども羽子板の
繪を我はいやしむ
都路の大路をしめてやり羽子の墨をぬらまく
さゝめく少女等

北州迂人

○

新年の觀兵式はとくに終り寒き青山富士低く
見ゆ

あわの如き戀は忘れて都少女遣羽子すらむ手
鞠つくらむ

雪晴れて初日さす野を急ぎ來れば我里見えて
日の旗うれし

○

一五坊

新妻を迎へんといふあらず玉の年は來にけりう
れしくもあるか

妹を置きて分れ來ぬれば都邊の年のはじめの
うれしくもなし
遠眼鏡取り持ち見れど淡路島に羽子つき遊ぶ
子も見えなくに

○

芙蓉仙

初夢はいさましかりき焼太刀にしこのともが
ら斬りはふる夢
新玉の年はめでたししかはあれど老い行く御
親見れば悲しも
やすみしゝ君つはものをみそなはす青山の原

見ればまばゆし

八

○

格 堂

新玉の年の八年を鳥が鳴く吾妻の江戸に迎へ
ぞ吾せし

新玉の今日にしあれど空寒み山にも野にもみ
雪ふるかも
家にあらば妹と二人し飲む屠蘇を旅にしあれ
ばひとり飲みなき

○

寺野竹湍

友禪の袖うちへて廣庭に羽子つく子等を見

ればうつくし

桶の手に輪かざり掛けてうぶすなの神の眞清

水汲みかへるらし

岩のぼるけさの初日を拜まんと二見が浦に一
夜寐にけり

○

ふ え 子

芝浦に潮満ちくれば紫の雲たなびきて初日出
づ見ゆ

曉の若星青くかゝやきて星の御國も年立ちに
けむ

九

○ 矢野興安嶺

著かざりて羽子遣り遊ぶ人を見れば鄙に残せ
る我妹子おもほゆ
この身はも三十になりぬしかはあれどいとし
子も無くいとし妻もあらず

且 子

○ 山國の山の奥かの山里に山のはつ日を山人を
がみつ
年を祝ひ君我家に來ぬれども酒あらなくに餅
あらなくに

○ 石川丹雞子

新年の夜しづまりて諏訪の海や氷の上をきつ
鳴きわたる
御射山に大雪ふれりをさぎ狩りて年の祝のあ
つものにせん

○ 那可佐波

松を吹く深山おろしは寒けれどふもとの里に
年立ちにけり
つくはねのつくとて羽子を落しつる妹に墨塗
れかほよき妹に

○ 萩野谷傳三

天地と限りもあらずをす國の千足の國を今日
ほぎまつる
朝まだき起きいでし見れば門松の枝もたわわ
に雪つもりけり

○ 粕谷芳文

門かざり注連引きはへし彌宜が家に鈴ふり鳴
らし祝詞讀む聲
にひ年の鱒の廣物籠に入れて竹の葉掩ひ擔ひ
行くをのこ

古里の人の習ひのうれしくも松の内には寶賣
るなり

遠人

君か代の千代を契りて新玉の年のはじめに蘆
田鶴の啼く

松田源司

皆遊ぶ年の始に車引きてひねもす走る人をあ
はれむ

紫之舎

新玉の年のはじめの夜をこめてちまたとよも
し初荷引くなり

白山人

くればとり綾の袂をひるがへし羽子つく少女
見ればこひしも

無得居士

群れ渡る鶴のもろ聲千代かけて初空わたる鶴
のもろ聲 桑の舎蠶客

あら玉の年たちかへる今日の日のみ空緑に鶴
鳴きわたる 來馬梅塙

新玉の年ほぎ酒の酔ざめに松の葉うれの雪拂
ひけり うつほのや

玉敷の大宮の方に駒なめてことほぎのぼる司
人かも 金子徳次郎

身うち人おほながたびし年玉の玉の櫛笥の櫛
をよろこぶ 石山新雲

四つの海の波をさまれどすめろぎの天地四方
ををろがみたまふ 松岡夢鳥

外國の國の使も旗立てゝわが大君の年むかふ
めり 寺崎理一郎

あら玉の年のはじめに降る雪のふり行く我身
寒くこそあれ 愛山

細戈千足の島の細戈くはしくはしく年立ちに
けり 淡月

年立てるけふを祝ひの新聞は讀めども盡きず
はたひらにして 竹内林松

床に置く鏡の餅の餅の上の蜜柑ころげて鼠逃
 げゝり 静 左馬
 遣羽子のうなるをとめが墨つきし顔おほひ泣
 く日は夕なり 三村 栗園
 まがごこのベスト引くてふ嫁が君は殺さえて
 けり子年淋しも 非 人 舍
 ゑらく／＼に屠蘇に酔ひたる國民よ心はどはに
 さましてををれ 不 言 舍
 しのゝめの空に鈴の音ひゞくなり瀛車場に向
 ふ新年旅行 竹 嶺

今年はや火桶かゝへて子等のためにかるた讀
 む迄我老いにけり け い 子
 朝戸出にふりさき見ればにひ年の空晴れわた
 り鶴二つ舞ふ 恕 堂
 すめろぎの四方の神々祭ります御くらの下に
 年迎ふ我は 不可 得 生
 門松のほつ枝しづ枝の雪を搔きて天つ日の旗
 立てにけらしも 有 坂 啓 助
 古さとの妻の手づから織りて縫ひて贈りしこ
 ろも今日著そめけり 藤 酒 舍 糸 丸

天の戸の明くるすなはち初鷄の長鳴き鳥はう
たひそめけん 尾州

人皆のはれ著著そめて祝ふ日を屑拾ひ行くみ
なしごあはれ 藪下閑人

あら玉の年のはじめをさちはひてわが描きた
る松の上の鶴 山本桂

松の上の鶴てふ題に翁等はいかにめでたき歌
やよむらん 菊子

初夢にアルプス越えて海越えてニアガラの瀧
見てさめにけり 寒泉子

うら／＼と上る初日にむら鶴の聲にきはしき
伊勢の濱松 飯島八千溪

久方の天つ日の限りあらかねのつちあらん限
り君は榮えん 瓠庵

夜半に聞きて起くといひけん庭つ鳥かけ鳴き
そめて年あらたなり 瘦石生

にひ年の初著の袖をふりはへて駒下駄鳴らし
湯屋へ行くらし 梁瀬三山

大君のめぐみかしこみにひ年の鄙の小家に旗
立てにけり 黒川白酉

山見れば山に雪積み家見れば家に雪積み年あ
らたなり 高井榮次郎

いかめしき黄金の鳶を胸にかけて年をことほ
ぐものゝふの友 失名

新しき年を迎へてふるさとに置きにし妹が齡
しおもほゆ 虚白

遣羽子のそれ羽子取ると人のために梯子掛け
たる梅の花の枝 きみ木

言さへぐとつ國人もよそほひて年あら玉の宮
にまうづなり 山口花笠

足引の山の古木にあら玉の年のはじめの鴉鳴
きけり 豊田良助

夕かけて羽子つき遊ぶ少女子の濃染振袖白雪
のふる 横前敏亮

よきといふよきを盡してつかへるまつる幸あ
らせ給へにひ年の神 三木放浪

あらたまの年のはじめにうち群れてかるた拾
ふは楽しかりけり 田村胡蝶

旅にして年立ちにけり古さとはうからなみ居
て雑煮くふらん 指宿貞虎

武夫が駒なめつらね行く原に初日かゝやき鴉
飛ぶなり
梅村

新治のたかさごの島古蝦夷の千島の小島年あ
けわたる
楓園主人

かしこきやわがすめろぎのしろしめす天地の
きはみ年立ちにけり
笹沼聞一

植木屋のあるじがくれし鉢植の梅のつぼみに
年立ちにけり
櫻井節雄

旅にして雑煮喰ふなり故郷に手毬つくらんま
な子しおもほゆ
観濤

年玉は玉子やよけん海苔やよけん籠に入る鴨
のつがひやよけん
松本友菊

言さへぐ外国人の住む門に門松立つる御代に
逢ふかも
松下穎一

にひ年をことほぐ文の其中に久に逢はざる友
の文あり
榎石峰

高砂の島人草はひとへ衣二つかさねて年迎ふ
めり
松の宿人

格子戸の格子の中に投げ入るゝ恭賀新年のは
がき四五枚
桃の家

あら玉の年立つけふを只ひとり火桶かへへて
歌よまんとす
落葉子

新玉の年のはじめの初夢に神代のことを見る
ぞうれしき
松洲

初雞の鳴く音に起きてみそぎして大宮ところ
をろがみまつる
泊靄生

くれ竹の太輪のふしをかたそぎてしめゆふ心
いく世祝ひし
越前竹のや

羽子板を袖につゝみて松立てる門邊さまよふ
女少子あはれ
木田久

うまし酒から酒かみて新玉の年をいはひのう
たげ樂しも
六合廼舍

大君の今日九重に浦安の國やすかれといのり
ますかも
竹野翠子

賤の男が心つくしゝ新年の御題の歌は選に漏
れけり
渡部敏

いそしめどいとなきものは璞の年ことほぎの
文くばり人
平野静逸

もゝしきの大宮人はあら玉の年のはじめのう
たげすらしも
乾

やよ童年のはじめに大鼓打ちて汝の祭るは何
の神そも 梅津曾太郎

萬歳の出で行く門に猿引の入らんとせしか行
き過ぎにけり 青木月兎

吹きおろす秩父おろしの風寒く年立ちにけり
片里にして 山本高一

○ 香取秀真

八重雲をちわきにちわき國原に大年の神やあ
もりますらむ
あらず玉の年立つふき屋しめはへてはぶきと

ろと鑄物し初む
齋イヒ食ヒのもちひの食ヘ喰ケ今日もして太腹かゝへ三
日立ちにけり

募集
課題 森

○ 不可得

須磨の浦の松の木の間にながむれば淡路の蟹
の舟なめて來も
まゝ母をつらしとあはれその森にくはし少女
はくびれて死にけん

子を思ふ心よ人に化けにけんしのだの森のき
 つあはれなり
 千よるづの花つくり女がよべのまに上野の森
 の花や造りし
 旅衣松原來れど木の間よりわがふる袖を見る
 妹もなし
 古里のつらく／＼椿咲く森にあそびしもへばた
 らちねしのばゆ
 河内のや檜原松原わけ行きて順禮の子の親を
 尋ぬる

狼の住むてふ林伐りそけて狼出ですやまると
 の里
 やよ子供森の鴉の巢なとりそ神したゝりて汝
 が手くさらん
 くらべこしふりわけ髪の妹がりへ行くさくる
 さによぎし森かも
 うぶすなの神の林に朝な／＼からのいくさの
 伏をし祈らく
 十年の旅より歸る村口に昔あそべる森見ゆら
 れし

秋雨や旅のねざめの淋しさに春日の森にさを
 鹿の鳴く
 その昔くはし少女と化けにけるをろちは居ら
 ず森古りにけり
 いんなばの奥山深く木を買ふと入りにし人の
 終に歸らず
 わが庵をめぐらす雑木きりそけて櫻の林つく
 らんと思ふ
 君が行く汽車をかなしと見おくればかなたの
 森に隠れけるはや

○

上小澤 潜

遠方に山もゆる見ゆ荒鳥の鶯棲む林今焼くる
 らん
 薄月夜きつ棲む森にさまよひて再び同じ道に
 出でけり
 晝暗き森にあやしき鳥の聲あなたかと思へば
 こなたにも聞ゆ
 松露取るご小松林にうちむれて砂かく妹ら見
 れば美し
 春の野に遊びてかへる道すがら松原よぎり小

松こむけり
 咲き満てる桃の林の花の中に見てしよき妹忘
 らえなくに
 晝暗き森の細道行き盡きて面まばゆき湖に出
 でけり
 あかつきの霧晴れわたり岡のへの森の木末に
 塔あらはれぬ
 道をはさみ茂る林の枝垂れて乗合馬車の窓に
 觸れけり
 荒海の磯邊にしげる松林松風吹けば波立ちに

けり

○

無得居士

野中なる森の南の日あたりに小女兒三人すみ
 れ摘む見ゆ
 菫摘むかほよき小女我が行けば森の木陰にお
 ちかくれにき
 見おろせば磯邊の森の木末より海士の釣舟漕
 ぎはなれ行く
 子守兒等こゝの小森の小日向に子を遊ばすと
 こゝた來しかも

此森のこの木の木の實こゝた拾ひ好む兒にや
 れ此木の木の實
 これやこの木を守る人か此森のこの木のもと
 に小屋籠りせり
 夕風に稲葉波よる千町田の中に鳥なして松の
 森あり
 池上の寺の林にわが居れば汽車汽船見え眞帆
 片帆見ゆ
 松や杉や桃や櫻やこきませし上野の森はあそ
 ぶによろし

○

格

堂

人も來ぬたゝりの森の下草の小草しげりて佛
 うもれぬ
 斧も入れず人も通はずあそろしき森となりた
 る大宮處
 人も來ぬ山のとかげの森の中に怪しき塚の二
 つありけり
 此森は鳥さはに住めどあら神のたゝりかしこ
 み打たず過ぎにき
 生ひ茂る森の下草刈りそけていほりにかよふ

道成りにけり
人言をしげみこちたみ道も無き森の下草踏み
わけて來ぬ
一すぢの小道は草にうづもれて住む人も無き
森の中の庵

○

雲の山人

雉を得て森を出でくる狩人の弓つきが嶽に月
登りけり
神風の伊勢の津の守住みきとふ津のかみの森
今荒れにけり

津の守の森のもみぢ葉散りしより瀧つ瀬絶え
て茶店とさしぬ
我妹に逢はんとすればさぶしからずられしの
森を夜行く吾は
昔より天狗棲むとふあら神の森をかしこみ馬
より下りてき

○

瘦石

目高遊ぶ小川に沿ひてわが來れば吾妻の森に
春風ぞ吹く
夕月の加茂の川瀬をから涉り糺の森に入れば

涼しも

水無月の水をあらそひ村人等旗おし立つるう
ぶすなの森
森をめぐり月の小路をたどり来て砧打つ家の
前に出でけり
蝦夷人が熊の毛衣まとひつゝ林の中を雪車引
さかへる

○

濱

人

森は伐られ丘はすかれて田の中に淋しく立て
る其一つ墓

古里に歸りて見れば昔わが椎をひろひし森は
伐られぬ
漚車を下りて田中の道をわが來れば家のうし
ろの杉の森見ゆ
彌次郎兵衛は馬にまたがり喜多八は荷物背に
して行く松林

○

民部里静

下暗き杉の林を過ぎ行けば落葉掃き居る寺に
出でけり
此森の奥に古りたる寺はあれど住持も居らず

狸棲むどふ

晝暗き北山蔭の森の中に古き墓あり人もまう
でず

我庵はしげき木立の中にありて藤多ければ藤
の屋といふ

○

羊 迺 家

百あまり八のみ谷を動かして森の大木の雪に
折れけり
忘れずのうれしの森と吾妹子が吾にかたりし
森は此森

追剝の出るちふ森を夜來ればあらずや闇に人
のけはひする
切れ紙鳶のかゝりし森の木末高み天に梯子の
かひなけんかも

○

梅津曾太郎

わが掛けし田中の森の畏見にと朝なく行く
田中の森に
ふりつもる雪路になやみ森中の獵夫の家にわ
れ宿りけり
家づとに妹にやらんと森をあさり摘みてぞ歸

る山カ慈ダ姑クリの花

○

萩野谷傳三

神います神の林の梅が枝に今や鳴らんうぐひ
すの聲

きさらぎの花より赤きもみぢ葉に夕日かゝや
く岡の上の森

大己貴少名彦名のいますからに神さびて見ゆ
山本の森

○

建部樟園

春の日の森の下道分け行けば小芝がくれに董

花咲く

すゝ菜咲く野中に残る松林いくさの跡と聞く
はまことか

落葉せしならの林を越え來れば小松の原に雉
子鳴くなり

○

如城生

行きくれてなづさひ居れば稻妻の光きらめく
森の下路

時雨もる森の小路の御佛に老いたる旅人笠た
てまつる

天つ日の光も漏らぬ森の下に一もと咲けるな
でしこあはれ

○

山下愛花

杉木立茂りくくてはてをなみ行きくれ立てる
旅人あらん
學び屋を歸る處女等董咲く森の下草分け入りにけり
いにしへの人があはれと詠みにけんおいその
森に我は泣きけり

○

伊藤左千夫

森中のあやしき寺の笑ひ聲夜の木魂にひいき
て淋し
かつしかや市川あたり松を多み松の林の中に
寺あり
かつしかの田中にいつく神の森の松をすくな
み宮居さぶしも

○

雪の村人

あし引の山のふもとの杉林杉もとを、に雪降
りにけり
ものゝふの折りて簾にかざしけむ生田の森の

梅咲きにけり

白妙の深山おろしは寒けれどふもとの森に霞
たなびく

○

荒川守水老

かぎろひの日影も漏らぬ森の中に鳥井かたふ
き神さびにけり
さくすずの五十鈴の川の川上にしげれる森は
幾代經にけん

○

五峰庵主人

かちにして逢坂山をわが越せばやしの上の

森に鶴鳴く

冬枯の森の木立に畏をかけあぶらあげ置きて
狐とらばや

○

北原痴山

夕紅葉下照る森を越え來ればひえ鳥啼きて木
の實落ちけり
おどろく神はためきて鳴鏑矢高の森に夕立
來る

○

廣江八重櫻

麥畑を森ある方へ道取りて銀杏花散る宮に出

でけり

攝待のほどこしせん
と村人が御寺の森に小屋
つくりすも

○

安藤橡面坊

神の森の下草隠り
雉鳴きて朝露散りぬ
日出でんとす
夕煙森にのぼれば
小山田の妹が鄙歌聞えずな
りぬ

○

初學 生

昔わが遊びし森の椎の木
のうつろの中は苔む

しにけり

いかにしてかゝる淋しき森
の内に住むらんと
思ふ家に逢ひけり

○

高井 生

わが宿の南の園に梅植ゑて
梅の林をつくらんと
思ふ
家居する麓の窪に苗植ゑて
今年は杉の林となりぬ

○

平林 登

栗の實のこゝらこぼれし
栗むらに童等つとひ

拾ひ行くなり
栗の實の多に結びし栗むらを六十の翁ひとり
まもれり

○ 石牛生

風すさぶ落葉の森はちはやぶる六孫王のおく
つきどころ
馬とめて森の下陰水かへば丹ぬり小柄杓清水
たばしる

○ 柴月

夕やみの森の中道わが行けば梅が香すなり梅

やあるらむ

磯づたひ妹がり行けば三保の浦松原月夜雁鳴
きわたる

○ 酔醒飄

うぶすなの森の下陰秋ふけて紅葉散るべくな
りにけるかな
ものすごき森の木陰をわが行けば身の毛立つ
なり鬼は居らなくに

○ 萩原吉胤

ある時は父にしたがひある時は妹をさそひて

行きし森かも
思ひおこす親しき友のとふらひに去年此森に
尋ね來しことを

○

大

夢

君がため栗飯煮んとうら山の栗の林に栗をひ
ろひぬ

水汲むと朝戸出づれば紅葉せる向ひの森は霧
こめにけり

○

長

塚

節

野を行けばたゞに楽しく森行けばことゝしも

なく物ぞ偲ばゆ

菅の根のながくし日も傾きて上野の森の影
よこたはる

○

石原白馬

其奥にミューズの神やいますらん虹立つ森を
見ればかしこき
しづ枝ほつ枝茂れる森に神いまして人踏み入
らず鳥巢をくはず

○

丸山彌生

もろともに常盤の森のごことはに絶ゆること

なくありこそぬかも
ますらをのしつくらおきていさましく生田の
森に亂れてある見ゆ

○

伊東日向守

ましら鳴くあかつか森に日は落ちて美良布の
里の夕淋しも
荒御魂とこ世に斧の音を絶え神の林は神さび
にけり

○

手塚縫藏

人妻のあはれつくしゝくすの葉は信太の森の

きつにぞありける
かりがぬに歌かきやめて窓押せばむかひの森
に月傾きぬ

○

蛇山人

登り来て林の陰にやすらへばふもとの河を帆
のさかのぼる
夕暮の桑探峙ひとり行けば森のかげより人あ
らはるゝ

○

端心齋

山もとの栗の林に来て見れば毬のみありて栗

の實は無し
山もとの林の中の白雪におく足あとは狼なる
べし

○ 瓠落山人

大木曾や小木曾の山の谷川の奥もしらえず檜
の木茂れり
川の邊の岩ほの上に生ひ茂る森の影見ゆ岩根
青淵

○ 樋口興平

松杉のしみさひたてる森の中の萱ふきの宮に

苔蒸しにけり
みつ垣の神のともしび消えずあれど森暗くし
てふくろふの鳴く
森ぞひの畑に麥蒔くわらはべに友の家問ふ日
はうすつきぬ
西村茂次
藍毘尼の林の中に光満ちてあもりたまひし釋
迦牟尼ほとけ
百合
椎落つる神の林をなつかしみ里のみなし子日
ねもす遊ぶ
我水子
麻繩を腰に結びて森の木の枝伐りおろす男あ

木村 芳雨

やふし

折りていなん神の林の白百合を妹がかざれば

病癒ゆるかに 八馬 兎

御社の森のくすの木枝垂れて風吹くたびに屋

根を打つなり 密華園秀之

岡のへの森の木末に囿してつぐみひえ鳥取る

がおもしろ 白山 人

落葉搔く人しなければ森の中のおくつき處露

けかりけり 田上あさ子

うつくしき花籠提げて出で来る天つをとめや

森の下道

静 左馬

うぶすなの神の林の椎がもとに椎拾ひにし昔

おもほゆ 澁川柳次郎

里の子が森の社につとひ来て太鼓打ちならし

笛吹きならず 白仁三郎

夕暮の坂下り來れば繪の如き向ひの森に鳩舞

ひあがる 池松常雄

足引の山の獵夫に追はれつゝ森の木末に鳴く

猿あはれ 臨池亭

泣く子負ひて森の小道を歸り來れば花を持ち

たる人に逢ひけり

露子

雪をれの森のひゞきに驚きて木曾のみ山に猿

叫ぶなり

兒島基一

奥山の森の木陰のしゝ小屋は雪にうもれてど

ふ人もなし

桑廼舎蠶客

神祭る八はたの森の森陰に餅賣る女老いにけ

らしも

奥村まさ子

夕されば往來の人の影絶えてしのだの森に狐

鳴くなり

寺崎理一郎

たらちねの老の心のなぐさめにこの森伐りて

よき屋つくらん

不破の關守

犬神の住みける森を伐りひらき犬神まつる杉

の木一株に

土麿

晝もなほ梟鳴くなる森陰の草のいほりに住む

人は誰ぞ

奥村邦光

神垣の忌垣の森の花櫻咲くをも待たで手折ら

れにけり

乾

くれなるの罌粟の花咲く垣のへに夕日の森の

影押し來る

三徑

こゆるぎの磯山林松を多み松露取るべく妹と

來にけり 那可左波

峰行けば道をけはしみ谷行けば森を木深み吾

をいたましむ 芙蓉仙

田中なる稻荷の森は落葉してあらはになりぬ

あけの瑞垣 粕谷蘿月

木をこると木こる柚人森の木をいたくなこり

そ森なからかん 矢野一二

信濃なる諏訪の社の森に立つ國の鎮めの八千

矛の杉 井澤次宜

みやしろの森の紅葉の一枝を折りてかざすは

誰が家の妹ぞ 飯島八千溪

ますらをが弓矢たばさむ繪馬の額うぶすなの

森に神さびにけり 細川寛一

家々の背戸の木立に藁を積みて小野の里人冬

こもるかも 梅村

森深き木曾の山路をわがこせばましらに似た

る人に逢ひにけり 冷澁生

森陰の小笹垣根に沿ひ行けば山茶花の咲く寺

に出でけり 麥圃

白玉の玉のうたてなにぬる妹を梅の林の月に

しぬびぬ

鳥

堂

此頃のあかつきの霜に遠近の森の木葉は色
づきにけり

圭

岳

○

巴

子

山口の神にことまぎ高山の飛彈のひろ森宮木
こるかも

御狩する小野の松原枝をしげみたがへりもせ
ぬ鷹まぎかねつ

玉ぼこの道をたどほみふる里の森のほづえも
いまだ見えなく

とめやまの山の杉むら伐らずあれば照る日と
ほさず森のどこやみ

夜くだちに川ぞひ行けば月しろにそぎへの森
も見えわたりけり

やつかはぎ古き夷の土蜘蛛の穴居の跡のあり
とふこの森

出雲行く神の八十神いゆきます森のほつ枝の
木末づたひに

たま／＼の晴れをともしみ野邊行けば鶉鳴く
なる森陰にして

神代ながら神のうしはく森なれば世のたゞ人
 は得入らざりけり
 夕月の影を涼しみたもとほる川ぞひにして森
 の下風
 さしのぼる朝日さやけみ森の影の障子にうつ
 り朝鳥の鳴く
 落ちたぎつ谷の早川末遠み森にかくれて見え
 ずなりけり
 鳥海の雪深からし箕の輪なる杉の木立にまし
 ら群れ來ぬ
 緑葉舎

蝦夷が島あいのゝ國に移り住み神代ながらの
 森を開かん
 蒼天生

選者詠

鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に雪つも
 る見ゆ
 うつせみのひつぎを送る人絶えて谷中の森に
 日は傾きぬ
 谷中路の森の下闇我が行けば花うつたかきう
 ま人の墓

踏み知らぬ森の下道日は暮れて逢ふ人をなみ
 いそぎて行きぬ
 遠く来てかへり見すれば猶見ゆる谷中の岡の
 森の上の塔
 花に来て遊びし今日の日も暮れて鶉鳴くなり
 権現の森
 おほやけの國の林と百年の斧も入らざる木曾
 の奥山
 森深み山鳥鳴きてたま／＼に人に逢ふさへ淋
 しかりけり

分れたる森の小道にイみて人も來るやとひと
 り待ちけり
 義仲が兎を狩りて遊びけん木曾の深山は檜の
 木生ひたり
 とみ山の森の木陰の古寺に松島見んと我も訪
 ひ來し
 杉むらに白き幟のほの見ゑて天狗を祭る社あ
 りけり
 檜の實を拾ひに行けば檜林むしろ圍ひてかた
 め住みけり

墓原の杉の木立を我が行けば夜鳴く鳥に驚か
 されぬ
 風をいたみ糸の緒切れて飛ぶ紙鳶の森越えて
 行く行くへ知らずも
 人取りてくらひきといふぬす人の住みにし森
 を行けばさぶしも
 笛の音の遠音をしたひそこはかと森分け行け
 ど人に逢はざりき
 薬練る山人尋ね入る山にくしき花咲く森のし
 た草

道のへの楯の林に鶯の二つ来て鳴くあけ方に
 して
 茨咲く森の下陰しめ張らん我が後の世のおく
 つきどころ
 上野山夕越え來れば森暗みけだもの吠ゆるけ
 だものゝ園
 いにしへの黄金の殿の残りたる二荒山の杉老
 いにけり
 わが登る愛宕の森の木末よりはるかに見ゆる
 蟹のつり舟

品川の沖に舟漕ぎかへり見る愛宕の森は今日
 もかすめり
 森越えて隣りの村へ歸るちふ車に乗りぬくた
 びれし故に
 ありそべの松の林に砂堀りて松露の玉を取れ
 ばうれしも
 千はやぶる神の本立に月漏りて木の影動くき
 ざはしの上に
 蛭の住む森わけ入りて蛭に血を吸はれきさとい
 ふ蛭物語

夜をこめて驛路行けば荒磯の松の木の間に浪
 のよる見ゆ
 朝空にかげろひ立ちて鳶の舞ふ森のかなたに
 櫻咲くらん

募題集 櫻 花

黄金掘る佐渡の島なる真野村の櫻かしこみ歌
 たてまつる(御手植櫻) 百 眼 子
 つくり花こちたくさして澁色の幟立てたる芝
 居假小屋 兒 玉 修

窓の戸をあけて上野の山見れば櫻の花は今さ
かりなり 竹田 吐 霓

月山の櫻は咲きて三峯の森に詩を讀む人酔ひ
ぬらん 堀江 古 門

うつたへに櫻いやしと人はいへど朝の櫻は梅
にもまされり 圭 岳

月の照る夜櫻見んと待ち居れば夕風強く雨ふ
りいでぬ 村山 小次郎

わが植ゑしちひさき櫻咲きにけり亡き母君の
おくつきどころ 兒島 基一

高德の白げしといふ櫻木はわが古里の花の如
きか 小杉平一郎

釣鐘も溶けよと息のほのほふく蛇身の上に花
ふりかゝる 花の里 人

やすみしゝわが大君のしろしめす國の寶の櫻
花かも 志 貴 麿

朝戸出て櫻の下にイめば露こぼれけり花の露
かも 鷗 盟

みいくさの勝ちししるしと植ゑおきし櫻の花
に鶯鳴くも 蕨 眞

病ある竹の里人ビードロのガラス窓より櫻見
るらん 神木公

ちはやぶる神の御代より日の本に根ざしそめ

けん山櫻花 高橋元助

蟲ばみし南蠻鐵の燈籠のかたはらに咲く鹽釜

櫻 奇北

にほひ深き藤紫のふり袖の花見衣を著て遊び

けり 櫻井節雄

夕雨のそぼふる窓に倚りそひてしだれ小櫻見

る人や誰 粕谷蘿月

雲雀あがる里の小道の櫻花今さかりなり見る

人なしに 尾州

文を讀む机の上にいけて見よと櫻一枝友持ち

て來ぬ 三井重彌

年毎にうから集めてうたげするわが宿の花わ

づかにふゝめり 泊村

さゝ波や志賀の山邊の花を見て都へかへる穴

の中の舟 霞村

遅咲のくれなるの梅にとなりしてしだれ櫻の

咲き出でにけり 血城

嗟峨のあたり花咲きそめてわが宿の門邊行き
 かふ人しげくなりぬ 東 美
 玉しきの南の庭に花かざしうたげすらしも大
 宮つかさ 紅 爐
 奥山の岩間の花の流れ来る笥の水を桶にたゝ
 へぬ 赤 浦
 鉢植の八重の緋櫻植木屋の植木の棚にむなし
 く散りぬ 元 々
 一ひらの櫻の花をふみに入れて外國にある友
 におくりぬ 磯なれ松

その昔ものゝふの血をそゝぎたる上野の櫻花
 咲きにけり 馬場民八
 錦手の大きなる瓶に櫻いけて餅賣る店の奥に
 置きたり 興安嶺
 山行けば山に花咲き野邊行けば野邊に花咲く
 春の旅よし 民部里静
 ○ 如城生
 花くはし櫻いけたる床の邊に黄金づくりの太
 刀掛けてあり
 朧月おぼろに見ゆる花の奥に誰が吹きすさぶ

笛の聲ぞも

八十

瓠落山人

瓢さげ春の野行きて古墓の櫻の下に酔ひて眠りき

板塀の上に櫻の花見えて庭の奥深く琴の音きこゆ

花 叟

あら神のいますてふ丘の櫻花咲きて散れども行く人の無き櫻咲くこの谷陰にいほりして住める尼あり其名を知らず

寺野守水老

あらし山さかりの花の一枝を病む我友のため
に折り來ぬ

高まどのかつらぎ山の山おくに蕨摘む子等櫻
折り來よ

小川いさを

吾妹子が贈りし櫻散るを惜みふみのあはひに
押してけるかも

山かつの通ふ岨路わが行けば松風はやみ櫻散

八十一

るなり

○

緑葉舎

渡守とく舟出せよ最上川向ひのさくら風に散る見ゆ

吉野山ふるき宮居の跡訪へば荒れし御垣に花ぞ咲きける

○

中村鳥堂

町中の稻荷の宮の古櫻片枝伐られて片枝咲きけり

赤き桃白き李のその中にはさまれて咲く薄花ざくら

○

小五樓

散りて浮く櫻の花の花びらに神の子だちが棹さして遊ぶ

花咲けど妹は笑はず鳥鳴けど妹は歌はず此春をいかに(悼亡)

○

湖月

ごもし火のしづかに照す御園生の花の林に神眠るらん

うらゝかに朝日の照す窓の前の櫻の枝に雀來

鳴きぬ

八十四

○

隅

峰

横町の酒のみおやぢ花を見てほりするものは
酒にしあるらし
櫻散る水ほのしろき鳥羽のえに古き都をおも
ほすや君

○

朴

堂

とくくど落つる深山の眞清水をたへし桶
に散る櫻かな
深山木に遊ぶましらの子ましらの枝ゆさぶり
て散る櫻かな

○

栢

の

舎

讀む書のしをりにすると机邊の籠にさしたる
花をちぎりぬ
大和路を旅する友が贈りたる吉野の花の寫眞
四五枚

○

三

徑

菜の花の咲く野を過ぎて櫻咲く森の茶店に休
みて行きぬ
つゝらをり杉の山道たまくと櫻咲きけり杉

八十五

の山道

○

濱 人

醉ひざれて花の木陰にころぶせる鬼をいたは
るひよつとこ二人
我が宿のうしろの池に鯉浮きて水際の櫻花咲
きにけり

○

吐 雲

わが友がいくさのつとと送り來しクルツプの
たまに櫻をいけぬ
とつ國の學びの庭に行く君に折りて贈らん櫻

一枝

○

石 牛 生

静心櫻の上に月出で、智恩院外夜朧な
り
春風の錦の幕に鈴かけて櫻見にけん太閤秀
吉
うち日さす花を見る人花を見る人花
につどひ來

○

天 愚 庵

嵐山松の木の間にところく、花咲くおもむき

たくみに畫がけり
恙ありてうちふす閨の床の間に妹がいけたる
楊貴妃櫻
咲きみてる掛け花いけの櫻花はらりと散りぬ
机の上に

○

奥村政治郎

菅の根の長き春日を暮るゝまで見れども花に
飽く時知らなく
一目すれば千本の櫻見ゆといふ吉野の山の春
をしぞ思ふ

み吉野の吉野の山はいにしへゆうましみ國の
花の名どころ

○

伊東日向守

櫻湯の朝湯を出で、櫻橋の橋の袂の櫻見にけ
り
よき人のよしとよく見てよしといひし吉野の
櫻我もよく見つ
高殿に絃歌涌く夜の宴半ば美人欄に凭れば花
に風あり

○

伊藤煙村

井の端のしだれ櫻に歌つけしをどめおもほゆ
花見るごごに
みちのくのころも川邊に櫻植ゑてえみし頼時
貢すゝめず
人皆の花にくるへる春の日を病みてこもれる
君をしぞ思ふ

○

初 學 生

月おぼろに花咲きにはふ山陰を笛吹き行けば
われ人に逢ひぬ
少女子が身を沈めけん山の池の水をおほひて

花散りうかぶ

昔吾住みにし家の門の内に今猶咲ける一もと
ざくら

○

秋 窓

神垣に咲ける櫻を折らまくもへど神をかして
み得折らざりけり
いりあひの鐘に櫻の山暮れて雨をふゝみし風
吹きわたる
はにやすのみ池のほとり家もあらで神の廣前
櫻咲くなり

失名

○
 櫻咲く國に住むわれ花の歌をさはにのこして
 死なむとぞ思ふ
 櫻花よみたる歌はさはにあれどよくよみたる
 はいくらしもあらず
 かいくと櫻の枝に鳥鳴きて水のおもてに花
 散りしきぬ

○

霞町人

花の下におもてかゝぶり舞はんにはおかめひ
 よつどこいづれにてもよし

山にあればけだかき櫻繪にかけばいやしくな
 りぬ紅多くして
 アメリカには薇薔色といふやまとはは櫻色と
 いふかほよき少女

○

東人

花見るとおどける人はさくや姫神の心にな
 ひやすらし
 いにしへゆ歌はあれども櫻花詠みたる歌に善
 きは乏しも
 春されば都は花に遊ぶらんわれはゐなかに

たけうつ人

○

矢野奇偶

世の中を何にたとへん足引の山の櫻の咲き散るがごと

三吉野の吉野の山の花の上をしづかに行くかさゝらえ男

見はらしのよろしき山の掛茶屋に顔よき少女花いけて居り

○

大鵬

毛布きて遠眼鏡見る一むれの田舎の人に花散

りかゝる

大きなる櫻の枝を手になげ櫻の山を下りて来る人

花咲ける隅田堤の人を多み親にはなれて泣くちごあはれ

夕暮の花の上野をわが行けば電燈青く人ちらほらす

○

高井生

雨一夜風一日我が中庭の二もと櫻花散りつくす

かひ犬のかばねうづめて其上に植ゑし櫻の花
咲きにけり
櫻咲く川のつゝみを少女等が赤もの小裾ひる
がへし行く
うめたての川岸つたひ移し植ゑし桃の花咲き
櫻枯れけり

○

岡本大夢

くれなるの扇かざして舞ひ出づる少女の袖に
花散りかゝる

柴刈ると朝毎かよふ麓路の檜の木の間山櫻

花

佐保姫と語ると見しは夢なりき花に宿借るみ

吉野の奥

吾妹子が井筒のもとに汲みおきし手桶の水に
花散りうかぶ

○

徳山人

しのぶが岡花咲いでぬわが友は知らずかあ
らんいざ告げやらん
一えだは家づとにとて我が折るを花守見なば
いなどいはんかも

すみ田川花のさかりは蟻なしてきのふも今日
も人のかよはく
移し植ゑしこの櫻花春ごとにとく咲きいでゝ
遅く散らなん

○

孤山生

國はあれど花はあれども敷島のやまこの國の
櫻花われは
いとまなき賤の男われも櫻花かざして遊ぶ春
かたまけて
すみ田川つゝみの花はかはらぬを郡司大尉は

世に忘られつ

よき人のよしとよく見し三吉野の吉野の花は
花のよき花

○

畦守

遠つ國西比利亞の野は廣きかもわが日の本の
櫻植うべく
ありし世の昔しのべと亡き友のおくつきの前
に花たてまつる
隅田川つゝみの櫻咲く春にますらをの友ポー
トレリスすも

足柄のつらゝトンチル瀛車出でゝ山の木ぬれ
の花咲ける見ゆ
あすか山花の木の間ゆ見わたせば筑波の嶺ろ
に霞たなびく

○

不可得

とこどはに櫻花咲くしきしまの日出づる國は
よき國にして
咲く花の櫻が岡ゆ見わたせば江戸の都は霞こ
めたり

清水の臺に上れば池の端に球投ぐる子等花の

間に見ゆ

東のしのぶが岡に花を見るみめよき少女妻に
ほりすも

足曳の遠山鳥のしだりをのしだり櫻に春雨ぞ
降る

○

無得居士

飛鳥山花の木の間に少女子が赤裳裾引き鬼ご
とすらしも
信濃なる木曾のみ山を飛ぶ鷺の翅に乗りて櫻
狩せん

うちなびくしだれ櫻の花の上に天津少女の舞
 の袖見ゆ
 ますらをが手に取り持てる銚杉の杉の木の間
 の山櫻花
 白桃や緋桃ふゝめる大園に咲きのさかりの二
 もと櫻
 兒櫻 小町櫻 の 姥櫻 西行櫻 の 墨染
 櫻

○

神尾母山

上野山櫻の中に旗立て、夏はまだきの氷賣る

なり

其昔大石良雄住みきちふ屋敷の内の一
 本櫻

花の陰に小袖の幕を引きはへてうたげするな
 りたをやめのむれ

垂れこめて琴ひき居れば窓の外の楊貴妃櫻風
 にかつ散る

名どころの花のしなくよせ集め畫帖に押し
 て櫻花譜と題す

足曳の山の峽より白雲の湧くかと見えて咲く

櫻花

○

茂 春

山谷堀根こじの櫻山に積み潮待つ船に春雨そ
 そぐ
 花見人は逃げて歸りし上野山の櫻の雨にわれ
 たち濡れぬ
 盗人が人屋に下る道にして花を見あげし心い
 かならん
 春鳥のさゝ鳴きしつゝ咲きさかる花をこぼし
 て隣へ飛びぬ

日枝の社から人の館其あはひ谷なせるところ
 皆櫻なり
 櫻花明日見んと思ふ其夜より雨ふりつゝき花
 散りすぎぬ
 日の御門としみさび立てる春花の櫻の花に風
 な吹きそね

○

遠 人

三吉野の吉野の山の奥深く分け入りて見んみ
 さゝぎの花
 君と我酒飲み居れば鳥歌ひ花笑ふこの春日た

のしも

花見んと人に契りし今日の日ををりふし我に

さはる事あり

西行の櫻は咲きぬ櫻咲く西行の寺に西行はあ

らず

春雨の竹屋のわたり人絶えて隅田の岸に櫻散

るなり

少女群るゝ花見小路の女紅場の櫻の花は今さ

かりなり

人まれに晝しづかなるわたし場の柳の風に櫻

散るなり

○

安藤椽面坊

見つゝ行く尾上の櫻常磐木の松の木末にへだ

たりにけり

みおや祭る勅使は立てり畝傍山山の櫻は今か

咲くらむ

はらくと夜の障子に櫻散り心悲しもひとり

し居れば

引きすてし車の上に花散りて都大路の月傾き

ぬ

水底にみつち住むとふ青淵の巖の上の山櫻
花

櫻花わが戀ひ來れば山寺の山下つゝじ色燃え
んとす

寺あれば櫻咲きたり櫻あれば入りてし遊ぶの
どけき春日

○

安江秋水

寧樂山の春日の宮の八少女が春の哥舞ふ花挿
頭して

鶯の根岸さゝ垣たそがれてしだり小櫻春雨の

降る

ふるさとの奈良の都の花見してつとに買ひた
る佐久良花漬

八百はたの大尺絹に繪がきたる櫻月夜のヅイ
ナスの神

櫻色の衣うつくししかれどもうつろふ色と君
いふらむか

佐保川のさゝれの流れさわたれば櫻咲く見ゆ
妹が家の門

東山花見小店の茶酌女が櫻かざせり紙花にし

て

宮人の花見車のかへり來る朱雀の大路日はゆ
ふべなり

散りしきし櫻花びら絲にぬきて五百箇花の緒
造りけらしも

ゆたくと日蔭蔓の長き日を櫻狩して今日も
くらしつ

○

葯 房 子

山青み空にかよへりしかすがに春にしあれば
緋の雲立てり

この花は八千の女神が銕もてつぎて著けたる
おもしろの花

花影を碎きて散らす庭の面の苔照り返し遊絲
うかぶ

櫻花よろしききは、常盤木の緑のうちに咲け
るにあるべし

櫻花經にうちはへ青柳を緯にへたてゝ織りた
る錦

春の城に花咲きぬればくれなるの高樓こめて
霞たなびく

朝日さす鴨の羽色の川水の下照るまでに花は
 咲きたり
 ちのづから散りくる花を紫の袖ふりかざし拂
 ひし吾妹
 君戀ふと蕩になし、櫻花髪にし卷かばよろし
 かるべし
 朝露に濡れつゝ、折りし此花を君に贈らんかざ
 して見すや
 顔ばせは花にしあれば木下陰さすらふ君が裾
 ばかり見ゆ

春風に嘯き居ればはらくと面掠めて花飛び
 廻る
 白金も黄金も玉も何せんに瓢枕し花抱き寝
 む
 山鳥の永き春日を櫻花見る目飽かずと繼ぎ照
 る月夜

○

哲

壽

朝戸やり庭の櫻を見つゝ居ればさめし花鳥ほ
 つ枝にはぶる
 高峰の櫻のもとに友呼べば友は答へず山彦ど

よむ

足引の山の櫻の花陰を立ちくゝ我を見る妹も
無し

隅田川花のさかりを思ふどちと足柄小舟並め
て漕がなむ

あきつ羽の袖ふる妹のこゝだ居て花にあくが
るゝ小金井あたり

秋山のしたべる妹の花陰に遊べる残して日は
暮れかゝる

花ざかり木の下陰にうち群れて遊ぶ少女を見

ればともしも

朝ぼらけ露に色そふ花の上にかぐつち赤くあ
らはれ給ふ

小金井の花の林に思はずも見ずひさ人とかた
らひにけり

花陰にだみ聲高くうたひつゝたふさき垂れて
踊るは誰ぞ

櫻咲く井のへ行きかひうなる子の遊べる見れ
ば胸うちさわぐ

みよし野の吉野の山の花を見て一日を二日と

のばへまく思ふ
仰ぎ見る尾の上の櫻ほのくとしづ枝ほつ枝
に夜は明け残る
のうくそれを折らなくあれといふを鼻もて
あしらひ花折る酔ひ人

○

格

堂

公の園をつくると都邊の廣きあき地に櫻を植
ゑぬ
移し植ゑし千本の櫻花咲きて楽しくなりぬ公
の園

公園の坂を下りてかへり見る櫻の上の西郷
の像
公の園をかしこみ上野山の櫻の枝を折る人も
無し
公の園の上野の森深み森の下風櫻散るな
り
櫻咲く忍が岡は君が代のおほみたからの樂み
どころ
上野山の秋色櫻年を経てともしく咲きぬ秋色
櫻

紅の赤裳裾引き花散らふ櫻が岡を行くは誰が
 子ぞ
 江戸川の岸邊に咲ける櫻花其下を行く水にう
 つれり
 江戸川の川端櫻川を挟み流れの上を蔽ひて咲
 きぬ
 小日向の友がり行くと櫻咲く江戸川道を廻り
 て行きぬ
 靖國の社に咲ける八千本の櫻を照すエレキの
 光

満汐の隅田の川を漕ぎ行けば舟に散る花水に
 散る花
 大君のみことかしこみ三吉野の花咲く頃を百
 濟へ行きぬ
 雨晴れて雀さへづる向つ家の棟のかなたに櫻
 咲く見ゆ
 ともし火の光静けき閨の外に櫻に夜半の風渡
 るなり

○

岡 籠

大八洲國彌高にいや廣に春は櫻の花咲きほこ

る

あきつ神わご大君のをす國のさかゆく御代に
 櫻花咲く
 神ながらおもほしめすにうつしくも野山の櫻
 今さかりなり
 櫻花茂ハルカ咲サカ岡にすがの根のながくし日を遊び
 くらしつ
 天にまし地ツミにます神みこゝろのむつぶ時にし
 花は咲きいでぬ
 春の日に天地八方をとゝのへてかしこきもの

は櫻なりけり

上下のやはらぎ遊ぶ春山の櫻は禮レイに樂ガクにまさ
 れり

櫻咲く京ミヤトの坊マチに吐きちらし人酔ひ臥せり長に
 訴へよ

姫神のゑみのゑらぎに一時を梢の花の咲きほ
 こるかも

春の日は櫻の花によざゝれて咲けばうれしみ
 散ればなげかゆ

山川のさやけきところ松杉のしみたつひまに

花咲きにけり
 咲く花のうたげのむしろうたうたひ口のはう
 ちて仰ぎて笑ふ
 舞ひをはりて大宮人が折りかざすみ垣の内の
 花さかりなり
 夕月夜しだり櫻の井のもとにかはほり飛べり
 雨もよひして
 隅田川つゝみの櫻花咲けばポトトうけなべ舟
 ぎほひすも
 櫻咲く上野の岡をたもとほりかほかたちよき

をどめに逢ひぬ

○

左 千 夫

久方のうす花月のおぼろ夜に笛吹きすさぶ岡
 のへの宿
 琵琶めして琵琶をひかしめ琴召して琴をひか
 しむ花のうたげに
 天つ日のうらく句ふ岡のへの櫻を見れば神
 代しおもほゆ
 青疊八重の汐路を越えくれば遠つ陸山花咲け
 る見ゆ

足引の山のかひなる一つ家のわら家の檐の花
 咲きにけり
 谷あひの水車の小屋にかぶされる八百枝の櫻
 花さかりなり
 天つ風いたくし吹けば海人の子があびく浦わ
 に花散り亂る
 いかるがの宮居のあとの古寺に咲ける櫻の八
 重咲櫻
 吾庵の檐の端近く八重咲の牡丹櫻の花咲きに
 けり

さにつらふくはし少女が山櫻かざせる見れば
 神にしありけり
 飛ぶ鳥のあすかの山の櫻花散りてながらふ風
 のまにく
 みよしの、櫻うつして植ゑきとふ雨引の山見
 し事の無き
 病みこやす君は上野の裏山の櫻を見つゝ歌よ
 むらんか
 ゆたくと風のみ舟に乗りくれば下つ山々花
 さかりなり(夢に風船に乗りて花を見る)

久方の天つ春風ゆるやかに吾乗る舟は花の山の
上(同)

青が嶺をうちこえくれば異郷は花咲きをり
雞鳴く聞ゆ(同)

現そみの世の人むらは蟻のごと花の山べをを
ちかへりすも(同)

わが船は千里越えぬとおもほへどまだ越えは
てず花の山の上(同)

○

巴

子

すべ神のおくつきどころ神さびて杉むらの中

に櫻咲くなり

木高くは庭木を植ゑむ山近み端居に見ゆる花

隠すがに

めぐはしき新妻迎へかなひたる新室つくり櫻

植ゑてむ

しなつびこ龍田の神の下戀ふる心いたみか櫻

散るなり

うちなびく春の女神はしこ神にせまらえけら

し花散る見れば

みよし野の花の川の瀬漕ぎわたす舟をすくな

み行きのわづらふ
 みづのえの吉野の花の花の瀬をいろとり畫け
 るその玉櫛笥
 磯山に船路の神の宮建て、櫻を植ゑて祭おこ
 なふ
 いとまなみ見ずか過ぎなむ櫻花瓶にいけしを
 心やりにも
 うま人の庭をたびろみ櫻花咲ける外山も垣内
 とぞ見る
 夏近み檐の鳥の子巢だちして遅き櫻も散りぬ

べらなり

わが宿の垣根の櫻散る見えて端居の月の入ら
 まくをしも
 かぐはしき妹は櫻にうつくしき櫻は妹にかた
 みあえてよ
 庭もせに咲ける櫻を花守の折りてもくれず歸
 り路さぶしも
 古の宮居の址としめゆひて櫻橋ならべて植ゑ
 ぬ
 しのためて大宮人の引きはなす小弓の風に櫻

散るなり

いさゝかのしをり垣してしめはへて人入らし

めず櫻咲く岡

床のへに櫻をいけてすなはちに花の歌詠む歌

よみの伴

○

秀

眞

眞木のたつ荒山深み白雲の下り居る奥に櫻花

咲く

大八洲國の八十島春くれば櫻咲きけり島の八

十島

高山ゆひき山の未さくなだり落ちたぎつ邊の

山櫻花

春花の櫻花咲くたぎつ瀬の瀬織津姫が岩床の

宮

下^ハ埴^ヅ生の成田路行けば咲きをゝる櫻にまじる

木垂並松

蘆曳の二つの山の山あひのみ谷ふたわたる山

櫻花

谷川のよどめる淀の香青なる水に散り浮く山

櫻花

わがけせる濃染の小袖花ぞめに染めなば君が
 わをこふらむか
 春深き草の緑に櫻散るみゆきの宮のふるあと
 どころ
 野邊近く尾花さかふさいほりせるかりいほの
 檐の花咲きにけり
 咲きをゝる尾の上の櫻風吹けば谷のかけ橋花
 ふときすも
 松生ふる岡にかくりて櫻咲く吾妹が里は見え
 ずもわるかも

花くはしくはし櫻子うま酒にかみてし飲めば
 色にいづる戀
 かぎろひの春のみ神の佐保姫のひれふればか
 も花ぞうつろふ
 義家が旗かけきとふみ社の廣前の櫻花咲きに
 けり
 櫻咲くこち山過ぎてさき山の杉生にかゝる春
 のむらさめ
 岩そゝぐ垂水の上のさわらびの萌ゆる春日に
 散る櫻かな

足引の山の櫻は花咲けど昔の人にまたも逢は
むやも
亂れ散る櫻の中に眞金ホふく高火床ドつきて釣鐘
鑄るも
咲き残る櫻ほろく散る見えて上野の岡は青
葉になりぬ
年長く思ひたのまむ人遂に花散る春をみうせ
けるはや
玉しきの都少女は花染のころも著つれて櫻狩
すも

ひぢりこの花くひもちてつばくらの塗ごめの
巢に塗りこむるかも

○選者詠

櫻咲く御國しらすと百敷の千代田の宮に神な
がらいます
櫻咲く濱びの宮に外つ國の使等召して大御言
たまふ
さす竹のみ子のみことの大み女をめすらん年
と花咲きさかゆ
高砂の新高山に咲く花はやまこの花に似て似

ざりちふ

み城のもとのいやしき民は櫻咲く上野の園に
出でし遊ぶ

八ちまたのちまたの櫻花咲きて都の空は夕曇
りせり

岡の上に天凌ぎ立つ御佛の御肩にかゝる花の
白雲

黄金塗り丹塗り青塗る御魂屋の鳥居うづめて
花咲きにけり

御魂屋の杉の林の蔭に咲く老い朽ち櫻花の乏

しき

人群るゝ花の林を行き過ぎて杉の木の間で鳴
く鳥聞ゆ

雨にして上野の山をわがこせば幌のすき間よ
花の散る見ゆ

小夜ふけて櫻が岡をわが行けば櫻曇りの薄月
の暈

櫻咲く上野の岡ゆ見おろせば根岸の里に柳垂
れたり

くれ竹の根岸の里にかくれたる人を訪ふ日の

薄花曇

百三十八

玉川のながれを引ける小金井の櫻の花は葉な
がら咲けり
大川の川のつゝみに咲く花の薄花曇はたなび
きにけり
春の日のみ空くもりて隅田川櫻の影はうつら
ざりけり
櫻咲く隅田の堤人をしげみ白鬚までは行か
で
歸りぬ
足柄の山の櫻をねもごろに見ましく思へど汽車

とまらず
雨そゝぐ櫻の陰のにはたづみよどむ花あり流
るゝ花あり
我宿の山吹咲きて向つ家の一重櫻は葉となり
にけり
ひがし風にはかに吹けば古杉の林の前を花飛
びわたる
家へだつをちの木末に咲く花をい吹きまどは
し我庭に散る
年長く病みしわたれば花をこひ上野に行けば

百三十九

花なかりけり
 ガラス戸の外に植ゑおける櫻花ふゝむ咲く散
 る目もかれず見き
 たま／＼に病のひまに花見んと端居する日の
 晴れて曇りぬ
 久方の空曇る日の櫻花ま咲きしみ咲きいまだ
 散らなく
 花散りて葉いまだ萌えぬ小櫻の赤きうてなに
 ふる雨やます
 からかさの借りのむくい庭櫻のあたら太枝

折りておこしぬ

白きにはえ赤きにはふ遠里の櫻の色に繪か
 きは惑ふ

○第三回募集短歌に就きて

竹の里人

第三回募集短歌は應募の歌數三千をも越えたりしかと思はれ一人出詠の數前回に比して著
 く増加せり。(出詠人數は餘り増加せず)従ひて佳
 作の多き事亦前回の比にわらず。しかも佳作の
 増加したる割合の歌數の増加したる割合より

も遙に多きは最も喜ぶべき事にして一般歌界の進歩を證する者なり。古來小區域に跼蹐して陳套を脱する能はざりし櫻花が如何に新鮮の空氣に觸れて絢爛の美を現したるかは連日掲載の短歌を見し人の熟知する所なるべし。且つ其語法句法の工夫は一段の巧を加へ文字の斡旋は能く言ひ難き新意匠を最も容易に言ひ得るに至れり。特に其中の傑作と稱すべき者幾首は優に古人を凌ぎて不朽に垂るゝに足る。余輩は此盛況を見て歌界の進歩を卜し欣喜措く能

はざると共に、一箇の作者として自己を顧みれば實に慚愧に堪へず。

今回の出詠の多き、左千夫氏(東京)の百首、秀眞氏(東京)の七十首を始とし、六十首五十首四十首、少きも三十首二十首を下らず。此の如き者、課題の尋常なるに因るとはいへ諸氏の熱心なるによらずはあらず。選抜の比例の多き者を擧ぐれば、岡麓氏(東京)の歌三十首にして十六首を抜ける、葯房氏(東京)の歌二十首にして十四首を抜ける、格堂氏(東京)の歌三十首にして十五首を抜ける

が如き其最なる者なり。

諸氏の風調を見るに、秀真氏の歌は趣向の簡單（殊に莊嚴）なるを貴び調子も一氣呵成に直線の如く言ひ下せしを喜ぶが如し、材料を神代記に搜るは氏の長所なり。其弊は孱弱に失するに在り。左千夫氏の歌は趣向の平淡なる者（寧ろ趣向無き者）を好み之を運用するに萬葉の文字を以てす。故に其佳なる者は萬葉に出入し然らざる者は無味乾燥に陷る。麓氏の歌一變し再變す古今調を捨て、俳句調を取りしは其一變にして、

今又萬葉の古調を取りしは其再變なり。其變ずるや急にして劇、人をして端倪する能はざらしむ。其三變するを待つて詳に評する所あらん。格堂氏の歌、初め放膽に失し今小心に返る、初め複雑に過ぎ今簡單を尙ぶ。善く摸し善く變ず。縦横馳驅疲るゝ事を知らず、兵の精なる者なり。然れども善く摸する者は初に進む事早くして後に進む事遅し。宜しく立脚地を定めて自己の特色を發揮するに務むべきなり。葯房子氏漢詩の想を以て和歌の調を爲す。古樸にして蒼健、高華

にして爽朗、格の老、調の高、萬葉に似て、しかも言ふ所皆多少の新意を出だす。専門歌人顔色無し。加藤哲壽氏(二本松)の命意斬新にして用語奇抜なる、安江秋水氏(東京)の清新秀麗にして材料豊富なる皆な以つて珍とするに足る。殊に巴子氏(大阪)の未だ丁年ならずして多く作り善く詠むに至りては真に喫煙男子をして愧死せしむる者。其意匠の盡く新奇にして他を模倣せざる、語句の幹旋自在にして生硬ならざるが如き得難きの才なり。我望を後來に屬す。少年魔多し。幸に

蹉跌する莫れ。

募集三回に及ぶ。第二回は第一回より進歩し第三回は第二回より進歩す。譬へば高塔に登るが如し。第一層は未だ地を離れず。第二層は尋常人家と相對す。登つて第三層に至りて四顧豁然、復た草木家屋の眼を遮るなし。是に於いて始めて塵寰を超脱するの思あり。更に登つて四層五層に至る、登る愈々高うして見る愈々廣く、見る愈々廣うして感愈々深からん。余輩復た多言せず。

小金井遠乗の事かしこきかたよ
りの仰かしこまり申していでた
ちし都司縣司の一むらのいきほ
ひゆゝしと見る間にま逆さまに
馬より落ちたまひけんとかや新
聞の上に見てだに胸つぶるゝに
人を疵つけずやと憂ひ思ひて

左 千 夫

大御代に逢へるしと百司駒うちなめて櫻
狩すも

大御代の榮ゆる春を貴人の遠乗すらし櫻見が
てり

白金のくつわかませて荒駒をうち並め來たる
増荒夫の伴

花のもとに大みけ給はり幕の外に八百駒いな
なく小金井の里

咲きをゝる櫻のもとに御しるしの幔幕うちて
うたげすらしも

大御酒に酔ひたるあそが乗る駒を落ちのどよ
みに花散り亂る

同

格

堂

御廐の大き御駒にまたがりて鄙の長路を踏み
 とろろかせ
 遠乗の司等やすむ小金井の花の林に駒つなぎ
 居り
 小金井の川の岸邊に駒とめて息づき居れば櫻
 花散る
 玉しきの都路さかり小金井の櫻かざして駒乗
 りかへす
 何食ひて斯く肥えぬらん司等のみさらひ重み

駒かいすくむ
 荒馬に乗るをかしこく君思はゞとはに動かぬ
 木の馬に乗れ

同

竹の里人

司等がむさぼる筥飯のこなれがたみ花を見て
 來の御言のかしこさ
 司等の足搔の音に田居中にはらばふ牛の夢さ
 めにけり
 小金井の櫻はいまだ見えなくに腰骨いたし馬
 しましとめ

千里行く龍の荒馬はうま人をゆり落さんとな
けりにたける
うま人が馬踏みはづし落ちにけん其あところ
ろしめ立て、置け
おのもく、櫻かざしてかへり来る四位のか、
ぶり五位のか、ぶり

○春雨

春雨のふた日ふりしき背戸畑のねぎの青銚な
み立ちてけり
左 千 夫
なぐさみに植ゑたる庭の葉廣菜に白玉置きて

春雨のふる

同

此頃の二日の雨に赤かりし楓の若芽や、青み
けり
同

浅茅原茅生の焼原やけ跡の灰の黒きに春雨の
ふる
秀 眞

清元の三味の音するうら町の青柳小路春雨の
ふる
同

川口の中洲かくれてみつ汐のうしほにそ、ぐ
春の朝の雨
同

日の一日春雨ふりて籠に飼ふ眼白カナリヤ巢

三子

にこもりけり
人車車も人もかへり行きて夕山櫻雨となり
けり

同

いたづらのをさな遊びの壁にかくあひく傘
に春雨のふる

同

君とさす蛇の目の傘の傘の端ゆもる春雨に我
袖濡れぬ

格堂

曉の小雨は霽れて青柳の絲にしたゝる玉の如
き露

同

夕暮の雨に窓あけわが庭の櫻の花の散るを惜

みぬ

同

霜おほひの藁取り捨つる芍薬の芽のくれなゐ
に春の雨ふる

竹の里人

同じ窓にまなぶわらべの櫻見に群れ来る日を
雨ふりいでぬ

同

ともし火の光に照す窓の外の牡丹にそゝぐ春
の夜の雨

同

竹の里人のガラス窓の歌に和す

格堂

冬ごもる君が庵はビードロのガラスを張りて

あかるくなりぬ
 曇れるを拭はしむればガラス戸にガラスの板
 のありとしも見えず
 雪積めば雪の積む見え鳥來れば鳥の來る見ゆ
 ガラス戸うれし
 朝な／＼ガラスの窓に日の照りて閨の疊に松
 の影あり
 ビードロのガラス戸越にいつも見ゆる上野の
 森は君が歌に句に
 君が庵に歌よみ居ればガラス戸ゆ上野の森に

鳶の飛ぶ見ゆ
 ビードロのガラス戸越に日の當る君が袂はぬ
 くゝあるらし
 ともし火の火影うつれば鬼や猿や耶蘇の見ゆ
 るといふガラス窓
 竹の里人をおとなひて席上に詠
 みける歌
 長塚節
 歌人の竹の里人おとなへばやまひの牀に繪を
 かきてあり
 荒庭に敷きたる板のかたはらに古鉢ならび赤

き花咲く
 生垣の杉の木低みとなり屋の庭の植木の青芽
 ふく見ゆ
 茨の木の赤き芽をふく垣の上にちひさき蟲の
 出で、飛ぶ見ゆ
 人の家にさひずる雀ガラス戸のそとに來て鳴
 け病む人のために
 ガラス戸の中にうち臥す君のために草萌え出
 づる春を喜ぶ
 古雛をかざりひ、なの繪を掛けしその床の間

に向ひてすわりぬ
 若草のはつかに萌ゆる庭に來て雀あさりて隣
 へ飛びぬ
 ガラス戸のそとに飼ひ置く鳥の影のガラス戸
 透きて疊にうつりぬ
 枝の上にとまれる小鳥君のために只一聲を鳴
 けよとぞ思ふ(坐上に剝製の鳥あり)
 詠煙歌一首并短歌
 左 千 夫
 たらちねの母のみことが、好ませる餅につくら
 ん、足引の山のさ百合は、花の時ぞ味はよろしき、

花の時は掘るをたやすみ、鶴^{ツル}嘴^{ハシ}に提籠とりそへ、
いざく^くと吾妹がいへば、向つ尾の小篋かきわ
け、しげ山の萱おしふせて、たもとほり花をしを
りと、白玉のまさ根を探り、百合玉は提籠に満ち
ぬ、今はとて家路をさせば、家里に煙はのぼる、吾
家の煙なるらし、さ百合餅作らんしると、吾妹子
がさ湯わかすらし、吾家の煙

反歌

老い人の母が待つらん木の間より煙しのぼる
さ湯わかすらし

煙

麓

けふりやけふり、異なるけふりに、うごめかす高
き鼻ひきし鼻、鼻の穴空向く人や、沈の木と伽羅
とを知らに、うごめかす高き鼻ひきき鼻

煙

竹の里人

都べの愛宕の山に、のぼり立ち國原見れば、大家
に煙ふとしり、小家には細くなびかひ、十よろづ
のかまどころく、燃ゆる火の消ゆる事なく、い
や日けにさかるちまたに、住める我はも

祝賀の部

奉祝東宮殿下御婚儀歌並短歌

幸次郎 左千夫

阿米の下四方の人の、天水のあふぎて待ちし、春
の木の実をむすぶ時に、若葉山さかゆる時に、高
光る天つ日繼の、吾大王皇子の命、八百萬千萬神
の、神たすけ保たせまして、天地と長く久しく、萬
世にかけて契らす、事の尊さ

反歌

天地の千萬神の神守りいまもるからにちぎら
せたまふ
大ぎみの大御ことほぎことほぐと天の下人狂
ひまどふかも
天の下の草木にさやぐ風の音も皆ことほぎの
よろこびの聲

東宮御婚儀をことほぎまつる歌

重治 茂春

草も木も芽をはる頃を日のみ子のみ女めさし
ます常さかえませ

もの皆の榮ゆる春のよろしき日みこの尊のみ
め召したまふ

天津神國津御神に告げまくとみめと並み立た
す高光る日の御子

八百萬千萬神の神はかりみ女立たします日の
みこのため

みめの手を日の御子とらしすめ神の陵の前に
ぬかづきたまふ

八重垣を赤坂の宮にきづかせて妻ごもらさす
天つ日のみこ

みめめさす日つぎの御子をほぎまくと山川の
より萬代つかふ

すめ國のよろこびの日のみしるしに文かよは
しの手がたつくらす

みめ立たす日つぎのみこは常世ませと國かた
ふけてほぎ狂ふかも

日嗣の皇子みめめしたまふよろこびにうなね
つきぬき歌たてまつる

同

龜 一格堂

大御女をめす日空晴れ九重の宮居の上に豊雲

たなびく

御車の過ぐらくの道青垣のアーチをつくり旗

まじへ立つ

御民われ生けるかひありてすめみ子の大み祝

ひに逢へるぞうれしき

品川の沖に艦寄せみ祝ひを祝ふ砲の音天地ゆ

らぐ

東の宮の祝ひに都路のちまたやちまたにぎは

ひ榮ゆ

み祝ひの大御盃たまはりし都の司縣の司御民

等の祝ひごもし、花ガスに都大路の夜晝の如
し

すめみ子の大みちぎりを天地のかきはここは
にことほぎまつる

同

惟一潮音

神風の伊勢の大海に立つ岩の二見が岩にあえ
て千代ませ

待ち居れば今日となりにけりすめみこのみ女
とらす日は今日となりにけり

うち日さす都の人の今日ほぐと檐並かけしつ

くり藤花

百六十八

さす竹のみこのみことがあからひくしきたへ
み女をめさす今日はも
天地の神のよざしに高光る日つぎのみ子の大
み女めさす
春の日のうらくに照る日の御子の御女めす
今日と霞たなびく
今日祝ぐと品川の海に来つどへるみ艦ことご
とよろしき名なり
大宮の千代松が枝に田鶴鳴きて百よろこびの

聲にあはすも

同

麒太郎三子

日の皇子の大御車ををろがむと道のちまたに
かしこみいならぶ
あめなるや月日の如く日の御子の御子の宮居
に神ながらいませ
たまちはふ神のみちぎり萬世に常世にませと
ほぎ歌たてまつる
日の御子は大御女とらし八重雲の雲のおくか
に神づまります

百六十九

大御子をことほぐ聲に百つとふ都やちまた天
地震ふ

天照す神の日つぎの御子の宮へほぎ言申す百
司人

門ごとに御旗をかゝげ檐ごとにほぎ提灯をつ
るして祝ひぬ

日の御子のみあひます日のことほぎのよろこ
びの餘り國內は狂ふ

同

三郎 麗

八ひろどの左みぎりにめぐらし、神の御末の

みめめさす日ぞ

寶田の千代田の宮のひじり代のひつぎの御子
のきさき立てさす

天の下さちはひよろこびしるしありて日つぎ
のみこのみめたてたまふ

牡丹赤く藤むらさきの花ぞのにみか高すうる
神ほぎとよほぎ

耳に目にまそけむ民は今日の日をいはゝざら
めやうたはざらめや

同

貞子

春花の榮ゆく御代の日のみこのきさきめす日
をいはひよろこぶ

日の皇子のみめめすといふ今日の日
に花房長く藤咲きにけり

同

常

規

おのころや天の柱を、御國の中つ柱と、左ゆ左め
ぐり、みぎりゆみぎりめぐり、言わけの御言よろ
しみ、生みませる島の八島を、すめみまの御子つ
ぎく、の、をす國とのらせ給ひし、いひしらす古
き神代ゆ、天地の絶ゆることなく、日と月と照り

あふがごと、い並びてをさめたまへば、その道は
たけくあきらけく、めの道はなびかひしたがり、
玉くしげ二つの道を、今もかも日つぎのみこの
みめめすと定めのをらせ、日はあれど今日の足り
日を、みあひます日のよき日と、八百よろづ千よ
ろづ神の、神はかり告げのまに、く、大宮のかし
こどころの、大前に真榊をなへ、うたのかみ笛吹
きならし、のりとづかさのりとを申し、神契り契
りたまへば、宮人はうなねつきぬき、司等は膝折
りふせ、言のきはみほぎ言ほぎ、品をつくし品た

てまつる、とつ國のおほやけ使、彼皆も廣ぬかつ
きて、言さやぐよごまをせせば、賤しけど御民
我等も、旗かゝげ門に火ともし、千世ませとわが
いはへば、天地も答へて呼びぬ、八千代ませとあ
がことほげば、草も木もともにとよみぬ、君が代
の榮ゆるさがと、紫の色なつかしみ、藤波の花か
づらきて、をし鳥の袖うちかはし、うたひ舞ひ賤
もたぬしむ、文字もなき賤にしあれど、めをの道
はやも
すめろぎの御子のみことと大み女と玉串さゝ

げ神ちぎります

さす竹の宮人祝ふ今日の日藤をかざして民
もよろこぶ
くれなゐと眞白と並び咲く花の牡丹も君をこ
とほぐが如し

五月十日御慶事をことほぐ歌

秀治郎秀眞

白金黄金、くさくさの眞金を刻み、赤玉白玉、いろ
くの眞玉をかざり、たくみらがたくめる寶、横
山なす置き高なして、みめめさるみ子の御前に、

ことほぎの事のしるしと、國人おのもくたて
 まつる
 皇御子のみめめさる日と朝日の豊さかのぼり
 にたへへごをのる
 青山のみこの宮居は遠長に妹脊二柱さきくあ
 りまさん
 み民われ大御代にあらてすめみ子のみめめし
 たまふよき日にあひぬ
 たなごこをやらへくくに打ちあげてみ子の八
 千代をことほぎまつる

かつしかの十握稻の穂かめる酒うまらに飲み
 てゑらく今日かも

奉祝東宮殿下御婚儀

睦之介五坊

日の御子のみ女とらす日を朝日さす御前の池
 に龜群れ遊ぶ
 百つどふ都大路を行く人の老いも若きも藤花
 かざす
 日の御子の御女とらすとふ日の本は昨日も今
 日も日和なりけり

寶田の千代田の宮の老松のほつ枝しづ枝に藤
 の花咲く
 み民我いけてし祝ふ藤波の花房長くさきくま
 しませ
 青草の萌ゆる大野に日の御子の御女とらす日
 を出でし遊ぶ
 み民我大聲あげてことほぐを雲の上にもきこ
 しめさんかも
 玉ちはふ命たふとし大御子のみめとらす日に
 あへらく思へば

大御子は御女とらすとふ葎生の家にしあれど
 酒酌み祝ふ
 房長の藤花いけて日の御子の御女とらす日を
 ほぎ歌つくる

○藤花

龜井戸の社に庭に咲きさかる藤長うして水に
 垂れたり
 格 堂
 神さぶる龜戸の宮の御園生の池をおほひて藤
 咲きさかる
 同
 龜井戸の神の御前に紫のみすだれなして藤咲

きさかる

同

四角なす棚のめぐりに咲きさかるしだり藤波

晁にかも似る

同

化粧間の鏡のわきに紫の藤の花あり鉢植にし

て

左 千 夫

藤棚の影さす池に飼ふ鯉の尾ふり鱗ふり目を

よろこばす

三 子

鈴房のみ藤の花の紫に染めたる袖を妹がふる

見ゆ

興 安 嶺

百花の千花を絲につらぬける藤の花房長く垂

れたり

竹の里人

廣庭の松の木末に咲く藤の花もろ向けて夕風

吹くも

同

廣前の池の水際にしだれたる藤の末花鬢にさ

やりぬ

同

公達がうたげの庭の藤波を折りてかざ、ば地

に垂れんかも

同

池の邊のさじきに垂る、藤の花見れば長けく

折ればみじかし

同

吾妹子が心をこめて結びにし藤波の花解かま

く惜しも

同

吾妹子が手馴の琴の絲の緒と長さあらせふ藤
波の花

六月一日四つ木の吉野園に遊びて

左 千 夫

岡のへの木立の中の御社に旗立てゝあるそこ
にも花あり
あづま菊うす紫の花見れば家なる妹をおもほ
えなくも

吾妹子が下著の襟の紫の色によく似し花あや

めかも

池をつくり溝をつくりて土橋板橋あなたこな
たに花植ゑし園

くれなるの唐くれなるのけしの花夕日を受け
て燃ゆるが如し

園を廣み木立めぐらし田をつくり千うね八千
うねあやめ植ゑにけり

梅のもごにけしの花咲き松のもごにあざみ花
咲く藁家のみぎり

むら立の八千本葵おのもく節目正しく花咲

きにけり

あかねさす夕日を受けてむれ咲ける八重の金
せん花まかゝやく

露の葉の廣葉ほこりてかよわなるくはし草花
かたより咲けり

募集 附聽平家琵琶
課題 讀平家物語

かけまくもあやにかしこきすめろぎの花の御
姿かくれたまへり(壇の浦) 以 佐 雄
淺茅が原蓬が袖とあれにける大宮所見れば悲

しも

芳 子

七萬騎くりから谷に音もなく竹生の島に琵琶
の音ひく 蕨 眞

禿らに赤直垂はきせつれど六波羅殿は黒はら
にして 無得居士

海原の御船の宮居神さびて龍の御袖は鹽垂れ
にけり 桐 子

八島瀉沖の潮路の八百あひに浮鳥なしてたゞ
よふ平家 哇 守

富士川の鳥の羽音に驚きて逃げかへりけん平

の維盛

孤山生

千少女に風をさへぎる福原の都思へば吾肉動

く(清盛)

芳雨

玉藻かる八島の浦に寄る浪のまなく此頃都し

思ほゆ

松の舎

○

安江秋水

鬼が引く車にのりて清盛は黄泉つひら坂こえ
にけむかも(清盛)

かしこきや年の初日もみかどべに腹赤も來な

く國栖も上らず

○

泊村

袖にすがりともづな引きてなく子なす慕ひし
舟はいや遠ざかる(俊寛)

紫のにはへる妹を思ひかね心おこし、瀧口入

道

○

安藤橡面坊

薩摩瀉八重の汐路の波の上に卒都婆流すも遠

風にして(鬼界島)

樂おこる御幸の舟に花散りて大宮人の舞の袖

見ゆ(嚴島行幸)

桃澤茂春

○
 大みかど紅衣の禿いで入れど大み門もりこと
 問もせず
 久方の月夜さやけみひく琵琶に妙音天のあら
 はれたまふ
 鍬形の黄金かなものきらびかに名をのらした
 る檢非違使義經(竹生島詣)

秀 眞

かゝふりも衣の様もおしなべて六波羅さまに
 世はなりにけり

すがめの伊勢のへいしの後の子が榮ゆる見れ
 ば腹打ち立たる
 ながされのゆるされの文卷さかへしくりかへ
 し見れど吾名は見えず
 はろばろに安藝の國までみゆきせず君がみ心
 神知るらんか

左 千 夫

赤根さす夕日の風に紅の旗ひるかへり船なみ
 まろふ
 風をいたみなみてよろへる八百船に白木綿花

の浪うちをどる
おのもくきほへる駒のむながひに白玉をど
らせ海のり渡す
敵味方おめきくるひて波の上に千矢の八千矢
のとびちがふかも
うら若き尼の三人が出て汲むあかゐのもとの
山吹の花(祇王)

○

長塚節

野に山にたらひわたれるものふのをたけぶ
なして水鳥たちぬ(富士川)

綱とると尻毛手握りむちうてば後の方へ馬馳
せいだす(同)

逃げ去りしいくさの跡に亂れたる弓は弱弓矢
は細矢にて(同)

かしこきやすめらみことにありながらありと
ふ妹が家も知らなく(小督)

かしこきやすめらみことにありながら朝な夕
なに妹を戀ふらく(同)

人の臣のかしこきかもよ人の君を板屋の中に
こめたてまつる

君故にさかえし我よわがために衰へたりし君
をかなしむ(佛)

○

巴

子

大口の尾はた鱸のさをどりて舟に入りしぞ神
つげなるらし
さく花の咲のほこりに咲きみてる平の家は常
春にして
海の上の宮にしあれば風のむた潮のみちさし
安き時なし
打日さす都邊さかり舟なめし海原の上の大宮

所

あらかなみの底に白玉眞玉しくすめらみことの
わだつみの宮
わだつみの底さへにほふ白珠の珠のみ形みう
せけるはや
むら竹の竹のさゝ葉のしげり葉のふれあふ如
き平家琵琶の音
ぬばたまのめしひ法師が弾く絲の琵琶の音細
く泣けるが如し

募集歌「讀平家物語」に就きて

初め募集歌の題を定むるに當りて彼か是かと考へし後無造作に「讀平家物語」の一題を選び寧ろ其好題目なるを思ひき。しかも題を公告して後靜かに考へて難題なりと始めて氣つきぬ。諸君の投吟を見るに及んでいよいよ選題の惡かりしを悔い、自ら作らんとしてますます此題のむつかしきを悟りたり。諸君の投寄にかゝる歌は人數に於て少かりしも歌數に於ては決して少からず。蓋し一人出詠の數、百首以上に上りし

もの一二、五十首以上の者四五もありたらん。されどよき歌を選せんとするに及んで其よき歌は歌の數の多き割合に多からざりき。平生一かどの歌よみといはるゝ人にして猶且つ失敗を免れず。況して地方にありて研究の足らざる人は百首を投じて僅かに一首の活を得る者猶幸なり一首も抜かれずして一束の故紙となり了りし者蓋し十の七八に居る。こはあながちに歌の惡かりしにあらず此題に對する詠み方の惡かりしなり。

募集に應ぜられたる殆ど總ての諸君は、事實其儘を詠めば可なり、この誤解を抱かれたるが如し。人の知らざる事實其儘を歌に詠みて面白き歌となる事はあれど平家物語に在りて既に世に知れ渡りたる事をありの儘に歌に詠みたりとて、作者の手柄無きのみならず、讀者も亦何の面白味をも感ぜざるべし。殊に平語中にある文句其儘を用ゐたる歌に至りては殆ど同一の作が異なる人の手に成ることさへ少からず。斯る場合に於いては共に取るべくもあらねば共に

捨つるあるのみ。かへすくも事實をありの儘に詠み文句をありの儘に用ゐしは之を大誤解といはざるを得ず。

然らば此題を如何に詠むべきといふに二様の詠み方あり。第一は平語全體を詠する主觀的の作なり。されど此類の歌は變化すべき餘地無ければ多く作る能はず第二は平語中の或る一事實を擇び其事實に關する本文以外の光景を想像して客觀的に詠むに在り。此類の歌は無數に出來得べく且つ一題にて數首聯作を爲すに利

あるべし。

百九十八

余は第二の方法を取りて、先づ宇治川先陣を詠
まんと思ひ

宇治治川の早瀬よこぎるいけじきの馬の
立髪浪越えにけり

ぬば玉の黒毛の駒の太腹の雪解の波のさ

かまき來る

飛ぶ鳥のさきをあらそふものゝふの鎧の

袖に波ほどはしる

さきがけのいさを立てずば生きてあらじ

と誓へる心生食知るも

など試みしが終に多くを得ざりき。蓋し此様の
よみ方にては普通に固有詞(人名地名馬名等)を
用るれば歌として面白からず、又用るざれば平
家物語に遠かりて適切ならず。たとへば宇治川
とか生食とか佐々木高綱とか詠めば歌は佳な
らざるも平家物語の歌とこそ聞ゆれ、若し此等
固有名詞を省かんには常人が馬に乗りて川を
渉るといふ一般の光景を詠める者となるべし。
此困難は自ら作りて後に初め思ひしよりも更

百九十九

に甚だしきを知れり。

宇治川先陣は事實上想像の及ばざる事多く従つて詠み難ければ、想像し得らるべき事實を詠まんとて、嚴島行幸の歸途四月朔備後しきなの濱にて

岸に色深き藤の松の枝に咲かゝりけるを上皇叡覽ありてあの花折りにつかはせと仰せければ大宮の大納言隆季の卿うけたまはりて雑掌仲原の安貞がはし舟に乗りてをりふし御前を漕きとほりけるを召してをりにづかはす藤

の花を松の枝につけながら折りて參らせたりければ心ばせありなど仰せられて御感ありけりこの花に歌つかまつれおのくと仰せければ云々とあるくだりを

九重の雲居をいで、藤さけるしきなが濱に御船はてけり

藤咲けるしきなが濱に風吹けば御船によする紫の波

夏に入る旅なれ衣ぬぎもかへず磯の藤浪

折りてたてまつる

藤の花さゝげもちたるみやつこを載せて
漕ぎ來る棚なし小舟

龍がたの御船にまけし玉しきの御座の下
に藤たてまつる

みつかさの折りてさゝぐる松が枝に長さ
短き藤浪の花

よろづ代をいはひて折りし松が枝に二房
垂るる藤浪の花

松が枝を折りてさゝぐるみやつこの其手

震へか藤浪ゆらぐ

松ながら折りてさゝげし藤浪の花はむし
ろを引きずりにけり

大君の御前にしぼむ紫の藤浪の花捨てま
く惜しも

など試みたれど事實が普通なるだけいよく
平家物語には遠かりたる歌となれり。

さはれ此の如く詠むにも善き題目さへ見つく
れば歌として面白く且つ題にも適切なる者出
來ぬには限らず平家物語にはなけれど梅が枝

源太の如きは屈竟の好題目なるべし。梅花といふ材料既に詩的なるが故に、其梅花を主として梅花の進退駈引の有様を詠まば歌としても面白かるべく、且つ梅花と箴、鎧、いくさなどゝを結合すれば、一の人名も地名もなしに、直に梶原源太が生田の戦なる事を知り得べく、題に適切なるはいふ迄も無し。かしこけれども安徳天皇御入水の事の如きも天皇御入水の事をだに詠まば御名も地名もなくとも壇の浦たる事はまがふべくもあらず。

つまる處「讀平家物語」といふ題は歌にならぬにあらねど募集歌の題としては適當の者にあらざりき。余は題の選擇に就きて失敗し、諸君は歌の詠み方に就きて失敗せられたり。

雑の部

西公使を憶ふ

格

堂

針金のエレキのたよりありつげと君がたよりは今日もなかりけり
飛ぶ鳥のたよりも無ければ長らへて君が歸らん

其も知らえず
 唐山に傾く月を見て君は古郷人を如何に思ふらん
 急飛ぶや天馳使ありとへど君がたよりを聞く道なきを
 長らへて守るか仇に斬られしか唐なる君のたより知らずも
 諸國の使等むたに斃れきと聞くはあよづれならんを願ふ
 氷雨なしたばしる丸の下にある君が命は明日

も知られず
 這虫の蟻が抜け行く穴もなく八重かくまれて君苦しめり
 如何ならん日の時にかもあだ中の君をすくひて歸らふべきか
 唐にして斃れん其は悲しけれど大日本島秋ツ國の爲
 青淵の龍にもがもや願に君を隠して急歸るもの
 千重八千重君を圍める鬼垣を諸薙ぎ倒す神太

刀もがも

二百八

吾聞きし耳違はずば君は今黄泉つ平坂こえつ
ゝあらん
さけんすべせんすべ知らに極まりて君唐山の
月に泣くらん

賛日章旗歌并短歌二首

左 千 夫

常には天の下國。あなづらひ思ひくだして。われ
のみそひらけし國。吾のみそ強き國と。みどり目
の赤毛の族。いやほこりほこりてありしを。唐山

は裂^レ火飛走。諸越はつむじ吹きまき。諸國の人の
命は。風にちる露よもゝろし。それをしもすくは
んためど。日の本の我國人も。つよき國開けし國
らと。諸共に軍つらなめ。敵討とむかひし時に。日
の旗はつねに先たち。日の旗のさきにあだなく。
奪ひたるとりでの上。先つたてる旗は日の旗。
たゝかひのやみたるあと。は。諸越の家のことく。日
日の御旗軒にかゝけて。諸越の人のことく。日
の御旗手にとりもちて。高光る天津日かけに。草
木の諸むくことく。秋津神吾 大王の御惠をひ

二百九

たにあふくか。吾のみそつよき國。吾のみそひら
けし國とほこりたる諸國人は。いかさまにもひ
てや見たる。天津日の御旗。

反歌

千萬の家のことくく日の國の御旗のかけにか
くろひにけり
千萬の人のことくく日の國の御旗手にもちゆ
きかよふかも

送格堂歌

左千夫

君か歌に、常に泣くなる、鬼神のはしき鬼らは、故

さに、かへりみすると、君がゆく、旅のさきく、
君か乗る、船にまつはり、君か乗る、車にいより、山
ゆかは、山をもまらひ、水ゆかは、水をまもらひ、ゆ
くみちも、かへらふみちも、まさきくと、まもりて
あらむ、そこもへは、君か旅路は、はるくくに、遠く
あるとも、夏の日の、熱くあるとも、さはりあらめ
やも

答左千夫戲作歌

格堂

金鎔くる暑さを避くと、鶏がなく東路出で、草
枕旅行く我を、何しかも赤鬼青鬼、右行けば右に

いまどひ、左せば其處にもつどひ、五月蠅なし、追
へど去らねば、船乗れば船傾かひ、駒乗れば駒足
なづみ、天離る鄙の長路を、牛じもの遅くし行か
ば、朝夕にあをまつ妹は、戀ひ死なんかも

反歌

五月蠅なす鬼もろ連れてかへりなば里人恐れ
否といはんかも

富士に登らずして故郷に歸る格

堂に贈る

竹の里人

駿河なる富士の高嶺に、のぼりたち峰の八尾踏
み、岩陰に残れる雪を、神わざとくゑはららかし、
其雪の吹雪となりて、ひんがしの都をおほひ、暑
き日に病みてなやめる、我庵にふりもくるかど、
今日も待ち明日も待たんを、其山に登りても見
ず、たらちねの母の國へと、ひた走るかも
富士のねに咲ける薊を吉備にある親に見せん
と君思はずや

春花の花より赤き霜葉に夕日照りそふ瀧の上
の森 圭 岳

築山の青葉かくれにめぐりきて細き瀧つ瀬園
の池におつ 紅 爐

足引の山どよもして落たきつ瀧の河内に散る
紅葉哉 田中信次郎

七つ釜七つ神瀧神すさひ岩根こゝしく木根立
茂る 木 公

山藤のしたばひ咲ける岩かひの龍の口より細
たき落も 柴 人

瀧の絲岩に碎けて亂るなり百玉千たま千たま
百玉 松浦襄次

仰ぎみれども極みもしらに伏しみれとそこひ
もしらに瀧かゝり居り 三井重彌

天くだり天つ女神の羽衣を脱てかけゝむ布引
の瀧 村 の 家

里人のうばらかりそけ平に作りなしたる瀧の
細道 花 叟

さきりこめ八谷の岩木鳴りふるふ瀧の岩ふち
巨蛇すむらし 鴻 爪

岩山の岩をこゝしみわれて裂けて八流になり
て落つる瀧はも

瀧 水

あさもよし木人かよへる山そまの岩瀧清水か
れはてにけり

東 美

八千筋の千筋に分ち吾妹子が梓カセにかけたる白
糸の瀧

東 人

松木たるいはほ岨路こえゆけは掛茶屋ありて
たきつせかゝる

以 佐 雄

雲みより瀧こそ落れけたしくも天の川水溢れ
くらんか

平野比呂志

西椎屋の瀧の水源さくらんとゆきにし人の遂
に歸らす

兒 島 生

○ 鮮衣のさゝりひやく山川の其水上は瀧にざ
りける

哲 壽

足引の山より落る瀧つせに車しかけて米つか
しめぬ

○ 巴 子

さくなたりに雲間ゆたきつ瀧つせのしふきに
濡れてもみち葉あかし

瀧の神が瓊音もゆらにとりゆらかし山どよも
して白珠流す

○ 里 静

おどろく落ちくる瀧に腫すゑて瀧見不動は
とほに睨めり

出雲のや簸の川上の鳥上の瀧をし見れば神無
しおもほゆ

○ 無得居士

久方の天の川水みなぎりておつるか飛弾の白
水の瀧

千萬のたはしるたきの玉ことに月讀の神やと
りたまへり

○ 蕨 眞

たなはる青垣山のもみち葉に見えかくれつ
瀧おちたきる

天くものたなびく山よ珠つゝる瀧やまの上に
天津少女の浴みし水かも 旋頭歌

○ 橡 面 坊

山ひめのすゝしの袖をうちかへし立ちまふら
しも霧降の瀧

あら瀧の瀧の玉水うちそゝく岩のほとりの白百合の花

○

秀 眞

みたらしの御前の水をひきおとす春日の森の白藤のたき
五百筋のガラスの管をたてなへてとはにかけたる山姫の宮

○

茂 春

木曾のみ嶽うしはく神をゝろかむと瀧つ瀬こ
とにみそきてのほる

瀧つほに二つの龍のあらそへか波わきかへり
やまなりとよむ
おちたきつ瀧のしぶきに常滑の岩橋ふみて木
こりいかよふ

○

武峰 淳風

足引の山の木の間のしらきぬは天津少女の衣
ほすなり
瀧つせに姫やますらむはたおりの日ごとにさ
らし夜もすから織る
たきひめは夜に日に織れとしらきぬの長き短

きかはらさりけり

二百二十二

○

元々野人

木綿ならば手にもまかむを岩ばしる水にしあ
れば手にまきかぬつ

はらわたの九曲コンマカの長みちをたとりくつて瀧の
音きこゆ

大汝少彦名の神たちの造らす國によき瀧たき
る

うつそみの老の命を養ひし多摩の里なる名に
負ふ瀧つせ

○

節

うちわたす二つの瀧の下つせの落合の瀬は木
深み見えず

二荒のふもとをゆけば野のきはみ山あひにし
て瀧かゝるみゆ

二荒の山のつゞきの山もとにたぎつ七瀧七つ
なみおつ

あしひきの山の夕立風あれて瀧のとゝろの音
もきこえず

杉の木のしみたつ山の山おくの雲湧くところ

二百二十三

たきおちとよむ

○

秋 水

足引の大山津見か瓊矛もて岩つきさけは瀧おちくたる

みよしぬの瀧津河内をきよみかも大宮たてし君かしらせし

あしひきの大山祇の神たきをひもろぎたてしいはひかしこむ

まくまぬの荒山たきに姫踏タ鞆ヲ五十鈴の姫かみ衣そぐはや

朝には朝雲つゝみ夕へにはゆふ雲ありくまくまぬの瀧

○

葯 房 子

谷蟻の巖こえくれは天の門ゆかゝれる水はみれとあかぬかも

蒼空にぬひ目もあれか久堅の天の漢道はもりてくらしも

此下に家居せらくは大空ゆ五百雷のつとひ來むかも

瀧つせはあらしふくらし千曝しの白木綿花の

みたれちるかも
瀑の門のいはに我居れば蒼虬すむ青ふちの底
に琴の音ぞする
たき川の凝らましかば青細竹のすの子にまき
て家つとにせむ

○

格 堂

瀧姫の玉ぬかまくとよりたらす其緒みだして
やまかせふくも
ま木立てる荒山おろし寒ければ冬はまだ來の
瀧垂氷せり

二荒山人に見せんと繪にかゝば山はかにかく
瀧大オホに畫け

常並の妹背の瀧の戀力くらハしみれば背瀧勝
めり

夢にみて目にはまたみぬみよし野の瀧の碎く
る思を吾せし

神わざの山斷ちきりし刀目カタメの深きところに落
つる瀧かも

君をこひ吾泣く涙瀧となり岩に碎けて七山ゆ
する

荒たきの華嚴の狭きり吹きわけて松倉山に雨
をもよほす

○

左 千 夫

白妙の長裳すそひく外の國の小女にあへり瀧
のへにして

夏草の菖蒲か浦に舟よせて龍頭の瀧を見にそ
わかこし

つがの木のしみたつ岩をいめぐりて二尾にお
つる瀧つ白波(日光龍頭瀧)

常ぬれにしふきにぬるゝ瀧つほの岩秀の苔は

いく世へぬらむ

鋸の齒なす刻める岩群に千玉八千玉をとりた
きつも(日光湯瀧)

あちたきつしふきの風にきしのへの岩群小草
とこなひきすも

瀧つぼにおりてみらくと苔青き五百個岩群を
足讀みてきたる(日光華嚴瀧)

とことばはに雨の横ふる瀧つぼの奇しき葉廣の
草とりかへる(同)

たきつぼのよとみ藍なす中つせの黒岩の上に

立ては涼しも(霧降瀧)

きりふりの瀧の岩つぼいや廣み水ゆるやかに
魚あそぶみゆ(同)

岩にふりたきつ水玉の千五百玉のたきのこと
こと歌にぬかましを

おちたきつしふきの水に歌人のそでのしづく
の玉ちりみだる(終)

詠華嚴瀧歌并短歌 左 千 夫

天雲のどはにあり居る。毛のくにの黒髪山に。百
たらす八十瀧あれと。魚の名のさちの海より。お

ちたきつ華嚴の大瀧。つはらかに見まくほりす
ど。河のへの五百個岩立を。ましらなすをとりこ
えつゝ。荒山のうはらしのはら。まゝしものいわ
けなひかへ。上つ瀬ゆ見さけおろせば。八千ひろ
にひたおちたきつ。いさほひの見のかしこく。雷
のとはにとゝろく。ひゝきの聞のかまこく。いは
ほすらゆきとほるへき。増荒夫もたゆたふ心。ま
す鏡みときてははまし。逆立てる岩秀にすかり。
鶉なすいはひもとほり。瀧つほにいたれる時に。
ほとはしるしふきのあらし。常雨のさかふる雨

に。劔太刀身はぬれとほり。諸袖に雫とはしり。か
ゝふりに水玉たきろふ。眞向けにはおもゝむけ
かね。仰きても見るすへをなみ。大巖のかけにか
くろひ。ままらくは立とまれとも。なつみこし心
そむきて。つはらにはさ見もかねつ。千早振荒ふ
る神の。神わさかいかしこき。この大瀧はも

反歌

たきつせのとはのしふきの濡岩にさけらく花
を家つとにすも

雑の部

華巖の瀧を見てよめる歌

格 堂

荒瀧の底を見まくと岩が根のこゝしき道を吾
傳ひ來し
逆立てる岩にすがりて八千尋の荒瀧壺を見お
ろすかしこさ
旭子の光照らせる八千尋の巖面に瀧の影動く
見ゆ

荒山の松倉風吹きつけて華嚴大瀧ゆらくに
見ゆ

瀧の邊のつがの木末の夫サルチカゼ羅さ霧に濡れてはつ
か垂れたり

ここしへに背をまさかねて立ち繁る瀧の裏へ
の一つ松あはれ

八千銚の天つ逆銚諸向に逆向くなして落つる
瀧かも

岩燕たゝさ横さに飛び狂ふ荒瀧壺は知る人も
まれ

天ぎらふ瀧のさざりにこめられて松倉山は常
曇せり

瀧壺の岩根に生ふる異草を取らまく思へど下
りがてぬかも

命あらばまたも来て見ん荒瀧の底つ岩根の常
草の花

○

廿八日の嵐は堅川の満潮を吹き
あげて茅場のあたり湖を湛へ波
は疊の上のぼりぬ人も牛も皆

にがしやりて水の中に獨り夜を

守る庵の淋しさにこほろぎの音

を聞きてよめる歌 左 千 夫

うからやから皆にがしやりて獨居る水つく庵
に鳴くきりくす

ゆかの上水こえたれば夜もすがら屋根のうら
へにこほろぎの鳴く

くまもおちすやぬちは水に浸れはか板戸によ
りてこほろぎのなく

只ひとり水つくわれやに居残りて鳴くこほろ

ぎに耳かたむけぬ

ゆかの上にゆかをつくりて水つく屋にひとり

し居ればこほろぎの鳴く

ぬは玉のさ夜はくたちて水つく屋の荒屋さび

しきこほろぎのこゑ

物かしぐかまども水にひたされて家ぬち冷か

にこほろぎの鳴く

まれく／＼にそどもに人の水わたるみおときこ

えて夜はくたちゆく

さ夜ふけて訪ひよる人の水音に軒のこほろぎ

聲なきやみぬ

水つく里人のともせずさ夜ふけて唯こほろぎ
のなきさふるかも

○

市兵衛古川の爺五位に叙せられ

て其髻を断ちたりとき、戯れに

詠める

格

堂

いなだきのあきつのみげを断ちそけて今か被
るらん五位のかゝぶり
かゝぶりの五位かぶらんとさりそけし其髻の

惜しくもあるか

古川のふりにしおぢは鬚断ちて若がへるとも

戀ふる人あらじ

さりそけし其もどゞりは真金堀る足尾の奥に

いつくどぞさく

かゝぶりをとりぬぐ見れば古川の爺ヲヂのいなだ

き鬚なしにあはれ

黒髪カミのたぶさを断つは惜しけれど五位のかゝ

ぶり否にあらなくに

三縣の民の訴をきゝすてゝ五位のかゝぶりを

はるは誰ぞ

二百四十

飛ぶ鳥の五位のかゝぶり擲ちて再び立てよう
づの髻

市兵衛のあだ人の髻きると井の上の髻の朝臣
はたはけすらしき

井の上の髻の朝臣の強言に強ひられ断つとき
くはまことか

あきつなす鬘きりそけていなだきの光りいよ
いよ輝くらしき

祝賀の部

祝『日本』四千號乃作歌並短歌

左 千 夫

天しるや、日の出づる國、高光る、日の大御國は、山
川も、しみさひ清く、大御寶、まめに雄々しと、玉ち
はふ、神の御代より、御國から、傳へて來にし、大和
魂、受けつきもちて、はしきやし、増荒夫のとも、朝
にけに、いそしむ業の、大御國の、其名負へる、日摺
の、このみつ文は、天地の、神もたすけて、うつそみ

二百四十一

の、人もいよれば、あら玉の、年は十まり、摺文は、四
千ひらみちぬ、こし方の、有の手振に、ゆく方を、思
ひはかれば、大日本、吾瑞國の、朝比古の、い昇るな
して、榮えゆく、豊のまに、く、八百萬、千萬までも、
かぎりあらめやも

反歌

國の名を文に負はせて摺出す増荒夫のともお
ほろかにすな
大御國の御名を負へる日摺のこのみつ文を萬
代までに

四千ひらを入千ひらまでに八千ひらを八百萬
まで摺りてしゆかむ

祝『日本』四千號歌

麓

いさくには、かならずきつき、日本の、名におふか
らに、まがれるを、まがれりとする、を、ごゝろの、日
刊の新聞、四千號を、今ぞかさねて、めでたしと、た
いへごと申す、紀念のこのうた。
日本と、名におふみの日刊新聞、四千號の、ち、さ
らにいく千ひら

日本四千號祝

日本の本の根の堅す國のますらをの筆にことあ
けてして四千に満ちぬ

茂 春

吳竹の直なる筆のすり文の千五百四千ひら盡
くる時知らに

同

健兒チカラヒト思をぬきて妖僞カマコシの大臣きためて言なくな
しき

同

八百穎の千穎の筆の墨絶えずつゞくを見れば
嬉しくもあるか

格 堂

すり文のその四千ひらをつぎなして空を覆は
ば空なかるべし

三 子

數にして四まはり千ひら年にして十まり二年

經たるふみはも

潮 音

すり卷の年のはしくに四千卷に至りしいさを

世に廣からむ

巴 子

八千穎の筆の矛ふり書き立て、四千ひらに満

ちぬ新聞スガフミヤマト『日本』

秋 水

東宮の御西巡を送り奉りて

格 堂

青山の神宮處いでまして國見めぐらすことのかしこさ

八千筋の煙たちたつ國原をめぐらすことを民
 は喜ぶ
 八東穂の新しね藁の注連はへてむかへまつら
 ん假宮處
 御民等は 大御車を迎へんと其道の邊にうなね
 つきぬく
 道々の奥つみとしの千垂穂も大御車を迎ふる
 如し
 御車のひだりみぎりに並み伏してぬかづく民
 の心直しも

赤駒の腹這ふ田るも御車のすぐるときけば玉
 しかましを
 君が代の秋の千秋の長秋のうまし國原煙たち
 たつ
 はろくに鄙の長路を國見せず大御心をかし
 こみ思へ
 千町田の稻も苅りあへず御民等は旗押したて
 て御車拜がむ

東宮御西遊

節

天つ日の日つきにませは日のみこは國原まね

くいめぐりたまふ
 とよ秋をきよみさやけみいまたみぬ國をみさ
 すといてたゝすかも
 たなつものみのらふ秋をよろしみといでます
 空に鶴なきわたる
 みあらかをまたきたゝして白雲のたなびく山
 のあなたゆかすも
 とこよべにありとふ神は和田の原沖の汐路に
 玉しくらむか
 白雲のむかふすかさり山々は紅葉かつらきむ

かひまつらふ
 山にゐる毛ものも海の鱈物も秋にしあれはみ
 けのまにく
 みとまりの宮居の上に紫の夕棚雲はたなびき
 わたる

雲の上のよろこびこときのふと
 のみおもひはへりしにはや御着
 帯の事きこえはへれは

節

むらさきの花をつくりていはひてし月の六か

はり秋ふけわたる
 神なから契らす秋の長秋をみこのきさいに玉
 こもります
 すめろきのみすゑさかゆく大みよに天なる神
 は玉くだします
 こもらせる玉をたふとみやすらかにあらせた
 まへといのりたてまつる
 をにませは日のすゑとほぎめにませは月のす
 ゑとほぐ玉にいますはや
 天なるや神のくたせるうつ玉をことほさま

つることのかしこさ
 かゝなへて五つのおよひ二をりの十かはり月
 日さきくといのる
 こもらせる玉をかしこと山川の清き河内に宮
 居せずかも
 かしこきや玉くたらせる國原にかゝよふ雲の
 八雲たちのほる
 國原に玉くたらせるしるしありてとよの長秋
 なかくやすらかに
 天にまし國にいませるもろくの神のまもら

す玉のたふとさ

二百五十二

春宮の妃御着帯の御事承りて祝

ひ詠める

左 千 夫

かけまくもあやにかしこし。たふとくあやにうれしもあかねさす。豊旗雲乃紫の。八百重のおくよ。天津風もる、神言。千五百の、春はあれども。八千五百の。秋はあれども。このとしを。足しみ年と。天にます。千萬神。地にます。八百萬神の。神まもり。もらすまに。高光る。天津日のみこ。神なから。みごもらします。いかし秋の。豊榮秋を。天の下。四

方の御民ら。家忘れ。身もたなしらに。かたまけて。ほきよろこへる。ことのたふとさ

反 歌

大き世にたくひなしといふいかし船つくれる
時をみ子みごもらす
みごもらすみ子ほぐらしも天津空緋の瑞雲の
八重たちなびく

雑 歌

○

三

子

この梨やいつくの梨、とほくし越の國の、加賀

二百五十三

の野に生りける梨、かぶつく眞日にはあてず、そ
ぎ竹のくみ籠に置きて、鐵路行く車に送る、そが
皮うすくしあれば、むら雨の露の多けく、そが尻
太くしあれば、ま玉なす實の多けくを、うまらに
きこしもちをせ、吾か大人。

吾身の上につき注意を興へられたる
某へのかへり事にかへて

秀 眞

教への親まじはる友のさちくくのみたまのふ
ゆに吾名は成らん

むらきもの心のまほらまぐはしにいはむすべ
さへせんすべを知らず

箱根の秋風百首の内 麓

萩しなひ芒穂に出で、秋風の箱根山道人に逢
はざりき

宿かれば嵐吹きいでぬ箱根山秋はいで湯をあ
む人もまれに

箱根路の谷間におふる秋草の名のなき花をわ
れはよろこぶ

山陰のあら野細道なびきあふ芒の風に雨こぼれきぬ

旅寝して寝さめがちなる秋の夜に山下風のいたも吹きわれぬ

頼朝が御状の石は苔むして芒のなかに年を経にけり

さま／＼の菩薩きざみし石立ちてちかや穂芒秋の雨ふる

譬うつと曾我はらからの祈りけむ箱根の宮居雀巢くへり

駒が岳に雲立ち迷ひ蘆の海の我乗る舟に小雨ふるなり

蘆の湯に十日こもりて木賀に行かず宮城野に行かず都しおもほゆ

二荒山に紅葉狩して

左 千 夫

紅葉狩二荒にゆくとあかどきの瀛車乗るところ人なりとよむ
もみち葉のいてりわかるき谷かけの岩間どよもし水おちたきつ

もみち葉の八重てる山の岩の秀のみさきのへ
より瀧ほとはしる
瀧つほの岩間たひろみ青淀にもみち葉ちりて
うつまき流る
青空にいかよふ山の中つへに緋の雲立てり千
重のもみち葉
しみ照る千重のもみちの山そはに二本立てり
ときは玉松
たゝなはる八千重岩垣神わさと紅葉の錦とは
りせるかも

のほりゆく向つ八重山紅葉山尾の上になひく
天津白雲

矛杉のしみ立つ奥の神垣につたのもみち葉は
いまつはれり
おしなへて紅葉しみてる八重山の谷間遠白く
水おちたきつ
もみちはのちりて浮へる湖の浅瀬に魚のむれ
遊ふみゆ

幸湖にてよめる

三

子

朝寒の幸の湖波たゝずこぎゆく舟の艦の音き

こゆ

敷島の歌の濱へを遠く見てこぎゆく舟の舳波
さやく

朝あけの新和ナガサキの濱をこぐ舟の舳波しく波しく
しくにうつ

幸の湖の四方をかくめる山々はもみちの錦け
せるが如し

二荒の幸の湖曲をかくみたる四十八岩四十八
沼

久方の天にそびゆる白根山いたゞきかけて雲

あこる見ゆ

幸の湖の上をはひゆく白雲の空にのぼりて行
方しらずも

湖の上にしたゞよふ雲の消えゆきてつりする舟
の明かに見ゆ

幸の湖を吾こぎくれば新和の濱びはるかに鴨
のたつ見ゆ

あさあけの水清らかに幸の湖の底ひの細石ササノイシか
すよみつべし

十一月三日二荒山の紅葉を見て

詠める

格

堂

國休^{ヤミ}今日の生^イ日を喜びて二荒秋山見にぞ吾來
し

二荒山秋は錦のくれなるに大峽小峽もみちせ
るかも

夕づく日うつる紅葉の下照りに瀧も巖もくれ
なるに見ゆ

さにづらふ少女等出で、迎へ立つ紅葉の下の
休らひ處

百人の紅葉かざして下り來る二荒山道淋しく

もあらず

黄金てる光の宮は見あかねど山の紅葉にしか
ずと思ひき

白雲の下り居る湖に漕ぎ出で、二荒群ねの紅
葉見るかも

上り立ち見れどもあかず青空を翔けりて見ま
く惜しき秋山

二荒山神のみけしと山姫は五百箇機たて、錦
織らすも

夕づく日すでにうつらふ二荒の紅葉見すて、

歸らく惜しも

二荒ねに照る紅の錦木を君に見せんと吾手折
り來し

二荒の五百つ群山の山紅葉吾見し後は散りぬ
ともよし

白雲の瀧を見てよめる

格 堂

大瀧の華嚴の底に行き通ふ其道の邊の白雲の
瀧

奥山の五百箇岩がくりかゝりたる瀧の白雲あ

らはれずありき

白雲の瀧つ岩根に綱かけて釣りわたしたる鵲
の橋

白雲のたな引くなして岩走る瀧の上空のかさ

さぎの橋

白雲の瀧を見まくと踏み行けばゆらゝに動く

鵲の橋

鵲の橋より仰ぐ白雲の瀧の上るの千尋常

岩

白雲の瀧眺めんとかさゝぎの橋もゆらゝに人

並み立てり

二荒山百尾八十尾に瀧あれどまぐはし瀧の白雲我は

橋にして瀧の下つ瀬見おろせば白木綿花に水流れ去る

かさゝぎの釣橋行けば白雲の瀧の狭霧に裳の裾濡れぬ

荒瀧の醜の華嚴は白雲の新妻まくといや戀ふらしも

群岩をうちこす瀧のとゞろきに鵲の橋常ゆる

ぎすも

庚子十月二荒山の紅葉を見る左

千の湖に舟を浮べて遊ぶ乃作れ

る歌 左 千 夫

二荒の。八百重の山の。天雲の。かゝよふ奥の。鏡なす。左千の水海。奇しくも。靈志きうみは。朝岸に。いてゝも見れど。夕岸に。立てもみれど。照る月の。あくを知らに。どうけの緒の。小舟を浮へ。か青なる。水面さゆらに。沖つへに。こきいてぬれは。常盤木の。しゝに生たる。瑞山の。黒髮山は。久方の。秋のみ

空の。青雲に。神さひ立てり。水海の。四方に並たち。
 とりよろふ。八重群山は。むらそめに。こそめに染
 めて。おのかし。錦つけたり。へさきに。立ては眺
 め。舟はたに。よりては見らく。いつしかも。里はか
 くりて。物のとも。きこえずなりぬ。舟人は。梶の手
 ゆるめ。みきのへの。いはほ群立ち。もみち葉の。し
 たてるわたり。まそか。み。きしか淵とふ。左りへ
 の。遠のみきはに。逆立てる。眞白おほ岩に。龍の神。
 しつまりますと。ねもころに。吾に語れり。夏草の。
 菖蒲か濱も。朝霧の。おほに見ゆらく。二荒の。山の

そかひの。裾原の。梢の上に。名くはし。湯の大瀧は。
 一むらの。白雲なせり。み藍なす。八千重蒼浪。渡り
 こえ。ゆきのきはみは。秋津神。立田の媛の。しきま
 す。宮居なれかも。赤岩と。名つけてあれと。空蟬の。
 世には似すけり。三つ面に。並たつ山は。玉を以て。
 飾れることし。あやた。む。千尺八千尺さか。削る
 なす。くしき大岩。中つへに。頂のへに。青瑞と。とき
 は。樛群。見かほしく。よろひて立てり。麓への。千町
 いまどふ。紅ひの。紅葉の錦。天津日に。伊照輝く。漕
 たむ。舟のゆらきに。青淵に。うつれる色は。唐錦。千

裂にさきて。五百玉を。千玉に碎く。世の中の。こと
も忘れて。故郷の家も思はず。かきろひの。一日の
けふを。百とせの。日月の如く。おもほへて。遊ひに
しかど。山媛の。神の宮居に。玉振らす。み聲もきか
す。照りとほる。御かけも見えず。うつそみの。人な
る吾は。常世へに。すむすへをなみ。梶ぬきて。小舟
をかへし。朝たちし。磯への里に。ゆふくれて。歸り
つきけり。奇しくも。あやしき湖か。玉きはる。命の
極み。秋ことに。いゆき遊はな。左千のみつ海。

○十一月天皇常陸の野に習軍を見

そなはし鳳輦親く風雨を冒し給
へると聞畏さの餘に乃作歌

左 千 夫

現神。和期大皇。皇^{スメ}御祖^{ロキ}の。御靈つがして。萬のこと
めし給ひ。御軍を。しらし給ふと。太しかす。都をお
きて。玉敷の。大城をたゝし。白真弓。常陸の野への。
内原の。荒野をふまし。しのすゝき。しぬにおしな
へ。疾き風に。雨ふり荒び。雨まじり。霞みたるを。大
御身に。冒し給ひて。千萬の。軍人等が。習はせる。わ
さのしるしを。親しけく。見そなはすかも。久方の。

天見る如く。たふとき。神にしいます。大皇にして

○岡ふもとか庭なるはしはみの黄

葉を見て詠める 左 千 夫

桑子なす實のむらなりになりたれしくはしは

しはみ葉はもみちせり

七葉八葉なほ残りたるはしはみの黄葉のさ枝

みれとあかぬかも

くみかへし苔つくはひの水のおもに色うつり

たるはしはみ黄葉

はしはみの實もいちしろくあらはれて黄はめ

る木の葉や、落ちつくす

色はや、あかねはみたる苔の上に三葉四葉ち

りぬはしはみ黄葉

片庭のはしはみもみち落散りて残り少なみは

や冬さひぬ

残れるは幾葉もあらぬはしばみの今一と霜に

堪めやあはれ

夕月のあかすごもしきはしはみの黄葉ちりそ

ねまたゆくまては

雑の部

露の兵佛の兵等が通州に於ける
兇惡を憤るの餘りに乃作れる歌

并短歌

左 千 夫

何者の。たは言なるか。今の世を。開けたりとふ。今
の世を。進みたりとふ。僞の。そら言なれや。「キリス
ト」の。耶蘇の教は。其教。たふとむ國の。綠目の。赤毛
の民か。なすわさを。つはらに見れば。神の道。人の
教を。こさかしく。口には云へと。また心。いたく汚

れて。獸なす。悪しき行ひ。憚らす。耻しらなくに。強
には。おちてへつらひ。弱をは。ひたにしひたけ。誠
ちふ。なさけは。あらず。いつくしむ。心は。もたす。綠
目の。赤毛の民は。人にして。人には。あらず。天地の。
間に。あしき。天地の。間に。憎き。人にして。人に。あら
ざる。綠目の。赤氏の族。「キリスト」の。耶蘇の教に。「フ
ランス」の。醜の國人。「ヲロシヤ」の。たふれ人等か。諸
越の。唐になしたる。ひかこととの。あしき行ひ。天に
ます。神も見たるか。大き世の。人も。知りけめ。父を
殺し。娘を辱しめ。背を殺し。妹をなふりて。あるか

きり。たからを奮ひ。いたましき。悲しきことの。わ
さつくし。かきりつくしぬ。おそろしき。毛物にま
さる。恐ろしき。悪しきふるまひ。見なからに。之を
止めす。聞きなから。之を憎ます。何者の。たはけか
云ひし。今の世を。開けたりとふ。今の世を。進みた
りとふ。神らしき。神もあらぬか。人らしき。人もあ
らぬか。今の世の中

反歌

世の中の汚れ人等を焼きつくし殺しつくさむ
天の火もかも

鼻梁崩

格

堂

常立の鼻の御柱動きなく君歸らずば斯國を如
何に

鼻柱ゆるがばゆるげゆるぐとも懲りて止むべ
き朝臣ならなくに

鼻柱立ちもあえねば玉敷の坊ミサトの土を踏む時知
らに

大君のみことかしかししかすがに鼻の醜根の
くづらく惜しも

千少女に心空なる藤原の朝臣の醜鼻崩るとも

よし

立て直す鼻のしだり根太柱脆くあれとは吾思
はなくに

腐ち行く醜の朝臣の鼻柱つけばゆらく打て
ばめらく

九重の門にな入りそ腐ちたる鼻の醜根に觸れ
し薬師等

大直日直日の神の幸ありて朝臣の醜鼻くづれ
ず止みき

くえかけし鼻の醜根をかためたる薬師のわざ

は神わざならし

詠啞郎女歌並反歌

秋

水

左丹づらふ愛しき少女子とをよる目細はし少
女玉光る姿にあるをわくらはに人とはあるを
いかなるや神のたはれか語らくと人に向へど
言はまくと口は開けれどまがなしく聲だに出
ぬば眞玉手を振りて眞似びていた思ふ心しめ
せど痛はしのはづれ少女子幸なき愍ぐし少女
と人皆は汝をさげすみ人皆は汝をそしればう
べしこそ廣き世の中汝のみはせばくや思ふ世

の中は。たぬしくもあれど。汝のみは。うしとや思ふ。父母は。汝を思ひて。一日だに。安くはあらじを。戀ふらくの。いとし背もなく。人の子の。妹背ともしみ。おほしく。なげかひくらし。頸傾ウチガズシ。しぬびなきつゝ。かくてしも。わかき身盛り。いたづらに。過ぐべきものか。あはれ汝が身は。

反歌

世の中をうしとやさしと手弱女の弱胸いためなきくらすかも

○おに妻

秀

真

いものしをまづしきものと緑兒の和久子を捨てゝいでし妻はや
鬼にかも似たるあが妻うまし子の乳飲兒すてゝいでし鬼妻
なく涙天にのぼりて吾が思ふいもが里びにひさめとをふれ
吾がおもふ心も知らずうたがひのつものれるものかおぞやしこ妻
玉櫛筒三年は夢か妻をなみ吾子に別れて秋暮れにけり

妹とよび背としよばれてみとせへし年の月日
のまうら悲しも
鬼妻と思へるものをあやしくも吾が戀やまず
しこの鬼妻
ますらをが血になく涙天にいたり地にふり來
てもみづる草木

わが子

同

さ夜床に母こふ乳兒をたむだきて長夜のくだ
ち共に泣きけり
われは父なが母はなし母こひてなくなまさひ

こ汝が母はなし

たらちねの母といねしこよる來ればわが手枕
にうまいすあはれ
牛の乳の乳壺のちゝの乏しらに飢ゑてなく子
をもる夜かなしも
まさきくてあれな正日子天か下のひとりうま
し子眞名子悲子
かたこどもいまだいひえぬ悲し子のなか身思
へば我は死ぬべし

祝賀の部

天長節の朝菊をよめる

左 千 夫

朝日かげにほへる園に咲きよろふ千むらの菊
は今日のほぎ花
大君のあれまし、日の今日の日をいやまさか
りと咲ける菊かも
たふとくも見ゆる菊かも大君の御代ほぐ花と
咲けらく思へば

ほぎ花の菊折りかざし天の下の大みたからや
今日遊ぶらし
く金なす菊の太花八百花のにほへる園はまば
ゆくありけり

天長節をことほぐ歌 茂 春

天つ瑞身にとりおはしあれまし、今日のよき
日は天地のむた
すべたまふ國の八十國秋されば菊の香満ちて
御民富みけり
御園生の園のかよひ路さしはさみ菊の花むら

妙に咲くかも
八十國の國內をきよめ吹く風に菊のにほひの
満ちたらふかも
老人もわかゆとふ水の菊の水君にさゝげん千
代も經むかに

奉祝歌

三子

皇神のしきます國は生國の足安國ととこ榮え
ます
八束穗のいかし穗垂の新稻のいや年々にさか
ゆる御代ぞ

高知る國の八十國しきます島の八十島御代は
ゆたく
天地の神の守れる皇御孫のみことの御代は萬
代までに
百敷の大宮人はうらやすの國の祝ひと菊かざ
し持つ

菊

巴子

天地日月と共に足りゆかむ君が御園に菊咲き
ほこる
賤われも君のみ像に常つ花菊のとよみ酒さゝ

げことほぐ
さ庭べの白木綿花の秋菊の満ち咲く上に小雨
ふり來ぬ

菊

芳

雨

すめらぎのとはにしろしめす敷島のやまとの
國は菊の咲く國
和田の原八重の汐路をこぐ蟹も今日はとま屋
に菊かざすらむ
しろしめすみかどをほぐと白菊を御像の前へ
今日たてまつる

菊

格

堂

秋されば菊の花咲く日の本の大八洲國廣らに
厚らに
大宮の菊のうたげに召されたる司等菊をかざ
してかへる
大宮の園生に咲ける菊の花折るをかしこみか
ざしがてぬかも

明治卅三年十一月三日の佳辰に

遇ひて詠める歌

常

規

かけまくもあやにかしこきわが大君今のみか

どの、あれましの其日を今日と、青山のならしのは、いくさ君いくさと、のへ、角の音をい吹きならせば、抜き放つ八千のつるぎは、稻妻の草に散ること、いさみ立つ駒の足搔は、久方の空をかけるか、千萬の國のものゝふ、かりがねの列もみだれず、假御座いつの御前に、かち人は銃さゝげ持ち、砲人はひづめ立てなめ、砲を引くつゝ人共に、かしこみていはひまをせば、天の下の青人草も、よろづ代と三たび呼ぶかも、から山の草木なびかひ、高麗の海のうろくづ來より、食國の國の

貢と、とこととはにつかへまつらん、君が代のいくさ見の式、見ればゆゝしも
大君は神にしませばからの山高麗の海びももろしきいませ

天長節を祝ひ奉る歌 秋 水

八百萬千萬神も神集ひ今日のよき日をことほきますらし

山津見は山雲拂ひ綿津見は開浪伏して今日をかしこむ

日の御蔭天の御蔭と高知らす吾大君は萬代に

ませ
 ませ
 齋庭邊にあらごもしきて二柱弊とりもたし祈
 りますらし
 度會の大宮路を弊とりて君が御使今たゝすら
 し
 齋庭邊に弊奉り御使は今日の祝^{ホサ}祠^ノきこえあぐ
 らし
 天つ社國の御神の八十宮に弊奉り今日をほぐ
 かも

天長節

哲

壽

百あまり一つの數の祝ひ砲砲のひゝきに空は
 れ渡る
 天さかるひなの荒ぬの一ツ家も日の旗たてゝ
 君が代いはふ
 とこしへに天のごと在せと君か代を祝ふ日か
 しこみ菊いけまつる
 大君のあれましゝ日と日の旗を立てし賤が家
 菊さきさかゆ
 神なから神といませる日のすゑの我大君はた
 ながにましませ

日の末の我大君は衣手のたなかに在せと祝ふ
けふかな
新はりの鄙の大野に家を繁みうらくはしくも
君か代祝ふ

募集旋 頭歌 雪

○ 左 千 夫

雪積めるみさきの松を出でし鶴むら 蒼海の
沖へはろく かけり行くかも

○ 節

あら山の雪にこやせる旅人あはれ 家のらば
い行きて妹に告げやらましを

○ 佐 章 人

地の限り水のきはみの北のはてはも 白雪の
五百重ふりしき解くる期知らに

○ 太 虚

かくばかり戀ひつゝあらずば雪とふらんかも
吾妹子が打ち振る袖にふれて消なましを

○ 烏 堂

雪菜賣る葺合の子は親のなけれか 親はあれ

どまづしきかもよ雪に菜を賣る

○

無得

初雪の降りつもりたる梅な折りそね 病む君
がガラス戸ごしに其枝見むかに

○

奇遇

おく山の雪に折れふす小竹ならなくに 下に
のみ思ひしなへていくよ經ぬべき

選者詠

大君のみことかしこみ雪の中の竹 百敷の大
宮人は歌よむらしも

すめろぎの日知の國は豎に長さかも ところ

はに雪ふらぬ島雲消えぬ山

新玉の年の緒白く大雪ふれり 八束穂の瑞穂

の垂穂田に満つらんか

木々の枝にこほれる雪を風吹き落す 伊達の

殿は鹿の皮着て獵に行くらん

常無きは干潟の岩にふる雪のごと 潮満つと

波の來よらば消えざらめやも

足なやみて室にこもれど寒き此朝 北にある

毛の國山に雪ふるらしも

ガラス戸の外白妙におし照れる雪 小夜ふけ
 て上野の森のあきらけく見ゆ
 若松の木末の雪も見れど飽かねど 柳なす山
 吹の枝に積めるおもしろ
 いましめの司等門の雪掃けといふ 雪掃けど
 女力の掃きがてぬかも
 霜枯の垣根に赤き木の實は何ぞ 雪ふらば雪
 の兎のまなこにはめな

明治三十四年

雑の部

年の始にしたしき人々より繪端

がきもてことほきおこせたる嘻

しさに作れる歌 左 千 夫

うるはしき。文の友垣。群肝の。おやし心に。あら玉
 の。年ことほくど。玉はかき。繪はかきたひぬ。おの
 かし。かける其繪は。うつそみの。萬の物ら。めつ
 らしき。物の極みを。久方の。天とふどり。荒金の。地

の毛の物。足引の。山の瑞山。和田津美の。よもきか
島。百千の。草木の花。大王の。萬歳ほくと。皇國の。さ
かえをほくと。はしきやし。吾友とちか。もゆるな
す。心にほはし。かける繪の。瑞繪を見れば。神代し
おもほゆ

反歌

あら玉の年の始に玉端書瑞繪はかきのくらく
うれしも
あらたまの年のほき繪の玉はかき家戸にまひ
ちる千ひら八千ひら

月島丸の遭難を哀む 左 千 夫

天地をまきてゆるかす大波に争ひかねて船沈
みけむ
ぬは玉のくらしき夜中の荒波のわたつ水底に船
沈みけむ
海つ國の大み寶の八十百の増荒夫の伴死にけ
るはや
船破れ沈む今はに故郷の親兄弟を忍び泣きに
けむ
をよひ折り船のつく日をけふくどまちにし

人の心しおもほゆ
世をこそりなけさかさかせとけふまでも一人生
きゝとも人のいはなくに
月島のなか名哀しもどこしへに月に向はゝ吾
を泣かしめむ

二月の二十三日杉田の梅林に遊

ぶ仍ち作れる歌 左 千 夫

浦邊なる郷のくまゝ。家居ともぬへともいは
ず千本かも八千もとかも。數しらぬ梅のむらだ
ち。うちなひく。春ときほひて。おのかしゝ。色に丹

保比天阿米津女か。ゑまひうつせか。佐保姫の。い
ふきかゝをる。ゆゝしくも。あやしき里や。岡の上
よ。たちてし見れは。いさりする。沖の百舟。波のむ
た。つらゝに浮けり。干潟には。あま少女らか。貝採
ると。手田子とりもち。朝鳥の。いむれもとほる。海
見れど。里備サトヒをみれど。夕月の。あかぬ心に。ことな
らば。千とせもかもと。おもひけるかも

反 歌

家にまつ妹しもなくはあまの子にたくひて吾
も貝採らましを

千五百の梅の中ほに膝いる、家だもあらば妹
と來ましを

○

格

堂

夕月の光さやかに押してれる御苑の梅を折る
人や誰

吾園の梅の蕾の眞白珠緒に貫く程になりにつ
るかも

月讀の光さやけみ園行けば眉をかすめて梅の
花散る

雪残る山の常陰の梅林ともしく咲きて霞立ち

にけり

こゝにしてそがひに見ゆるしづ谷の梅の林に
月傾きぬ

深山べの梅探らんと消えのこる雪の波多禮に
なつみぞ吾來し

奥山の道のはだれをなづみ來しまるしもある
か梅咲ける見ゆ

腸の九曲りの雪踏みて木曾の深山の梅を見し
かも

此梅は國の祭を祝はんとみろれに濡れて吾折

りし梅

龜井戸の社の梅の咲くらんを獨り見ながら告
げぬ君かも

梅の影うつらずなりぬ蓋しくもみ空の月を雲
や隠せる

妹が上に散り來る花は黄鳥の羽振の風に散り
し梅かも

春されば梅の花咲く吾里に都の人の來らくた
ぬしも

梅の花僅かに咲けば劣らじと園の青柳糸垂れ

にけり

梅の花咲きの盛りをほぎ遊ぶ國の祭は千代に
八千代に

梅の花咲きたる山を越え行きて南相模の海に
いでけり

吾妹子がかさしにせんと占め置きし梅の初花
手折られにけり

初春の梅の下風寒けれど秀枝かつく咲き初
むる見ゆ

○

左 千 夫

久方の天津少女が玉あやの袖ひるかへし梅の花折る

千玉ぬくあやの眞袖もゆらくに梅津姫神たもとほらすも

かきろひの夕波千鳥しは鳴きて梅なほ早し鎌倉の里

○

義郎

足曳の山の裾野の石畑瘦樹の梅の乏しらに咲く

櫻

義郎

三つ栗の中山川を帯にせる千原かな山櫻花さく

松山の古城にいつる道のしり久米の八つ尾は花さきみてり

古國の伊豫の二名にたゝなはるしみの平山花さきてれり

眞金つく伊豫の千原にさほ姫のみたま幸はひさく櫻花

八百あまり千原の道の嶮しきを越て吾きぬ花をこひつゝ

はしけやし小松をいて、中山の櫻樹村をなづ
さひこえぬ
行く水の湍の音さやけきさや橋の久米の曙花
吹雪すも
をちこちの落ち合ふ谷の中つ山千波の崖は花
にこもれり
さきてれる櫻樹山の薄雲の雲のほの上に寝^いを
しなさばや
かゝよへる花の秀枝ゆおぼろけに立たし、神
を追ひてしゆかな

浮寶み船の山の山姫かみすそのあやと花さま
にけり

同

秋

水

足曳の山下かけ路淋しらに松の木がくり櫻花
さく

同

麓

花かげにをとめらむれてあそべれとこふらく
妹に一人だも似ぬ

安房の鋸山に登りて詠める

格

堂

大汝少彦名の國建つと用ゐたまひしのこぎり
 の山
 鋸山幾代か經ぬる峰の齒の折れたる見れば年
 深かゝらし
 聞きし如まことかしこく怪しくも神さひたて
 るのこきりの山
 鋸の八峰の岩を踏み行けば天つ春風吾髪を吹
 く
 迦藝漏肥の燃ゆる尾の上に立つ我を麓の人は
 如何にか見らん

天宮にのぼらく近きいたゞきの雲うち拂ひ岩
 の上に立つ
 こゝにして待たば嬉しも夕されば月の宮居を
 見まく近けん
 のぼり來し麓の道は見えずして花の八重雲た
 なびきにけり
 櫻咲く谷べ靜かに鳥なきて吾立つ峯の上に日
 高し
 春の日の高根にのぼり櫻咲く四方の國原見ら
 くだぬしも

岩が根のこゝしき道を行きかねて痛足洲鳥の
嘆きぞ吾せし
壁たつる千尋の岩の底つべに石きる音の響き
てきこゆ
霞たつ春の海原滑かにこぎでし舟の白帆はる
かなり
上總より吾越え來れば櫻咲く安房の千浦に浪
の寄る見ゆ
世の中に又もあらめや言絶えてかくもこゝし
き岩立の山

吾踏めばゆらゝにうごく千引岩けたしく底に
神やこもれる
安房なる山の鋸手にとりて醜のオロシヤきり
てし已まん
かくばかり石きりつがば神わざの鋸の諸齒の
折れつくらんぞ
沖つ舟いたくな走せそ再たびも茲に吾見ん安
房にあらなくに
鋸の峯の諸齒をかしこみて春の霞も棚引かね
つ

神武天皇祭の日櫻花を詠める

左 千 夫

榎原の大宮まつるけふなれば八島國原花咲き
 にけり
 國原を花の八重雲たちなひく天の足日にまつ
 りおこなふ
 伊爾志邊のうね火の山の榎原の御垣の櫻おも
 ほゆるかも
 久方之天津美空に照理丹保布櫻之上に神立ち
 たまふ

國津祖まつる足日を山津美もいはひまつると
 花かざすらし
 白雲と天良邊留花の中つやに天の日ねもす神
 樂おこなふ
 夜の宮につかへまつるとはふりらが取るとも
 し火し花たうつろふ
 神殿の庭のかゞり火四方に咲く花の梢に照り
 のほらくも
 神殿のみあかり細そり花月夜いたく、だちぬ
 人のごもせす

祝賀の部

奉祝皇孫御降誕歌 左 千 夫

八隅知之。吾大王。高照る。日之大初御孫。天雲之。五百重かきわけ。神なから。安禮萬須奈戸二。天地も。よりてあれこそ。いかし夜の。瑞の足夜は。久堅乃。天の門ひらけ。大空は。曾伎邊のきはみ。青瑞と。さやに晴たり。國內の。八重群山は。梢吹く。風のともしせず。四方津海。千浦にきよす。荒波も。音はのどみけり。天津神之。神のことく。國津神之。神のきは

みと。神つどひ。祝ひまもらし。事やすく。むかへまつれば。天津水。仰きてまちし。天下の。蒼人草は。群肝の。心伊萬奴飛。手のおきど。足のおきども。柵志良二。まひ悦ひて。山川毛。草木もどよみ。萬世乎。古登保具見者。神隨爾有之。

皇孫御降誕御命名式行はせたまふ

日祝ぎたてまつる歌 麓

大八洲國の光のかゝやきに日嗣の御子の御子あもります

天照す神の御末の神の國日嗣の御子の御子は

男の御子

平らけく安らけくましてかしこくも祖父^{おぢ}天皇^{すめらみ}
につかへまさなむ
天地のむたとほながにましませと神にぞ祈る
みあれ七^{なな}夜^よに
すめらぎの御孫あれまし七の夜にあやめ酒し
て民はよろこぶ
この年は日嗣の御子の初御子のみあれをほぎ
てあやめふくなり
かけまくも天つ日嗣の高大座ゆるがぬ國は神

のまに

皇孫御降誕奉祝の歌 義郎

皇神が御靈のふゆにならせたる現人神の初大御孫

藤なみの花ふさ長さ春の日に皇大御孫天降らせたまふ

週報課題

紙鳶

無

得

大紙鳶に我うち乗りてあし鶴の天とぶむれに

入らんとぞおもふ

同

五頭山人

植込の木末にかゝる破れ紙鳶の赤繪をぬらし
春雨の降る

同(旋頭歌)

蕨 眞

いや高に上れる紙鳶の雲にかくれぬ、久方の天
津少女のみ舟ともしも

青山の原に男子兒等あまたうちむ
れて紙鳶など飛ばし遊べるを見て

作れる歌

左 千 夫

新年の。きのふもけふも。久方の。天隈おちす。晴れ
渡り。のとけくあれば。青山の廣野にいむる。百つ
たふ。八十のわらはへ。みつみつし。わらはへのと
も。ことごとくに。海兵が。ける形。の。さぬ身につけて。
おの。かし。其被帽に。皇國の。軍の艦の。いかし名
を。くかね文字して。あさやけき。朝日を。あみ。都風。
ふくを。嗜しみ。いかのぼり。揚ぐとし。さわぐ。八蜘蛛
手に。めぐりたはしり。いさましく。狂ひ遊ぶも。
はしきやし。この瑞兒らは。大八洲。海津御國の。こ
む時の。干城にかもよ。日の國の。み魂にかもよ。あ

はれ瑞兒ら。

瑞兒らかとはせるたこは内日刺御門の方に諸
なびくかも

課題 雪中竹

○ 榿 木

竹取の竹の翁は、竹山の竹の中より、うまし姫か
くやの姫を、拾ひ取りはぐ、みませば、やうく
に大になりゆく、其光家にい満ちて、美しさ云は
む方なし、きゝつたへ語りつたへて、妻にほると

うまし人らが、さばへなす言をこちたみ。高光る
月の都に、上り行き歸らずなれば。天に泣き地に
なげゝども、つばさなき身のせんなくて、竹山に
再び上り、御子獲むと思へどあらず、折ふしに雪
ふりしきる、手とも云はず、足とも云はず、こゝだ
くに雪ふりつもの、竹取の竹の翁は。五百重つむ
み雪が中に、うづみけるはや

○ 榿 木
むら竹の竹の御山に御子えむと竹取の翁
雪なづみすも

格 堂

刺竹の繁り垂り葉の諸垂りに雪降り積みて夜
ぞあけにける
燈火の光靜かに窓の外に八十群竹に雪積るら
し

○

元々野人

にはつとりかけの垂り尾のみだれ尾のゆたに
たれたる雪の中の竹

旋頭歌

無得

白妙の玉のあわ雪いやふりしきぬ、竹藪の雀の
ねぐらうづもれにけむ

○兼題 寺

大和國法隆寺を拜みて詠める

左 千 夫

空御津。大和のくには。大八洲。中つ御國と。樞原の。
ひしりの御代ゆ。あらたへの。藤原の里。青丹よし。
奈良の都と。御代々々に。太しかしけむ。大宮の。い
かし大殿。有つげる。あとにはあれど。千とせまり。
春秋へたる。後の世の。けふにし見れは。大方は。名
のみしなるを。いかるかの。玉の御門を。宮なから。
御佛迎へ。法の道。擴めましけむ。名くはし。これの

御寺は。其御代の。有のまにまに。靈しくも。八棟た
ちなみ。塔堂に。天雲なひく。ゆめとの。瑞の玉や
は。神さびて。いとも尊し。安めたる。千々の御佛。た
くはへし。五百個の寶。ことく。に。あかれるみ代
の。神業の。くしき手振を。今の世の。現に示す。こと
さへく。外つ國人も。天が下に。たくひをなみと。つ
とひきて。をろかむらしき。これ御の寺は。

○

泊村

百八十の國內敷き並め大君が寺建てさせし昔
思ほゆ

うつせみの人の子の爲め寺建て、御法布かせ
し聖徳太子

○

失名

播磨がた朝こぎくれば阿夫菟碕濱への寺の浪
間より見ゆ

兼題 冬の月

元々野人

月讀の手飼のうさぎ夜を寒み冬毛の長毛つけ
てこもるも
ふりさけて冬の月見れば百尺の桂の枝にみ雪
つもれり

左 千 夫

久方の月夜さやけみ諏訪の海の氷の上を人わたりゆく

兼題 母

母にすてられたる子に代りて詠歌

并短歌

秀 眞

立田彦立田姫、五百機の千はたをたて、山祇の神の命の、五百少女千少女つとへ、秋山のかのもこのものに、さゝらかた錦のとばり、織りはへ染めなす時に、久方の月の都の、月讀の桂姫はも。いく薬

死なぬ薬を、玉の白黄金の白と、すゑ並べてつかせる時に、兎女を一人足らずと、御使の月讀人の、天地をたどる時しも、吾父鑄もしが妻、吾母ほつまが妹を、まくはしと選られけるかも、月の宮桂の殿に、行くとだに父にも告げず、去るとだに吾に聞かせず、父が型焼く彌竈の、烟にのりて、生みの子吾をすて、和靈の父を置き、月讀の都はるはる、まるのぼりけり。
世に生れ吾は二とせ母の顔つふさに知らず月見てをなく

母こひて吾なく涙さ庭べの眞萩の花に玉と落ちにき

吾か父は吾を脊負ひてを鹿なすうら泣きしつゝ鑄物せりけり

兎にか母はなるちふ足引の山のうさきを母とし思はむ

母の忌日にあひて 義郎

利鎌もて刈る藍山はたらちねの母の命が常住處

藍刈の禿の山に雲たゝは母かみ行きの橋どか

も見む

たらちねの母の命がかくれいます刈あゐる山に雲下り来る

母 泊村

丈夫となりたる吾を飽きたらす緑兒さびて思ほすらしも

兼題初午

少女にかはりて詠める歌

左 千 夫

ささらきの。磯うら寒み。若草の。束のまおちす。よ
る波の。いやしくしくど。満汐の。いやすますと。
おもひのみ。こひのみまさる。おほしく。痛もす
べなみ。現しけく。吾はなきものを。浅草の。千束の
里。玉ちはふ。稻荷の宮。初午に。賑はふけふの。をち
かへる。人さはなれと。いきの緒に。おもへる君に。
ひとりたに。似てしもゆかす。玉梓の。使もこねば。
徒に。日にけにやせて。戀やわたらむ

反歌

玉ちはふ。稻荷の神に手向せむすべたに知らず

たわや女吾は

紅梅の瑞枝を五百枝手向せは。稻荷の神も蓋し
受けましを

課題 氷

氷

泊

村

常夜ゆき常晝てれる氷の國の天に切り立つ堅
氷群山
比叡風い吹きもとほり八衢のちまたの溝は薄
氷せり

秋 水

○ 瀧しふく岩かけつらゝ五百つらゝ水晶石をた
るゝが如し
いすくはし鯨とるらし氷の海とよみ轟き大砲
うつも

○ 巴 子

諏訪の海の氷の上をふみわたる馬の足の音高
くし聞ゆ
筑波根の麓めぐれる千町田の水も氷れか影も
うつらす

○ 義 郎

荒海の潮路氷りておほゝしく北の海原棚くも
りせり
千島の海冬しきぬれば堅岩なし海原氷り渡り
あへぬ鴨

○ 節

西ふくや風寒ければ網ほせる汀の葦に氷むす
びぬ
氷るる水のそこひの白珠の目にはつけともど
りがてぬかも

○ 茂 春

筑羽風さむくし吹けは蓮田の枯莖とちて氷結
びぬ

雪とけの朝の軒に玉鉦の逆ほこなして氷柱か
かれり

○ 旋頭歌

左 千 夫

とこしへに波も動かす凍る海原 天地の物の
ことごと死はてし國

いかつちとなりとゝろける瀧つ山河 冬され
はこほりとちつゝおちひそむかも

課題

汽車

秋 水

千早振る。神業ならず。現身の。人業にして。靈しく
も。奇すしきかもよ。天とぶや。鳥より早く。二筋の。
真金の路を。急しかける。釜たき車。八千人の。旅人
乗せて。百倉の。重荷を引き。山あれば。山を貫き。
川あれば。川押し渡り。一と。きに。千里を馳る。靈し
くも。奇すしきかもよ。汽車ちふものは

○ 左 千 夫

春山のこぬれの上におほしく煙たよひ汽車ゆきかへる

○

秀 眞

つかの間に妹かりゆかむ汽車はあれと猶ゆきがてに物思ふかも

○

泊 村

汽車の釜の八十釜列ね千引きすと丈夫心あに動かめや

○

大 作

立烟片那比支師氏打渡松原隠汽車波師流見由

課題 神

詠吹屋神歌并短歌

秀 眞

百傳ふいもじが家の眞金ふくたらの上のかん棚にひもろぎたてて。中の間に金山彦。右の間に金山姫。左に。伊斯呼理止女と。三柱の神をぎまつり。吹屋戸の神とたへて。眞榊に。木綿とりしで。朝な朝な。のりとまをして。日にけに。幸あらしめと。こひのむ。しるしもあらず。まづしさは。いよ。暮りぬ。ますらをと。思へる吾も。型つくる。眞

土をくらひて。世の中に。いかゞありへん。靈幸は
ふ。神とたゞへて。何しかも。幸なき神そ。吹屋の神
等

短歌

白妙の木綿とりしでし眞榊は神のみ前にかれ
にけるかも
吹屋もる神のみ前に引きはへししりくめなわ
にすゝたれにけり

神

泊

村

歌の神渡らす道ししるくあらば玉鬘掛けてわ

が待たましを

神

無

得

國每丹神毛古曾阿禮天照皇大神者我國廻神

課題 春淺し

早稻田乃里を愛て詠める歌

左

千夫

八隅知之。吾大君。天地。日月と共に。神なから。高知
らさむと。大御門。はじめたまへる。鳥かなく。東の
國に。さやけき。河もあれとも。見はるかす。野もさ

はなれど。大御門よ。背面のぬべの。うるはしき。早
稻田の里は。白雪の。富士の高峯は。日經の。遠き雲
井に。見かほしく。神さび立てり。そかひなる。目志
呂の岡は。空しぬく。冬木常盤木。八千群と。繁々に
おひたり。うちわたす。郷のくま。宮人之。家居
の御庭。眞茅布久。賤か軒にも。よろしなべ。梅咲丹
保比。中ほの。水涸田のもは。春淺み。榛もめはらす。
河柳も。いまだもえねと。八十百の。女の童らかな
つ菜つみ。根芹をつむと。白妙の。袖ふりはへて。群
々に。伊曾婆比をるよ。大君の。知す御國の。春はも。

いつくはあれと。まくはし。早稻田の里は。見れと
わかぬかも。

春淺し

大

作

不玖璽裳知根芹津無子賀袖乃上爾雪降來母與
春淺美加茂

課題 酒

酒

茂

春

おほしき心なくやと酒のめと飲むますます
に涙し流る

節

いはひ瓮にうま酒みて、うめきとふ野べのつ
かさは松木たれたり

左 千 夫

うつくしき花のみ面に紅の色さしにほひゑへ
る君かも

秋 水

八雲たつ出雲の宮ゆかへらせる家内の神にみ
酒たてまつる

課題 春風

春風

可 雅 之

大木きり立てしとふさにどりしてし白木綿な
なひく春の山風

「アイヌ」らか「アイヌ」の歌をうたひつつ網引する
らし濱の春風

○

元々 野人

少女らがふさにたれたる垂髪の千垂をゆりて
春の風吹く

○ 秋 水

鹿群のく、たち遊ぶ春日野の五百津杉原に春の風吹く

課題 灸 蕨 眞

櫻花ふゝめる妹を何すとかかぐつちの神もぐさやくらむ

課題 豆の花 蕨 眞

さほひめの纏さけむ玉のまが玉の五百つらゆるぐそらまめの花

課題

鯉 興 安 嶺

不忍やかつゝ泳ぐ鯉見えて水のぬるみに春

かたまけぬ

吾妹子の心の戀のいろくづの鯉にしあらば釣るすべあらむを

○ 無 得

あからひく鯉鯉右ゆき衣手の眞鯉左ゆき玉麩あらしそふ

元々野人

裂かゆとも鯉はうごかず敷島のやまとの國の
益良雄の如し

左千夫

千鯉すむ春の御池にあさよひにいでますらし
もうぶすなの神

無得

白蓮の花の臺に住まゝくことはに唱ふる南無
阿彌陀佛

課題

滑稽

節

萱刈りて畑なひらきを麻田比古が額の片へに
麥蒔かば足り
君によりなごむ心はにひ藁に包む海鼠のしか
とくること

同

義郎

香たくとうま人さびす尻にきて我ひりうつる
屁をかぎてをれ

狂語

義

郎

千早振神のみくらの。佛座に猫おかし來。犬自物
犬糞まれば。あれ怒り追ひやらふれば。天馳る鳥
にこそあれ。生垣の籬のうれを。はたつ物およが
ひゆくを。しかさせじとつひに手とりて。焼太刀
をむねにさしいれ。すたすたに切りほゝらかし。
猿の子が熊の膽とりぬ。明日のあたてに。

課題 牡丹

林檎食而の句を偲びて牡丹をよめる歌
義郎

妻琴の根岸の里に。常伏に病ひこやせる。歌日子
の教の親が。枕づく床のめぐりに。眉引の横山の
ごと。紅さす林檎積み上げ。もえのほるほのほの
如。さにつらふ牡丹をかざり。立ちかへる年の緒
ごと。に。厄月の今年五月を安らけく渡りおはせ
と。我いのるしるしもあらば。天つ神は天馳り來
まし。國つ神は國かけりきまし。ひるはもひの目
を守り。夜はも夜の目守らせ。病ひ遠退かむ
玉の緒をぬきかふべくは我命を君ととりかへ
ぬかましものを

課題 帶

伊磐飛於備之歌

左 千 夫

以努の日の。その夜をよしど。玉地はふ。子安乃神
之。美須雅多乎。真床にかけて。もろもろの。花折り
たむけ。赤いひを。筥にもりさゝげ。安ら計久。毛良
勢たまへと。沖津奈美。千重にこひのみ。くがね花。
にほへるきぬを。玉の緒の。帯に長縫ひ。み守りの。
御ふだゆひつけ。はしけやし。妹におはせて。伊磐
比計留加毛。

帶

無

得

腰細のすかる少女が廣帯のむすびしつまを人
にしらゆな

○

雄

濱

白雨爾奴禮耳之帶乎天都女廼今加干良志虹可
可流見由

課題 池

上總山武の山里なる鬼蛇が池をしぬ

ひて詠める

左 千 夫

池水のかしこき見れば鬼蛇相争ひし伊丹志邊
おもほゆ

いにしへにありけむ時に千早振蛇の神が住め
る池かも
常盤木の千木の繁枝しさしおほふ池の深底に
蛇かもすむ
池の蛇怒りたければ七國の山川どよみなるふ
るふかも
池水を千重にうづまき逆まきてわらふる蛇如
何にか有劔
天地の別ちも知らにある、夜を池の蛇は底い
でにけむ

千早振蛇の神の住む池の淵の深さを知る人も
なし
大御代は鬼蛇が池もすなどりに鳥狩に人の群
れゆく所
あからひく朝日さしぬれこもりくの鬼蛇が池
に鴨遊ぶみゆ
岸のへの千木の常盤木瑞枝さし池の八十隈鴨
澤にをり

○ 課題 覆盆子

義 郎

八隅知之。我大君の。伴の男のますらをの兒が、思
ひのべ見なきし山に、梓弓春しすぐれば、五月雨
のいや日にふるに、ほとゝぎす天雲がくり、朝よ
ひにきなきとよもす、谷べには羊齒の若葉の、さ
みどりにしげりてあるを。雨の間に我打見つゝ、
草枕旅の心を、なぐさめむたときもがもと。獨の
みあゆみし來れば、立ちしげるおどろがさ枝に、
まつはりてぬれくゞてれる、草のみの覆盆子の
珠の、いちじろくめにつきまどふ、けたしくもな
くなる山の、さ夜鳥の涙のおちて、こゝにしも玉

とてるらし。見れば悲しも。

羊齒の葉の緑の山のくなだりのばらにまつは
るいちご赤玉
ほとゝぎすながなく涙地におち山のいちごの
玉とてるらし

苺

雄

濱

病人爾登李氏得末之止尋禰來志苺者阿良奈久
時早美鴨

○

笠

雨

草深美丹玉都々良宇真苺乎取氏志由加舞病人

酒爲

課題 金魚

詠錦魚歌并短歌

左 千 夫

瓢形乃。火明玉の。宇頭多麻爾。美知多らはせる。眞
清水の。中津みそらを。くれなるの。八つ尾の玉裳。
瑞旗乃。あや尾ゆらゝに。おのかしゝ。伊牟連毛登
保留。高ゆくや。雲井をわたる。天人の。舞ふらむこ
とく。常春に。見れともあかす。鯉魚の遊びは。

反歌

宇津曾美乃世はそこはるとうづ玉の瑞のたま

やに住める鯉魚かも

課題 夢

三月六日風の心地と打ふしけるい

めに金銅盧舍那佛の大像をいるさ

めて 秀 眞

五十韮天之羽吹の、踏みとゝろかすふきのとよ
みに、天地日月もゆらに、なるなす震ふ山へゆ、あ
らかねの土の樋くたる、さえくしゆはしりは
も、空ゆくやてる日の色の、まかかやくたきち湯
の瀧、い型のゆぐちに落ち、鑄からくりいつぐ八

きたのふたきたの山なす型の中つへの中子の
上に、神さびていたたすわれは、劔太刀身は汗あ
えて、ゆいり見らくも。

反歌

さえわたるゆ瀧鑄かたのあつけさにあせにぬ
れつゝ夢さめにけり

課題 橋

詠神橋歌

左 千 夫

八隅知之。わが大王之。きこしをす。天が下には。山
河毛。左波にあれとも。並立の。よろしき山。青瑞の。

二荒の山に。八十百の瀧おちたきち。青淀は。美藍
をたゝえ。岩千浪。雪を激らし。雷の。とはにとゝろ
く。荒川の。大谷の河。其河の。下津瀬にして。岩とこ
の清き早瀬に。真俱盤之。丹塗のみ橋。神橋の。高照
る橋は。夏されば。暑をさくと。秋されば。紅葉を見
ると。しきかよひ。まねくゆくこと。めづらしみ。見
るますますに。尊きろかも

我里の橋を見てよめる歌一首

蕨 真

はゝそはの母の里がり。行く路にかゝれる橋は

も。乳のみつゝ渡りけむ橋。さしなみの友とし二人。鮒つると行き來せし橋。大君のはしきみ楯と。選る人にえり殘されて。夕歸りわたりし橋。苗秀でゆたけき今日は。蜻蛉ねふれり。

橋

節

大王のとほのみ門と。しきます越の罔内に。山はしもさはにあれとも。名ぐはしその立山を。いめぐらふかたかひ河は。征箭なす水のはやけは。架けわたす橋もあらねは。郷人のいよりつとひて。かにかくに計らひけるに。その中の人の言へら

く。山祇の神の命に。こひのみねき申して。うつそみの人の命を。そこにしも沈めてあらは。とこしへに橋はあらむと。苟且に言ひけることを。その人の命沈めと。神よさしよさせりければ。悔ゆれどもせむすへ知らに。ひとり子とめでし少女を。手ひかひてなげき告ぐらく。命をし永く欲りせば。徒にもものな言ひそと。秩の實の父の命の。いましめと告げゝることを山吹のほへる妹か。吾背子と相見しのちも。繭ごもり息つきわたり。背をだにも呼ふことなけは。妹名根をかひなきも

の。と。ふるさとに背子が。おくりて。立山の山の麓
の。橋のへに到りし時に。獵人の筒とり持ちて。分
け入りし山の雉子の。柴中に鳴きける聞きて。年
久に言はざる妹が。言はまくの黙もありせば。水
底に父ありけめや。孀戀に汝が鳴かずは。さつ人
に知られけめやと。打なけき叫ひ言ひける。科坂
在古思の少女の。古にありけることを。いひつが
ひかたりつがひて。うつそみの今のをつゝに。聞
けは悲しも。
ちゝのみの父を悲しみも。だもありし越の少女

の古思ほゆ

課題 灯

此二日許吾庵の庭先なる蓮田に灯
のみゆるをあやしみて詠める歌

左 千 夫

左美太連の。いやふる雨の。長雨の。いまだやまぬ
に。此夜頃。吾家の庭の。武加斐田の。はちすの田井
に。何しかも。灯はともすらむ。人も居ると。見れど
も居らず。よひくゝの雨の夜すから。蓮田に。消え
ぬ其火を。老人に。問へとも知らず。吾妹子に。とへ

とも知らず。家の子に。問へとも知らず。魂まつる。
市にひさくと。蓮葉を。人の盗むに。蓮田の。田主の
まろが。夜をまもる。かゝしのために。ともす良武
加毛

反歌

ぬば玉の雨の夜すがら蓮田もるかゝしのもと
し風になづそふ

灯

いにし年都なる醫師が家に妹の病
をみとりて在りし夕の灯を思ひて

よめる

蕨

眞

世の中に二人をなみと。吾もへる愛しき若子の
新妻のうるはし妹が。しこ神の病の神に。何しか
もさやらえにけむ。おほしく病ひこやれば。せ
むすべの手著もとむと。内日さす都に率行き。く
すはしき醫師が家の。香ぐはしきそのたかどの
に。白栲の衾ひきはへ。いねしめし春の夕を。とき
きぬの思ひみだれて。ますらをと思へる吾も。ぬ
え鳥のうらなげ居れば。誰人のともすとしらに。
高殿のもなかに懸る。梓形のま金のうれゆ。咲く

花どもえし灯。かぎろひの夕さりごと。まのあ
たりいまも見るごと。おもほゆるかも
病みこやる妹がみおもにつゝ花にほへる灯
てりしよべはも

灯

節

ころも手の日立のうみ。夏麻引うなかみ瀉ど。こ
ちこちの波の來よらふ。犬吠の埼の上に。天しぬ
き立てる臺に。常夜にてれるともし灯。雲くも入夜の
風の吹く夜は。往きなれてかよひし船も。これな
しにえ行かぬ念へは。あやにたふとき。

高野山燈籠堂を見てよめる歌

雄

濱

安見知之。わが大君の。きこしめす。やまとしまね
に。山はしも。さはにあれとも。あさもよし。紀路の
み空に。天曾々理。そはたつ峯の。八つ峯の。高野の
山はも。その山の。山のおくかの。予杉の。しきたて
る蔭。阿良我禰迺。つちの下にて。み佛の。とはにい
ますと。もろ人の。きよりつとひて。おのが屋に。麻
我都美さかり。おのが身に。左千あらしめと。とめ
るは。ももちの燈。まづしきは。一つの燈。おのもお

のも。かゝげまつりて。こひのみ。ねぎますこと。
止支辭九爾。たえせずあれば。灯はも。いよ、數そ
ひ。光はも。いやてりまさり。風ふけど。風にもけな
く。雨ふれど。雨にも計受氏。以仁之閉由。千とせの
今に。ごもしつぎ。つたへし見れば。尊さる鴨。
保等氣萬須高野の山の燈火は千とせをふとも
消えせずあるらし。

課題 浮巢

うきす

節

五月雨のいやしきふれば。うらさびてさぶしき

沼の水配りの水の門のへより。榜ささかり蘆原
ゆけば。邊にしづき沖になつさふ。にほとりの水
艸昨ひ持ち。搔きあつめむすふうき栖の。風吹け
ば風にゆられ。波立てば波にゆられて。しまらく
も安からなくに。そこにして卵子は生りぬ。あは
れその栖を。
水に住むものにあるから鴉どりの水艸か中に
その栖つくらく

課題 別荘

左 千 夫

綿花之。白波さわぎ。眞砂照る。きよき浦邊に。美津垣の。かくみたびろみ。繁みさぶる。千樹のときは木。白雲に。秀枝まじはり。立ちよろふ。老の群松。中空に。木垂る瑞枝は。蒼き龍の。天路かゝける。阿米人の。なひかふ袖か。巧み繪の。婆古耶の山の。神宮の殿居見るなす。玉きざむ。いらかそりたち。朝比古に。伊天理丹保良比。ゆふなみに。美かげたゞよふ。靈しくも。くしくもあるか。天が下に。ひとりの臣。吾國の。伊盤津柱止。須米良美古跡。吾大王の。まけたまへる。臣乃命之。なりどころこれ。

おほまへつ君古々二いませは御國今事はあら
すと美たみら宇多布

別莊

義

郎

八隅知之我大君乃。玉かざるすめらみさとに。水無月の夏しきぬれば。いや日けにあつけくまさり。たまたたれの簾うごかし。吹く風をいやともしみと。さねさし相模の國の。みづ傳ふ磯邊のさとを。ふきわたる風を時自美。すみよしとつくれる家に。さす竹の大宮人は。立ちかへる年の緒ごどに。はしけやし女子をあとももひ。旅寝すらくも。

にひ月のかまくらさして都ゆもおほみやびと
は旅だちゆくも
ほし月夜かまくら山にことさぶるめさへあと
もひ宮人ゆくも
あつささくなりどの風をときじみとゆかくみ
やびと夏のたびねに

水戸齊昭卿の別業なりける東京
小石川なる後樂園拜觀の事をよ

める

蕨

眞

久方の。天都神世ゆ。天地の。共につたへて。かけま

くも。綾に畏き。天皇の。御代尊みと。ひたぶるに。い
そしみにけむ。征矢なす。徳川の臣。齊昭の。ますら
武夫が。焼太刀の。と心なづみ。眞憐しき。小石川な
る。鄙さかる。館の内に。いゆし。の。心をいたみ。い
かつちの。いきとほりけむ。古の其跡どころ。青山
の。千引の巖。常盤木の。千木いや繁み。八隅知之。吾
大君の。明らけき。今の現に。神さびて。残りしあれ
ば。そを見よと。仰せのまにま。行き見らむ。我はら
からの。千萬の。うまし人らの。村肝の。心の内や。い
かにかありけむ。

大洗の岬なる水戸侯の別荘を見

てよめる歌 節

ころも手の日立の園は。おほうみにたゝに向へ
ば。みか欲しきいつこはあれど大汝少彦名の。い
しつまる神の三埜は。磯みれど沖へを見れど。な
らびなきはしき岬と。玉蔓たゆることなく。あと
もひて人もつぎ來れ。こゝにしもいほりし居良
ば。命も長くあらむと。大王の暇たまへば。族をこ
ゝに聚つどひて。立居て見れとよろしみ。ころ臥して
見れど宜しみ。日も足らずそこに念はし年のご

とありける公が。行水の行きて去にきと。狂言か
人の云へるに。をど年も去年もことしも。潮ざる
の有磯の上に。い立たせることもあらねば。玉松
のしげきが下に。素のごと家はあれとも。さぶし
きろかも
畏きや神のみ埜にうつせ貝むなしき家を見れ
ばさふしも

別荘 下總國 眞 足

八束穂のいかしたり穂の。瑞稻の五百田の中ゆ。
並敷る吾家の里は。言なまる鄙にはあれど。焼太

刀の利根の大川。しき通ふ千船うかべて。海の如
みなきり落れ。をつくばの青菅山は。村山の山の
大君と。雲居にぞ神さび立てる。そこをしも裏ぐ
はしみか。百敷の都の人の。夏されば暑をさくど。
松木たる岡べの別荘に。うからやから移り住ひ
て。かきろひの夕さりことに。利根川の清き河瀬
に。漁りするかも。

課題 富士詣

「日本」青年會之諸士大舉登嶽を企
つ即歌以て之を送る 左 千 夫

日月の。渡ろふきはみ。天が下に。國ちふくに。よろ
つの。國はあれども。比武加之の。海にそりたち。あ
やによし。瑞秀の國。大日本。吾須米久爾乃。民草の。
さはなる中に。國御魂。宇計津義毛知天。人のなか
の。人ぞ吾はと。思ひあかる。萬須良夫のとも。心あ
へる。どち相よびて。眞夏の。熱きさかりに。内火さ
す。美耶古いでたち。萬世に。雪の消ぬちふ。神山の。
富士の高峯を。いかつちと。ふみとゝろかし。登る
らむ。雄々し其わさ。登毛志きろかも。

反歌

雄心しいやたかくに神山の富士の荒山ふみ
さくみこね

天の原富士の高峯の頂きに立てらくこゝろ時
じくにあれ

課題箱

八月八日ふと博物館にゆき、十八

ヶ月の間海底にありて少しだも

そこねざりきと云へる、蒔繪の書

棚料紙箱などを見ぬ。感嘆の餘り

に即詠める歌 左 千 夫

日之神のめぐしまな子と。ひむがしに。しみ照る
國は。民草の。こゝろまさどく。萬の物らさきはふ。
瑞國と。名にしおひたれ。しかすがに。よろづの中
に。いやたかに。ひでたる業は。塗物の。宇留志たく
みぞ。青雲の。おほへる極み。人の住む。國のかきり
に。たくひなき。靈しきわさか。吾大王、御代の六と
せに。「オースタリヤ」「ウイナ」にして。世の中の。
物のかぎりを。いやひろに。集めみすらく。大業。お
こなひけるを。我國の。奇しきたくみを。外つ國に。
示すは今と。寶あまた。もちてゆきけり。いにしへ

の。み代の工みの。ぬり物の。蒔繪の書棚。硯箱。料紙箱らを。くかね髪。とつくに人も。類なき。たふときもの。と。真心に。ともしみけるを。事果て。歸ろふ船に。まかつみの。禍起り。伊豆の海の。入間の沖に。船寶共に沈みき。數さはの。くにのみ寶。失なはむ。事いとをしみ。十まり。八月の後に。官人等。ことはかりして。千尋の。渡津底より。からくも。百がひとつを。あびく繩。ひきてあげしか。今の世に。作れる物は。ことくく。くち果てたるに。これぞこの。蒔繪の書棚。硯箱。料紙の箱と。針ばかり。形そこねす。

うるはしき。色もかはらず。靈しくも。奇しき工みと。今更に。人もおどろき。すめくにの。技のほまれと。外國の人にもほこり。今の世の人を。いましめ。後の世の。かたりにせんと。公けの。館にすゑて。天が下の。人に示すか。あやに尊き。

箱

義

郎

天の原。ふりさけ見れば。まそ鏡。さよくはれたり。枕づき。苦しき妹も。今日のみは。すぎよくありと。しろたへの。とこさりおきて。手玉なす。はこはぎ遊ぶ。秋霧の。たちうきいもが。こゝろやらひ。わら

はさぶらく。こちたかるかも。

顔の色のかわをき妹は夏麻引うなかぶしまけ

箱はき遊ぶ。

こいふせる病のひまに吾妹子が絹さきはきし

箱し見がほし。

課題 鳳仙花

上つ總なる蕨眞が家居を訪ふて

詠める歌

左 千 夫

荒玉の年の緒長く。多麻豆左の。布美とりかはし。
ぬもころに。言問ひしつゝ。有こせる。うるはし友

を。したしけく。おとなはまくと。夏の日の。熱きさ
かりに。八街の。荒野をなづみ。はろく。に。吾こひ
くれば。睦岡の。埴谷の郷は。ならくぬき。しき生ふ
岡の。松杉の。そりたつ奥の。土肥えて。物らさきは
ふ。うら安き。里にしありけり。友垣が。住める家居
は。塗株木。か黒き門と。道のべの。眞木さくをの子。
小指さし。をしふるからに。菅小笠。手に脱ぎもち
て。門ぬちに。吾入りたては。庭のべに。草村作り。若
若の。つまくれなゐの。花さはに。しろき紫き。ゑみ
咲て。あやにめづらし。家人も。むかへよろこび。眞

心に。吾をしなぐさむ。汗しほる。熱さも忘れ。なづ
みこし。いたづきさへも。なこみけるかも。

課題 商

あきなひ

蕨

眞

秋祭。にぎはふ郷の。御森木の。もみづるもとに。負
籠すえ。物うる。軀。さむしろに。こゝだつらぬる。し
が背門の。柿の朱成。釜たきの。諸の和けき。初山の
新茸八籠。片もひの。うまし栗の實。とよとしの。神
樂見かてり。買ひ賜べと。兒らに賞すも。白髪。の。六
十とせ。軀。ほゝゑまひ。商ひさわぐ。今日のたる日

を。

課題 瓢

炭とりふくべ

左 千 夫

山べは。この葉色つき。田のものには。雁かね渡り。朝
霜の。寒くしなれば。茶を好む。翁か庵は。冬かまへ。
爐にかはりつゝ。うらさふる。炭とりふくべ。山な
す。炭をみたしめ。桑の柄の。まかねの火ばし。鷹の
尾の。羽掃木とりそへ。膝のべを。さかりもおかす。
夜に日に。釜し激ろふ。いほをしづけみ。
おのづからなれるふくべの炭とりの形がよろ

しも翁さびつゝ

課題 酒

酒

秋

水

魂ち這ふ。神の眞名子と。神よさし。依さしのまに
ま。益荒雄の。繪人の吾は。恐しこみて。つかへまつ
ろへ。いそしみて。つかへまつろへ。若草の。吾愛し
妻よ。住むいほは。くたれかたふき。ゆりのこと。粥
すゝろふとも。いやつとめ。進み先だち。神々の。み
たまのふゆに。世の中に。各名はなりて。よろづよ
に。さのこりゆかむ。天つ職。嚴たくみびと。何しか

も。もの思ひせむや。若草の。吾愛し妻よ。いざ飲め
この酒。

酒

蕨

眞

とほつ人。雁の羽がひに。露霜の。寒けき頃は。かな
と田の。新穂をもちて。豊み酒を。こゝだかみなし。
烏羽玉の。夕さりごとに。大王の。み民うれしも。天
が下。とばに樂しと。ゑらゝに。酔ひ喜びし。鄙さ
かる。郷び翁が。赤ねさす。み面のにほひ。この頃に
吾見る毎に。さ藍なす。香青くあれば。何しかも。か
くやととへば。枯び聲。いらへけらくは。やしほり

の。た。つ。く。り。酒。の。味。酒。を。さ。の。ま。ぬ。ゆ。ゑ。と。し。な。え
つ。ゝ。う。ら。か。な。し。み。て。吾。に。告。ら。す。翁。が。貌。を。見。れ
ば。さ。ふ。し。も。

大王のみ法かしこみ市にかふ酒はのめれど酔
のあしけく

課題 沙魚釣

十月六日歌の友垣芝の浦に沙魚釣の
遊しける歌一首并短歌

巖 眞

とよ花の。菊さくなべに。浮寶繁にこぎよる。みさ

と邊の。芝の廣浦に。かりいほの。苦舟あそび。はし
きやし。友のみ饗に。鳥じもの。山郷いで。八隅知
之。吾大君の。離宮の。外面のほとり。やくもたつ。御
森ゆちりく。落葉なす。浮き廻みみつゝ。み酒くま
ひ。釣たれをれば。秋雨は。しくく。ふりき。竹環形。
さゝ波たちぬ。そこをしも。時のよろしみ。柔魚の。
玉はせつりつ。足檜木の。木がくり人の。嬉しみと。
わが笑み設けし。人みけむかも。
瑞垣の離宮の邊になぎよらふ秋雨波に沙魚つ
りあそぶ

課題 波

明治參拾四年十月十三日安房國

野島崎なる荒磯波を見る即作歌

左 千 夫

島津國。海はめぐれど。岩山も。さはにあれども。し
なが鳥。安房の國邊の。ありそみの。玉よる磯を。つ
ばらかに。吾は見にけり。白濱の。野島之崎は。南の。
國のつまりと。いや遠に。いでし岬ぞ。其崎に。あら
し時じく。その崎に。岩秀群立つ。むら岩の。くしき
かたちは。土蜘蛛の。はひか出たる。わか熊の。立ち

かをどれる。あしき毛物。猛き獸の。千五百數乃。八
千五百數の。諸向きに。いかむひ立て。指す敵に。走
りかゝると。見るまでに。群がる岩秀。天地之。関
し時ゆ。其岩と。敵にかもある。大海の。ありその波
は。百萬の。しろき蛟。千萬の。蒼き蛟。こみづち。大き
蛟と。數をつくし。群をいつくし。吠えさほひ。たけ
び狂ひて。風のむた。ちぶく息吹は。久方の。天に飛
びちり。あらかねの。大地もゆるく。いかし岩。こゝ
しき磯も。時のまに。打かくゆると。鳴神の。とゝろ
くはしに。玉山か。碎けとばしる。白雪は。どはに激

つも言絶て。きゝの畏き。見る人は。魂も消ゆべし。
神世より。しかありけらし。うつせみの。世果つる
までも。かちまけの。極み定めず。岩波は。相争ふか。
あたりへに。松もあれども。木の皆は。諸枝地に伏
し。平滑に。葉ぬれなびけり。八隅知之。吾大君の。大
御言。かしこみもちて。國つかさ。まけの臣らが。渡
津味之。沖の諸舟。まどひなみ。いゆくしるしと。作
らへる。燈宇天奈乃。そゝり立つ。野島の崎は。ゆゑ
しきろかも。

課題 蚯蚓

蚯蚓鳴く

節

あらがねの土の下にて。己が世の住みかもとむ
と。たまさかに凝りてむすべは。さ百合ばなそこ
に開くと。古ゆ今に言ひつき。世の中に怪しきも
のと。尻のへもかしらも分かず。はひもとほり生
ける蚯蚓の。竹簍たかを手にくる糸の。ほそくわに鳴
くなる宵の。績苧なす長き夜すらは。いねがてに
常する吾もやすいするかも

課題 鑛毒

鑛毒地被害民の慘狀を詠する歌

一首並反歌

節

下つ毛の足尾の山は。まがつみのうしはく山か。
 その山に金堀るなへに。かなけ水谷に漲り。をち
 こちの落合ふ川の。大舟の渡瀬川に。時分かず流
 れ注けば。その川の霑す極み。荒金の土浸みとほ
 り。八ツ子持つ芋も子持たず。蠶飼ふ桑も芽くま
 ず。水田には蘆生ひしげり。くが田には萱し靡け
 ば。安らけく住みにし民も。過ぎへなむたときを
 知らに。父母は阿子に離れて。壯丁はも妹に別れ
 て。うき雲のさ迷ひ行けば。たまり水止まるもの

も。ありへにし家にも居かねて。煙だに下に咽べ
 は。世の中にまさしき人の。同胞の嘆くを見れば。
 いかで吾仇にはあらめやと。益良雄の鋭心起し。
 家忘れ身もたな知らず。國統ふる司の門に。つば
 らかに聞えあぐれと。大君の任のまにまに。きく
 といふ司人やも。正耳はしひにけらしも。もゝ足
 らす八十九ひ申せど。かへり見ることもあらね
 ば。飯に飢て恨み泣けとも。すべもあらぬかも。

反歌

いかならむ年の日にかも毛の國の民の嘆きの

止む時あらむ。

課題 鯉漬

ひしこ漬

節

足妣木の山を近みど。木隠りに家居しせれば。世の
ことしけ疎くあれど。雁がねの刈田さわたり。
秋風の寒けき頃の。照る月の明き夜頃は。鰯引く
浦にぎはふど。辟竹の籃にみてなめ。こゝまでに
ひしこも來れ。鶉啼く畑のしげふの。したり穂の
栗とり交へ。八鹽折の酢につけまくと。京さびこ
ゝに吾せる。珍しみとぞ。

秋風の寒く吹くなへ竹籃にひしこ持ちて來と
ほき濱びゆ

課題 髪

○

不 言 舎

久方の天の下に。國はしもさはにあれとも。人は
しもこゝたすめれど。敷島のやまどの國の。國人
の髪の色は。をしなべて黒くこそあれ。わきてを
みなの子らの。黒髪は匂ひて長し。緑眼の異國人
は。しきなへて赤くこそあれ。それをしもよしと
おもひて。黄金色と人にほこれと。あかきをはと

もしどもはす。黒きをはめてたしどもふ。黒鬢
われは。

反歌

異國のあか毛はあれどぬば玉の吾黒髪のごも
しきろかも

十月の末母の命によりて成田山
にまうて毛綱を見て作れる歌并

短歌

節

母刀自の依しの子にまどりじもの朝立ち出て
下埴生の成田の寺に。夕さりにい行き到れば。

人あまたそこには満ちて。靈しくも八棟立ちな
み。珍らしき物さはなれど。玉の輪と捲ける太綱
は。いた惱む吾背かためど。眞悲しきめつ兒かた
めど。をみな兒の思ひしなえて。丈長のその玄髪
を。利鎌もて萱刈る如く。ふさたちて供へまつれ
ば。千五百房八千五百房と。山のごとつもれる髪
を。堅よりによりて結ひて。この岡の岡の上るに。
棟引くと掛けし毛綱を。下埴生にいます佛は。上
つ代ゆ今のをつゝに。たふとみと人の來寄れは。
この綱のいや長々に。太綱のためることなく。後

の世もしかぞあるべき。み佛の寺

四百四

短歌

をみな子のその丈長の黒髪を断ちて結びし太
綱そこれ。

○

義

郎

天地のひとり處女と。息の緒に。わかもふ妹を。千
磐破。禍つみかみも。うるはしと。ねたしともへか。
夏くたち。秋立つ頃を。いたづきに。こもり苦しめ。
萩のはな。二人見まくを。かた居りて。雁さへ來鳴
く。夕風の。寒けき庭に。力なく。おり立ちあゆむ。わ

きもこが。香ぐろき髪は。まくしもて。かゝば根放
れ。さきてれる。花の秀枝を。とびめぐる。胡蝶の如
く。とりつがね。あげても見むを。みなわた。かぐ
ろき髪の。玉櫛の。櫛にまつはり。おつらく惜志裳。

○

左

千

夫

くにまつり。休む足日を。うれしみと。朝とくおき
て。九つに。七つになるか。おのがし。櫛笥とりで
し。花ぐはし。眞玉のかざし。朱の緒の。飾り手にも
ち。おぐし結ひ。遊びにゆかな。おぐしを。はや結ひ
たへと。しが母に。せかみこはくを。うなる兒の。末

四百五

なるちごもいどせめて。人なみほしみ。束もなき。
あかみ搔きなで。諸共に。さわぐを見れば。世の中
に。幼兒ばかり。かなしきはなし。

課題 冬の夜

冬の夜

蕨

眞

さにづらふ。諸の太藪。門畑ゆ。こきたく堀じて。小
竹垣の。わぎへの庭に。横山と。積みてし夜べを。か
みな月。しぐれ寒けば。こもたゝみ。むらしぐ庵の。
古び爐に。火たきあたゝみ。うがらどち。いよりま
とに居。おも父の。ゑませすなべに。都よは。きそか

へりこし。ますらをや。近衛もの。のふ。中の子の。新
ものかたり。久方の。都のはなし。物よろづ。足らひ
めづらし。あしびきの。故山里に。薪火を。たきのま
さかり。足千志ら。うら樂しけく。爐面せに。焼きつ
る。諸の。甘藪を。子らと食しつる。冬の夜べかも。
いくさ事みとせつゝ。まずかへりこしあが子と
かたる冬の夜半かも

○

節

いろしばの林がうれに。風のいたくし吹けは。ま
けいほの。盧のめぐりは。黍の稗し。にゆへども。

すべもなく寒くしあるをぬば玉の夜さりくれ
ば。焚木たに折りては焚かず。ごもし灯を中に圍
くみて。新藁を繩に縋ひつぎ。白糸を觸さわに手くる
と。暇もなくいそしむ人の。ふけ行けば簀子が上
に。うす衾引きかゝふりて。さぬらくの安しとか
もよ。憂けくは知らに。

課題 山

登筑波山詠歌并短歌 節

天地の開けし時に。瓊矛もて國探らせる。二柱神
の命の。いたゝしゝ筑波の山は。しみさぶるまく

はし山と。常に見る山にはあれど。秋の日のよけ
くを聞けば。巖か根の路をなつみて。落葉吹く峯
の上^に立てば。そかひには山もめぐれど。眞日向
ふ南の方は。品川の入江の沖も。陽炎のほのに見
えつゝ。をしぬ刈る裾曲の田居ゆ。いや遠に開け
けるかも。男の神のときて干させる。白紐と河は
流れど。女の神のとりなてたまふ。み鏡と湖は湛
へぬ。うべしこそ筑波の山は。時なくと人は來れ
とも。秋の日のけふの吉日に。豈如かめやも。

短歌

秋の日し見まくよけむと筑波嶺の岩本小菅引
き攀ちて來ぬ

雑の部 (課題外)

○某侯に北征を促すの歌

格

堂

蝦夷人は黄糞この饗あを横山に置き足らはして朝
臣待つらんぞ
横山に置き足らはせる陸奥の黄糞の饗をきこ
し食さずや

大御鼻まそけくあらば香ぐはしき奥陸の黄糞
を否といふべしや
ひろふみの朝臣迎へむと蝦夷人は賤の緒手卷
繰りかへしいふ
うすゝまる大餓鬼小餓鬼尻押せど朝臣は動か
ず石にかもあらむ
すゑまつの醜の太馬の駙馬は黄糞に懲りて行
くといはなくに
陸奥の荒山少女朝臣と寝て其子産まむと朝夕
にまつ

落繁る賤の家庭に黄金敷き朝臣待ち居るを知
らすかあらむ
南無以藤戀大菩薩い向はゞ時むく陸奥の春催
さむ
風流男みろびをに朝臣はあらずや戀草の千車引きて陸
奥に入らさね

明治三十五年

雑の部

初日を拜みて詠める歌一章并短

歌

左 千 夫

天津神。阿米乎まもらし。國津神。久爾乎まもらし。
天地を。清み静けみ。安岐津神。吾大王乃。加武なが
ら。きこしたまひて。日乃本の。名に負ふ國に。荒玉
の。年の初日を。千萬の。國に先立ち。むかへまつる。
けさの朝けの。尊伎呂加茂

反歌

天地は雲風いさめ大王の年の初日をむかへま
つろふ

新年のうたげの歌一首

蕨 眞

高光る日の皇子。しきます大やまと國。うら安き
國のまほらに。もゝくさの花の始に。白梅のまづ
ふゝみなす。新年の睦月の生日。大野べの下草な
せる。歌人のうたげにはあれど。鶯の春の光に。競
ふべくくくまる心。あさへかねつも

課題 犬 (以下週報)

蕨 眞

ものまなびをさなき時に。ゆく道のくまみに吠
ゆる。くすり師がかひつる犬を。鬼とかもかしこ
みもへば。くゝたちの麥畑かくり。そら豆の畑に

氣ひそみ。行く吾をいかにしりけむ。ぬつ鳥とと
びたちほえし。黒ぶちのそのしこ犬を。年へぬる
今日わが見れば。まげいほのやもめがかたへ。裳
がくれにおいさらほへり。冬の日かげに。
たらちねの親にころばへ。學舎にわが行く道に
ほえし犬かも

課題 氷柱

厨の氷柱をよめる歌 蕨 眞

新筰に洗ひ清けき。芋玉ゆしづくましみづ。松葉
菜の玉ちる水。吾妹子が厨の端の。ながし板なが

れあへなく。前庭のえびのかつらに。なりし實の
青照りしごと。矢さし浦の背黒さ。鱈網の目よさ
がれるがごと。玉つららつら、結ばゆ。今望の霜
氣に。

課題 茶

吾家の樂

左 千 夫

春鳥の。さ、なく庭の。朝清め。木の間もおちす。筑
波井に。玉水かへて。むろぬちの。真床の壁に。白椿。
かける繪をかけ。釜の湯の。たぎらふ時に。兒らも
こよ。母もさませと。うからとち。まどひたのしく。

朝茶はやすも

課題 節分

節分の心をよめる 左 千 夫

冬限る。終りの今宵。春限る。始めのこよひ。雪霜の。
國旅果て、。おりきます。月日の神を。背の神と。ひ
たまちこひし。佐保姫の。待ちのよそひは。天の光。
なべてをわつめ。地の花の。なべてを集め。海山の。
なべての玉を。五百重てる。霞の彩と。衣手に。さふ
りなびかし。蒼雲の。天の曾具邊に。戀神を。迎へま
つろひ。明日の國。春のわきへに。誘ひくらしも。

課題 青

春浅き田邊にてよめる

蕨

眞

よちこらと。うゑてかりけむ。刈田水の。むら雲さ
えに。くはしひれ。玉叢小魚。絲ゆふと。水輪ゆりう
く。青雲の、包まひ映ゆる。春日あさてり。

課題 春の川

鬼怒川の歌

節

こもり江の蒲のさ穂なす。散り亂りひた降りし
ける。雪自物天の眞綿を。荒山の狭沼うしはく。御

衣織女鬼怒沼比賣か。五百篋をかけの手繰りに。
巖か根にい引きまつはし。玉の緒にいより垂ら
して。どいろ踏む機足と。とろに。織り出つる二十
尋布を。春の野の大野の極み。きぬ河の礫か上に。
岸廣にはへたる見れば。あやに奇しも。

課題 檐

睡猫を見てよめる歌 節

すしたるやわきへの檐の。丸垂木日さしか上に。
さ蕨の背くゝまりつゝ。いをしなすはしき二つ
毛。春の夜の心うかれに。夜もすから背を覓きか

ねて。思ひぬにさぬとふものか。あはれく。汝が
人にあらば。味酒の丹頬に笑まひ。藍染の衣きよ
そひ。ほとほとに戸は叩かむを。夜もすから背を
覓きかねて。こゝにしもさぬとふものか。二毛猫
汝はも。

課題 蛤

詠 蛤歌

節

うまし子をうみ那須山の。羅蒸すやゆつ岩村に。
あり立たす石人男。波の穂ににひつま覓くと。
告るなへに潮沫別きて。うむき比賣きさかひ比

賣さならひ立ちみ合ひし時の。弟媛の心ねちけ
に。堅繩の目細網に。兄媛をし二十卷き沈け。埴染
の衣にほはし。獨のみ山踏む時に。その山の底ひ
揺らびて。天遙に火立ち騰らひ。巖根本根ひた焼
きしかば。うまし彦石人男。弟媛と共にみ失せぬ。
うむき比賣和田の水底に。背を念ふ心は止まず。
凝り鹽の辛くのがれて。沾衣あぶりもあへず。焼
山にた走り到り。ひた土にこひ伏しまろび。訴へ
泣き叫ひ悲しみ。弟媛か焦がへし灰に。裳の裾の
垂鹽注ぎ。搔き抱き塗らひにければ。えをとこと

よみ歸らせる。吾背子と手たつさはりて。そこを
しも住み憂の山と。八つ峯越えそかひの山の。鹽しほ
谷やにしすみかま探り。蛤うしぎはも堅石なして。堅石は
うむぎの如も。化り化りていや長に。こもりいま
すはや鹽原之山中蛤の化石を
産す故に結末之に及ぶ

課題

帆

蕨

眞

東の、海に走りづ。犬吠の、秀崎の端に。そゝりたつ、
燈うてなの。灯かけ波、春夜しづけみ。安いすと、あ
まのを船の。こぶし花、月にてりなす。ま帆かた帆。

はららに來よる。この夕かも。

課題

菅公一千年祭

蕨

眞

靈幸ふ神のみ代より。神だちのとはにめぐしむ。
美しみ持たしまへる。善きものゝさはにあれど
も。雄々しきは美劔のごと。あかきはみ鏡のごと。
にきびなすま玉のごとく。むらぎもの。眞心もた
し。遠つ神すめらみことに。ひたぶるにつかへま
しけむ。太宰の府に。しづまらす神の尊の。よこ雲
のよこせしはれて。百千年へにける今日も。天地

日月のむたに。神御靈くしびいませり。み祭をつ
かふる伴ら。國內どよもす。

課題 薊

薊

蕨

眞

小山田におり行く坂の。裾隈に積肥つくり。伏屋
なす藁ふきおきし。冬こもり春もふけつゝ。雨さ
れに朽ちし日なたべ。あきつ兒のとびかふほと
り。はぐさもえあざみのびでつ。紫の花ふゝみけ
り。駒ひきて肥はこぶとふ。田業男がいまかくづ
さむ。在りつゝ見ましを。

○

あざみ花さけらく時と田業男が小田こやすべ
く春ふけにけり。

課題 垂釣雑咏

八年前故郷なる米崎の浦にめばる
釣りしことを思ひ出でゝつくる

格 堂

釣といへば思ひぞいづる八とせ前めばる釣せ
し米崎の浦
米崎にめばる釣らんと兒島瀉みだれて出づる

蟹のつり船

めばる釣吾する今日は米崎の若葉山陰波もあ
がらす。

外海ゆ内海にそゝぐ潮合に鱈の族のあつまる
此浦

めばる來る時になりぬと浦人は八百竿並めて
磯に立ち釣る

鱈つる沖はかしこし米崎の常和の浦に吾めば
る釣る

米崎ゆ片か崎かけて鴨鳥の列なり浮ける蟹の

つり船

黒船の沖はせ過ぐる浪騒サイに底のひれ物餌食み
しかねつ

めばる子は餌食みし初めつ釣絲の八尋なゝめ
に竿響きする

めばるつる海原光り大島や小豆島山霞たなび
く

課題 渡舟

下ふさ利根川のほどりなる今村の
引渡しといふをわたりてよめる

節

さき岸にい杭を立て。こち岸にい杭を打ち。い杭に繩とりかけ。繋げる舟の。おもしろのあな舟はや。繩引けばこゝにより來。繩引けばそこによりらくと。吾引きわたる伊麻村の穿江。

課題 茂り

新茂りの時をよめる歌一首并短歌

蕨 眞

久方の天の原より。うひちにの神の尊は。くしび玉みづの緑を。まな井水きよらに釋かし。春雨の

けふりのむたに。そら見津やまこの國ゆ。新染にそめ知りませば。あやみどり色の五百色。天雲の居伏すなして。いやしみに茂る初夏。にこ葉幸くま桑緑ぞ。うましあや綾玉おらむと。うけもちの神のまにまに。はしきやし桑子が料と。大みたからあをひとぐさら。よろしなべ飼ひなめもたし。緑叢千村ゆたけく。白ひかり黄光玉の。家内しみ玉雲なびく。あなにみづしも新みどり茂みおふ時とみたからの家ぬちに映ゆる繭の玉雲

木兎もて鳥とることよめる歌

節

垂乳根の母が桑つみ。兒飼ひすとつくれるかごの。さき竹のしゝにさし交ふ。五百枝槻もとへをくらく。繁らへる森のはたてに。鳥網はり木兎据ゑ待てば。木ぬれ行く鳥のむれ。さひづるや鷓鴣のむれと。目叩く木兎あなづらひ。おのが尾をさやるを知らに。おのが羽をさやるを知らに。枝うつりいより亂らへ。とよもせるかも。

小鳥の雛の未だ巢立ちたもせじと

おほしきか道の片邊に落居たるを
見て詠める
左 千 夫

汝はや。ほう白の子。自か柔羽。身に生ひ足らす。乏しらに。つはさもあるを。何にしかかも。茲にありある。巢ゆ落て。茲にか出てし。里近み。兒等も來遊び。醜犬も。もどほる道そ。汝か父の。なげくも知るく。汝か母の。なげくも知らゆ。おもちゝの。守る巢はいづら。竹むらの。繁みが中か。常盤木の。しげみがか。中か。若葉し。み。木深き森の。奥も見えなくに。

反歌

巢ゆ落し兒鳥あはれみゐてゆかむ置きてゆかむにさまどふ吾は

課題 自像に題す

梁戸といふところの土をとりて自ら吾型をつくる

節

いくみ竹やなどの阪の埴とりてつくれる型。目しりはいぬしたの木。垂れたるや吾目らかも。口もとは騰波の湖の真菰なすまばらの髭。その髭はやなき。

自像に題す

左 千 夫

肉ふとの。おもものまに。く。黒髪の。黒きまにまに。寫したる。吾はあらめと。現身の人なる吾は。一とせも。つね有得すと。面かはり。年老ゆくを。思はくさぶしも。

課題 鳥居

成東なる八幡宮の鳥居に就き

古老の物語を聞て詠める歌

左 千 夫

刺并之。矢挿か浦の。遠津波。なるどの岡に。椎かし

は。五百枝交り。松杉の。い森神さび。千早振。八幡の
 宮は。荒武き。畏き神そ。いにしへの。事にはあれと。
 御前なる。真杉之鳥居。杉なれば。朽もこそせめ。石
 ならば。ごはにあらんと。さかしらの醜つ郷人。お
 ほろかに。思へるまにま。大石之。圓石鳥居。そをよ
 しと。立てし其夜に。なるもせず。嵐もなくに。十尺
 石。八多義に打折れ。たふれたる。事のあやしき。荒
 み神。怒りましぬと。石鳥居。悪ます神と。郷人等。お
 びえ畏み。真杉之。瑞の鳥居し。今にそびゆれ。

浪逆の浦より息栖を過ぎてよめる歌

并短歌

節

ひたちなる浪逆の浦は。荒海なす浪のさわけば。
 薦槌の往き交ふ舟の。舟人のまもりのためと。う
 なじりの小門にまつれる。八尺鳥息栖の宮は。み
 なそこゆ八尋の柱。太知れる鳥居が下を。忍穂井
 の水と喚ばひて。さす潮のさして引けども。ひく
 潮の引きてさせとも。わく水の淡くたへて。石
 上ふるのむかしゆ。ありさりし甕のへみれば。女
 の瓶はふかくこもらひ。男の瓶はおほにしあれ
 は。つばらかに見むと思ひて。搔き鳴すやこをろ

こをろに。筭どりに探りみるへく。かしこきろか
も。

短歌

小鹽井の鹽井の水にあり立てる息栖のとり居
みるかたふとさ。

課題 茄子

かねてより土かへおきたる十坪ばかりの
ところへ瓜茄子などをつくりて

節

瓜つくり茄子つくりすと。瓜の葉は蟲はむ故。竈

なる灰とりかけ。茄子の葉は日にしぼむ故。櫓か
枝を折りて翳せば。くゝ立ちに茄子はさかえ。下
ばひに瓜はひろざる。ひろざるや藁床の上に。枕
なす瓜もよけども。いとほやもなれる茄子の。尻
太に照れるを見るが。めづらしきかも。

課題 夜店

山寺の縁日をよめる 蕨 眞

露草をふみつきの夜の。いざよひの赤き月夜を。
古寺のゆかりの今日と。まる來つる人らも去に
つゝ。風すさび月そかたよる。庭隈に立てる櫻の。

しだりえの葉蔭よろしみ。植木棚つらねしほとり。知らぬ國山の奇し花。高棚にむらくのこり。朝貌のあすまぢふゝむ。低棚にいはひ延びつゝ。賞し賣るをぢも疲れて。夜はあけむとす。

課題 旱

旱

竹の里人

天なるや旱雲湧き。あらかねの土裂け木枯る。青人草鼓打ち打ち。空ながめ虹もが立つと。待つ久に雨こそ降らめ。しかれども待てるひじりは。世にし出ぬかも。

旱して木はしをるれ。待つ久に雨こそ降れ。我が思ふあふき聖。世に出でゝわをし救はず。雨は降れども。

課題 賀舉子

人の子をあげたるをよろこびてよめる歌

節

鍬持つ手土につくまで。転るや畠の殖蒜。殖蒜のうらべにむすぶ。その玉の似てをあれし子。平らけく安くありこせ。父母のため

友なる人の始めて女子まふけるを

祝ひて

左 千 夫

玉氣はる。命にこひて。萬代に。共にあらむと。たま
 たすき。かけて誓はし。おもふこと。思ふまに。く。
 願ふこと。ねがふまに。く。諸人の。ごもしむまで
 に。眞玉なす。女の子もえつと。世の中の。よろしき
 ことは。君が家に。つどひけらしも。吾はもや。何に
 いははむ。荒金の。土もさくちふ。暑き日の。照る日
 凌ぬぎて。くがね花。とはにさかゆる。夏菊の。此の
 さき花を。さゝげ祝はむ。
 くがねとも玉とも照らく夏菊にたぐへことほ

ぐ君が子のため。

賀舉子

義

郎

春山に花咲きてりし。もろくの八十足る木々
 の。枝たわに實のなる時し。めぐき子のをの子君
 得つ。木のしげり常にしみゝに。人折らば新芽ふ
 き立て。木の花のつぎて咲きてり。枝に葉にひこ
 ばえまでの。幸足れるしるしもつ子と。初湯には
 日の出でくる。東の楠の向井の。ましみづを立て
 浴みしめ。うからやからよろこびとよもす。わ
 れもまじりて。末長くうみつゝくべくうみし男

のその子がためとわれものりつ。

課題 火取蟲

瓜畑の火取蟲をよめる

蕨 眞

山やくる、空に舞ひとぶ。鳶が野(吾郷の)の。松原墾りて。赤腹の。圓瓜作る。瓜なるや。ぬすむ醜男を。常守ると。立てし伏屋に。夕されば。あかす燈。こを消つと。くるや夏虫。醜磨の。小僕さびて。しがいのち。失すらく知らに。群來より。いそばひ居るも。黒腹に。玉羽つけて。いさわぎをるも。

燈は、はたとけたれぬ、醜磨ら、太玉瓜を今かかきとる。

黒腹に、玉羽着よそひ、ごもしけつ、夏蟲奴死にてけるはや。

幼き男の兒失ひける年の魂祭に墓

詣してよめる 左 千 夫

百かびの。一日もおちず。眞悲み。こひもふ吾兒が。おくつきの。御前のごもし。魂まつる。今霄のごもし。何にしかも。火を取る蟲ぞ。何にせんに。火を消す蟲ぞ。思ひかね。み魂をまつと。吾ごもす火を。

課題 草花

合歡木に似たる草花ありねぶり草
といふ植木屋の持ち來れるを見て
幼き弟らその葉に手を觸るれば忽
ち蹙みうごくことさわく

蕨 眞

ねぶの木のみ末のまなご。ねぶりぐさあはれ。少
女さび。おすひなす葉に。手觸るれば。愁ひし。み。
風ふけば。うすぎぬとなびく。しがみづら。さける
み花は。久方の。天の河べよ。たなばたの。賜ひし玉

かも。み聲わらぬはや。

雑の部 (週報外)

四月の末には京に上らむと思ひ設
けしことのかなはずなりたれば心
もたへてよめる歌 節

青傘を八つさし開く棕櫚の木の花さく春にな
りにたらすや
たらの芽のほとろに春のたけ行けはいまさら
く
にみやこし思ほゆ

荒小田をかへての枝に赤芽吹き春たけぬれと
 一人こもり居
 みやこへをこひて思へば白樫の落葉掃きつゝ
 ありかたなくに
 おもふこと更にも成らす枇杷の樹の落葉の春
 に逢はくさひしも
 春畑の桑に霜ふりさ芽立ちのまたきは立たす
 ためらふ吾は
 草枕旅にも行かず木犀の芽立つ春日は空しけ
 まくも

にこ毛立つさし穂の麥の招くかね心に思へと
 行きかてぬかも
 おもふこと楯のさ枝の垂花のかゆれかくゆれ
 心は止ます

詠接骨木

左 千 夫

紐鏡かけのよろしくたつの木のくはし若芽は
 相向き合へり
 少女らがゑまひのまゆの兩ひらくたづの柔葉
 の見えのよろしさ
 童らがいまち悦ぶ木耳のむせるたづの木花く

き立ちぬ

四百四十八

朝月の四つ目垣根の裏戸邊にほのくさけり
山たづの花

山多頭の名をなつかしみ新芽立ち花持つ枝を
折りてしぬばく

葛飾の小梅にありしたづの木の花枝折こし君
に見せむため

荒妙の藁屋か背戸の井戸ばたに生ふるたづの
木花さやにさく

足曳の山多頭の本の春の葉の向ひたぐひてあ

らむ世もかも

竹の里人選歌終

四百四十九

明治三十七年五月二十四日印刷
明治三十七年五月二十八日發行

竹の里人選歌集付

改正 稅共六十六錢

郵稅 錢

編輯兼發行者

千葉縣山武郡睦岡村埴谷四百四拾九番地

蕨 眞 一 郎

發行所

東京市本所區茅場町三丁目十八番地

根 岸 短 歌 會

印刷所

東京市京橋區日吉町四番地

民 友 社

印刷者

東京市京橋區日吉町四番地

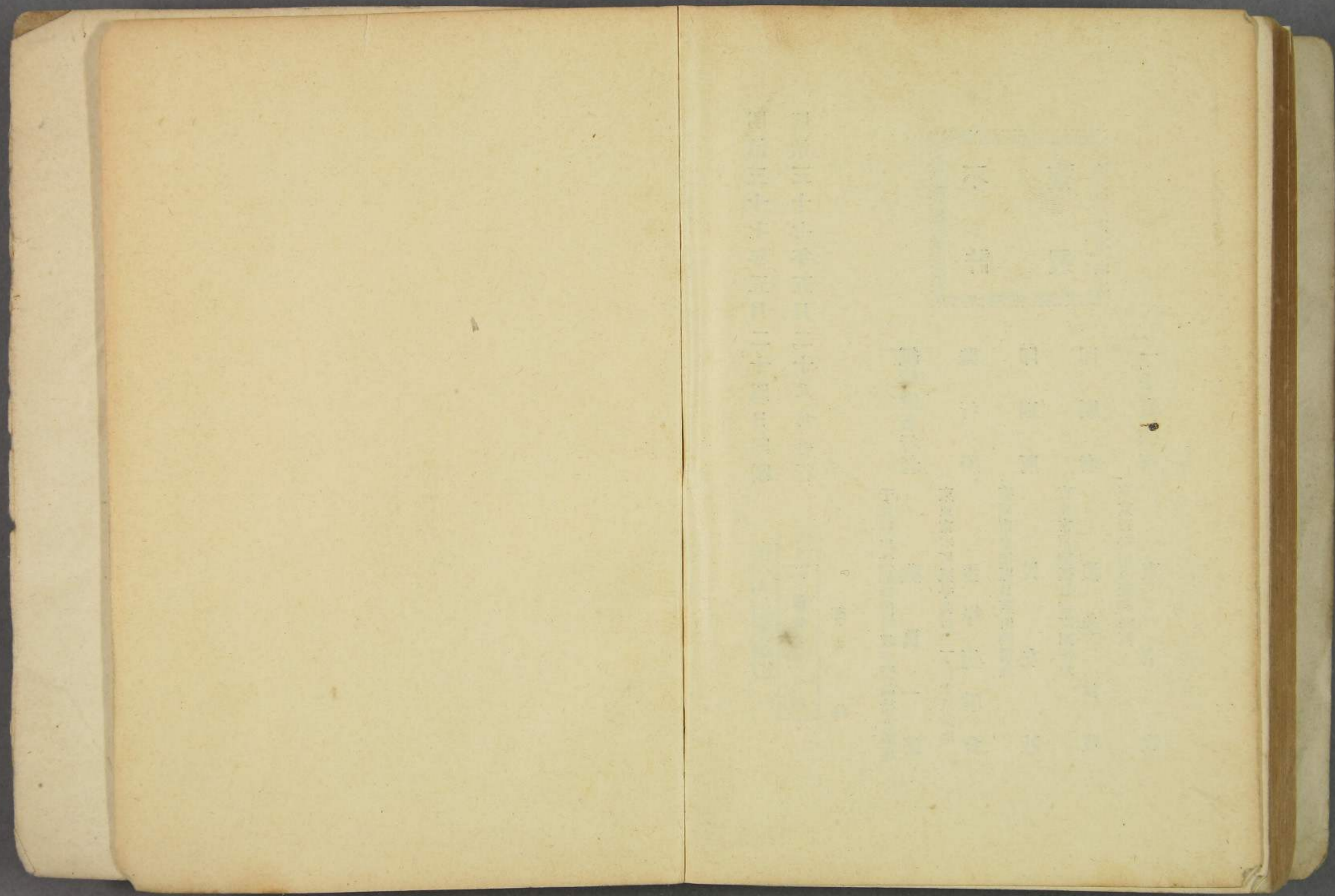
渡 邊 爲 藏

一手賣捌所

東京市神田區表神保町

東 京 堂

不 許
複 製



和久良